太利國ラベンナの*サン・アポリナーレ・イン・クラセ（西紀五三四—五三九）頃と見られる。回教寺院といふ感はさうしない。否寧ろ皆無といった方がいいかも知れない。つまりこのバシリカ會堂をカリフのオマールが回教寺にしたのである。

此境内にある多くの小建築を見て、次にシオン（Zion）の尼寺へ行った。尼さんが流暢な英語で盛に説明をしてくれ、地下室迄連れて歩いて見せてくれたが、どうも耶蘇教の傳説や歴史が判ってゐないので、そこの所が徹底しない。だから折角話してくれたのに何だか半分は了解し得なかった。尼さんはルーマニア人だといふ。

夫からヤッファ門の側にある城塞の一部なる謂はゆる「**ダビッドの塔」といふのへ上った。景色を見るのと、寫眞をとるのに洵に都合がよく出來てゐる。此塔の上から東方を眺め、「岩の圓蓋」の遠景をとったのを口繪26にだしておいた。案内人はずるけて上らず、番人か何かをつけてよこした。其番人は暴夜人特有のバクシーシュのほしさうな、さうしてずるさうな顔をしてゐたが、左樣な氣色は少しも外に現さず、上り下りにあぶないといって、危險らしい方に必ず自分がまはり、庇ふ樣にして歩き、さうして高所からあちこちを指して一一説明をした。以上見學を終り晝食のために歸

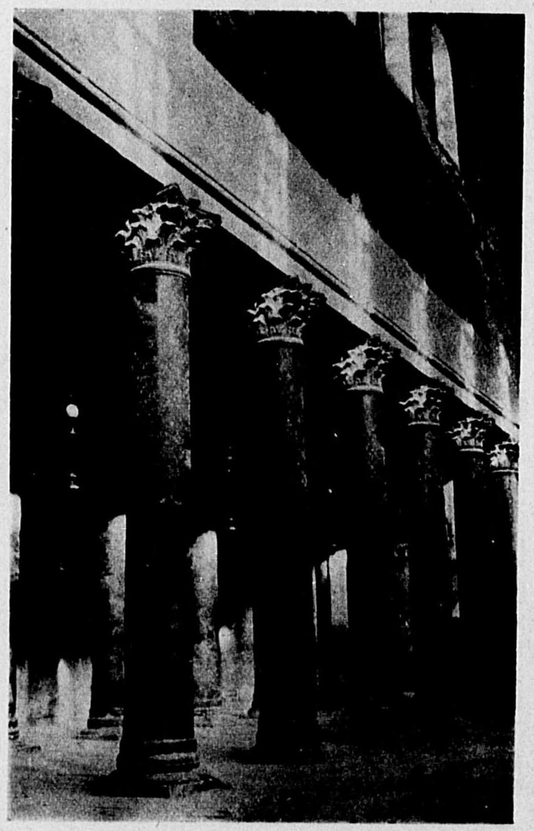
* S. Apollinare in Classe, Ravenna, (3-aisled basilica church).

** ヤッファ門の近くに城塞がある。中世以來ここをダビッドの城と誤稱してゐるさうである。現在の建物は第十四世紀の初頭に建造を始め、第十六世紀に增築をしたといふ。そこにある塔をダビッド塔と俗稱してゐる。

上。ベスレヘムに於ける耶蘇降誕會堂身廊　其一　（昭和十年十一月十四日）

下。同　其二　（昭和十年十一月十四日）

其名をかいたからさうは思はないが、この寫眞を見ただけでは、伊太利あたりのバシリカ會堂（一〇四頁註）、例へば「サン・クレメンテ」「サン・パオロ・フオリ・レ・ムラ」「サン・アポリナーレ・イン・クラセ」「サンタ・マリヤ・マジオーレ」等と始んど同じで、間違へても無理がない位似てゐる。下圖には内外側廊境の柱及び明層の窓がよく見えてゐる。



（昭和十年十一月十七日）
（昭和十年十一月十七日）

上。エルサレムのサン・ステパノ門全景
下。同　部分

此門はオリーブ山から眼下に見える、ソリマン（一五三頁註）時代のものといふ。土地の人は「メリー」門といふさうだが、これはマリヤの墓への近道にある門だからださうな。何故にステパノ門といふかといふと、ステパノが石で打たれるため此門から連れ出されたからだといふ傳說によるのである。ステパノ（St. Stephens）は耶蘇教傳導開始後最初の殉教者で使徒行傳に「……然るにステパノは聖靈に滿され……曰けるは「見よ、我天ひらけて神の右に人の子の立てるを見る」。ここに於て彼等大に呼はり、耳を蓋ひ心を合せて……彼を邑より追ひ出し、石を以て之を打つ」……とある。

宿をした。

午後は2.0に出發、ベスレヘムへ行き、耶蘇降誕會堂（Church of the Nativity）（口繪33）を見た。此はコンスタンチン帝が耶蘇降誕の傳說地へ建てたもので、亦「バシリカ會堂」に他ならないが、側廊が二つあるもの卽「五側廊バシリカ」（5 aisled basilica）で、身廊*と側廊**及び側廊間には堂堂たるコリント式の大柱が竝んでゐる。後陣***及び兩袖廊****の突き當りが何れも半圓形をなし、「三後陣型會堂」（Triapsidal Church）である點に注意すべきである。修理の個所も隨分多く、其上飾りつけ卽邪魔物も多くていけない。身廊の眞中に立って後陣を見たところが最も立派である（第一五五頁上圖）。

次に橄欖山へ行った。橄欖山は東方にあるのだから朝のうちでないといけないといったら、案內人は北にあるといふので、或はさうかも知れぬと思ひ、出かけたところ完全に逆光線で全然駄目。ここにも亦職業案內人の不親切さが遺憾なく發揮された。ベスレヘムも橄欖山も、何れもバスで極めて安價に行けるのに、事情がよく判らないため半日タキシを雇はされた。これは案內人が歩くのがいやだからである。併しここの案內人は、軍人上りで回教から耶蘇教に改宗したさうだ。英佛獨伊の四國語を話すことができるといった。道もよく教へてくれるし、バスの乘り方等はよく話してくれた。

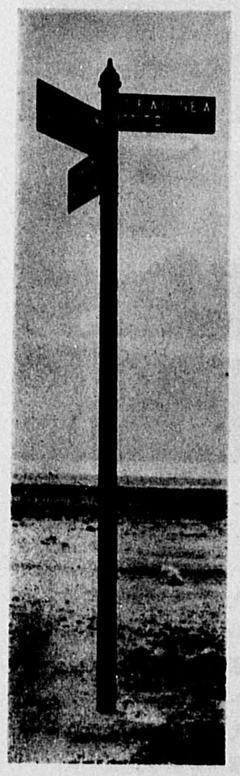
* Nave　　** Aisle　　*** Apse　　**** Transept

宿の玄關を出て左へ行くと五軒目位にハナニアといふ寫眞材料店がある。ここで現像させたが割合がよかった。順序をつけてみると、開路(特等)、エルサレム、ダマス、イスタンブール、ラクソル、アテネ(劣等)。アテネの現像は絶對にいけない、不親切で何とも手のつけようがない。是非ここで現像させる必要があるなら、一番大きな店へでも持參したら或はがまんができるかも知れない。

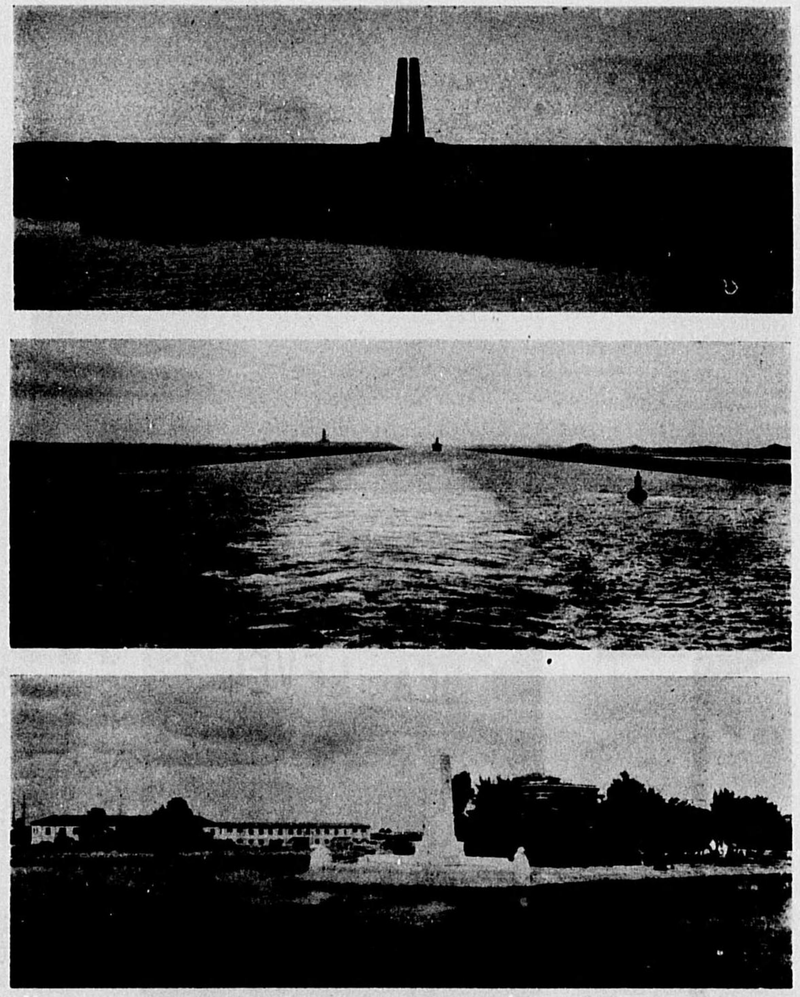
十一月十五日　金曜・好晴

昨夜寢る時思ひだして女中を呼び、寒くて風を引きさうだから、毛布を一枚貸してくれと言ったら羽根蒲團もをってきてくれた。それで昨夜は心地よく暖にねる事ができた。朝食後ダマスカス門の所で待ってゐたら、JERUSALEM—OLIVES といふ札を出したバスが來た。乘ったら直に出た。料金1ピアスタ。塔の上から市の全景を寫し(口繪28—32)、ゆっくりして次に博物館に行ったら、新館はできたが準備中だから六ヶ月先でなければ開館しないとの事。停車場はどこかと尋ねたが、はっきりしないので、暴夜人の市場の光景を見て一先づ歸宿をした。

午後1.45にジョルダン川と死海と見に行ったが、いろいろ見るべきものもあるかと思ひ案内人を連れたところ、ただ川と海とだけであった。これなら一人でもよかった。但往路にゲスセマネの會堂(Gethsemane)(口繪34)や、其處に生へてゐる橄欖樹等をみたから、實際は2.05にでた樣なものだ。



上。死海の景(對岸はトランス・ヨルダン)　(昭和十年十一月十五日)
下右。死海街道の立札　(昭和十年十一月十五日)
下左。死海街道の追分　(昭和十年十一月十五日)



上，スエズ運河に沿へる記念碑（昭和十年十一月二十一日）
中，赤岩丸甲板上より運河の眺め（昭和十年十一月二十一日）
下，スエズ港と運河の入口（右）（昭和十年十一月二十一日）
上圖はグレート・ビタ・レークに近く，運河に向て建ってる大戦記念碑で，其臺座に
1914 DEFENCE DV CANAL DE SVEZ 1918
の銘文がある。中圖は赤岩丸の船尾からの眺で，左は埃及で遙に上圖の記念碑が見えてゐる。右岸も亦同國。下圖はスエズの景であるが，ここからスエズの町は見えない。左方はイブラヒム港(Port Ibrahim)で，右方が運河の入口，其凸角に運河開鑿の記念碑が建ってゐる。今では此邊さぞ淋が荒い事であらう。

死海へ向ふ途中、山道に「海面」とかいた立札があったので、成程死海は海面より遙に低いだらうと思ったのと、夫から山を登り、峠を越して更に大分下り、先へ行ってから砂っ原のまんなかで、僅に車の轍のあとがついてゐると思はれる位の場所に、黑地に白字で DEAD SEA, JERICHO, JERUSALEM とした追分が立ってゐた。ジェリコ道を少し行くとジョルダン川がある。狹い川で何とかトラスの木橋が架けてあり、こちらがパレスタインで、橋を渡るとトランス・ジョルダンとなるので、橋の袂に兩國の關所があり、關守が頑張ってゐるが、袂で車を下り寫眞機だけ下げて橋の中央迄行くのは差支ない。元の追分迄引返して、夫から死海へ行った。湖畔に茶店があり、看板に "Kallia" Seaside & Health Resort, Ltd. とあった家で休憩して茶を飲んだ、何と沒趣味で殺風景な看板を掲げたではないか。初のところは「カリヤ」とよむとすれば、事實粗末な家だから「假屋」でもいいし、又「借屋」でも音は通ずる。若し「カライヤ」とよむと「空井屋」と當て字を入れられるが、死海の岸だから「鹹い屋」としたら一層面白くなるであらう。景色を眺めてゐるうちに、夕陽は西に大分傾きトランス・ジョルダンの禿山には薄日が横からあたってゐた。水は非常に美しい。ためしに指の先につけて嘗めてみたら澁い樣な辛さであった。鹽が27%入ってゐるとの事。暫く休んでゐたが、おそろしく淋しい氣持になってきた。日の入らないうちに歸る事にきめ、途中で「海面」の立札を記念に寫し歸宿したのは5.15。もうすっかり日がくれてゐた。「歐洲大戦前は馬車で往

復したので時間が大變にかかった。獨逸廢帝維廉二世は6頭輓の馬車で日歸りをされた」といふ話をきいた（第一五九頁圖）。

（昭和十六年五月二十五日　稿了）。

エルサレムのダマスカス門　（昭和十年十一月十三日）

ダマスカス門はヤッファ門同樣城壁內に入る最も重要なる出入口の一。944 A. H.（天文六年）にソリマンが修理したといふ。第十六世紀建築の一好例。

坡西土から坡西土へ

（歐洲の一部及び西亞旅行記）（第七回）

十一月十六日　土曜・好晴

金曜日は回教徒には極めて神聖な日で、「岩の圓蓋」の拜觀は許されないから、昨日は行くのをやめて今日にした。最早樣子は判ってゐるから獨りでよろしいが、道が少しはっきりしないので、門迄道案内を一人賴んだ。此男は割合に親切で、ちゃんと切符迄買ふ手續をしてくれた。夫から單獨で思ふ所を思ふ樣に歩いてみた。誰もついてゐないと、いろいろうるさい事がある。ある時は變な奴が二人で來て切符を見せろといった。こうなると私によく判らないから、切符を既に先方で切取った例の冊子を見せたら、これは昨日ので無效だといった。昨日は見せない日だといふ事を私が知らないと思ってこんな事をいったので、もの一枚僞物でも賣付るつもりであったかも知れない。これ以來もうどんな場合にも一切口をきかない事にした。午後は城壁を一巡した。

十一月十七日　日曜・不定

朝から少し物足りない天候であったが、8.0頃はよく晴れた。先づ聖・ステパノ門の寫眞をとった（第一五六頁圖）。此時墓の入口の番人か夫とも乞食か何か知らないが、大聲を出して何か言ったが、私に言ったのか、又どういふ事を言ったのか、全然不通であったから知らん顔をしてゐたら、いつの間にか傍へ來ていきなり左の上膊をつかんだ。何の事かまるで見當がつかないが、其行爲が餘り不都合だから、右の手で突き放したら、夫限り引込んで了った。此話はこれで終りだが、言葉の通じないのは困りものだ。こちらは年甲斐がないが、生れつき氣のながい方でもないから、あんな時にとるべき方法は他にない。あたりに誰もゐないので、始末にわるかった。

次にドームへ行ったが、相不變いろいろな奴が出て來て頗るうるさい。夫でも寫眞を三本ばかりとった。最後にエル・アクサへ入ってお分れをし、出ようと思ったら、上靴をぬがせながら小さい聲でバクシーシュ*といった。實に度し難き奴原である。上記の如き注意書と竝べて、暴夜文字が書いてあったが、夫れは同じ意味であらう。とにかくこんなのが掲げてある直下で無心を言ふのである。自分の國が土耳其の支配下にあらうが、英國の委任統治と

NOTHING MUST BE PAID
Under Any Circumstance, to Any Employee in the Mosque
Al Awkaf Administration

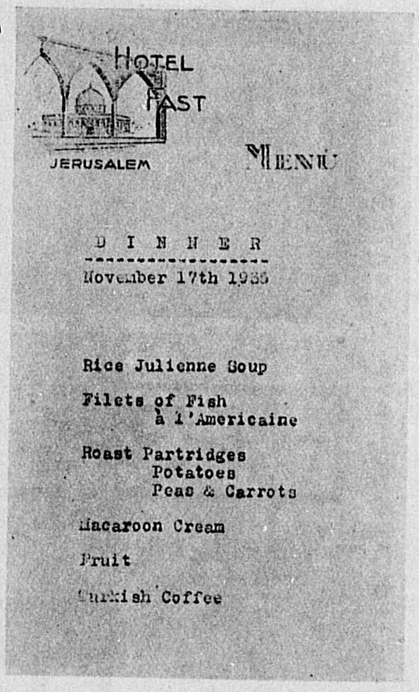
* バクシーシュ（Baksheesh, Bakshish）。心付け、祝儀、チップ又賄賂、歐羅巴にはこの言葉はないが、イスタンブールで一度きいた事がある。埃及、シリア、パレスタイン、印度等では隨所できいた。この言葉は土耳其帽を冠った奴に最も似合ふ樣である。バグダッド等は其本場だらう。但し昔はそんな意味には用ひられなかったさうで、字引には Bakshish is not alms, which it would be humiliating to an Arab to recieve. It is a present, a gift between princes. とある。暴夜人としては今では原意を失ったバクシーシュを貰ふことは寧ろ恥であるだらうのに、人の類さへ見れば、施與謝絶の注意札の直ぐ下で、心付の請求をするのだから、その厚顏無恥は骨の髓迄滲透してゐるのである。かくて親から子、子から孫と代代永久に傳へられるのである。

ならうが、そんな事はどうでもよろしい、唯金が欲しいのである。横っ面をいやといふ程はり倒してやり度い位に腹がたったが、ぢっとがまんをして默って注意書を指さして見せ、一言を發せずして擊退した。だから最後は膨れっ面をして境内を永久に去ったのであった。

晝食のため歸宿した時は少しもまごつかなかった。なぜならダマスカス門へ出たからで最も判り易い路である。晝食中驟雨一過、再び天氣になったが、溫度は下降した。午後は散歩に出て停車場を見に行った。ダマスの驛は回教建築をうまく取入れた立派なものであったから、ここのも定めてさうであらうと豫期したのに、これは何ともなさけないつまらない建物であった。驛から歩いて歸ったが、日曜日で店は閉って居り、人通も少なく大分物淋しかった。

歸りにキング・デービッド・ホテルといふエルサレムで特等だといふ旅館の前を通り、外からだけ見ておいた。開路市滯在中、宿屋の廣間にビラが下がってゐた時から名だけは知ってゐた。だからせめて外からだけ見ておいたのだが、設備は定めていいのだらうが、立方體をした家で面白くもおかしくもない外觀であった。ところがこの時から暫くして伊太利とエチオピアと開戰し、エ軍頗る旗色わるく飛行機は唯一臺しかなかったさうだから。そんなものは直につぶされて了ったであらう。かくて制空權を完全に掌握した伊軍の飛行隊は破竹の勢で進擊し、演習のつもりか何かでアヂス・アベバの猛爆をやったから、ぐづぐづしてゐては生命があぶないので、エ國皇帝ハイレ・セラシェ一世は開國三千年の歴史を棒に振り、身を以てパレスタインに蒙塵し給ひ、エルサレムに行き此ホテルに何泊かされたのであった。夫から先英國に落着かれるまで、どうされたか記憶しないし、又此ホテルに幾日滯在されたかどうかも記憶にないが、そんな事になるのだったら、大奮發をして小生もせめて一泊しておけばよかったと、新聞紙を見ながらつくづくさう思った事があった。但しこれは後の話、此時は敵になかったのはいふ迄もない。

昭和十年十一月十七日・ホテル・ファスト夕食獻立表



「ファスト」といふ名は、どういふ意味か知らぬが、普通なら「斷食」とか「精進」とかいふやうである。斷食館では變だから精進館といふつもりだらう。ところが泊ってみたら三度三度めしも食はしたし、又精進料理でなかった。ホテルの名はファストでも毎朝ブレークファストは滿足に食べられた。

ここの宿屋はさぞ高いだらうと思って、往來から敬意を表するにとどめ、泊ってみる意志なんか絶

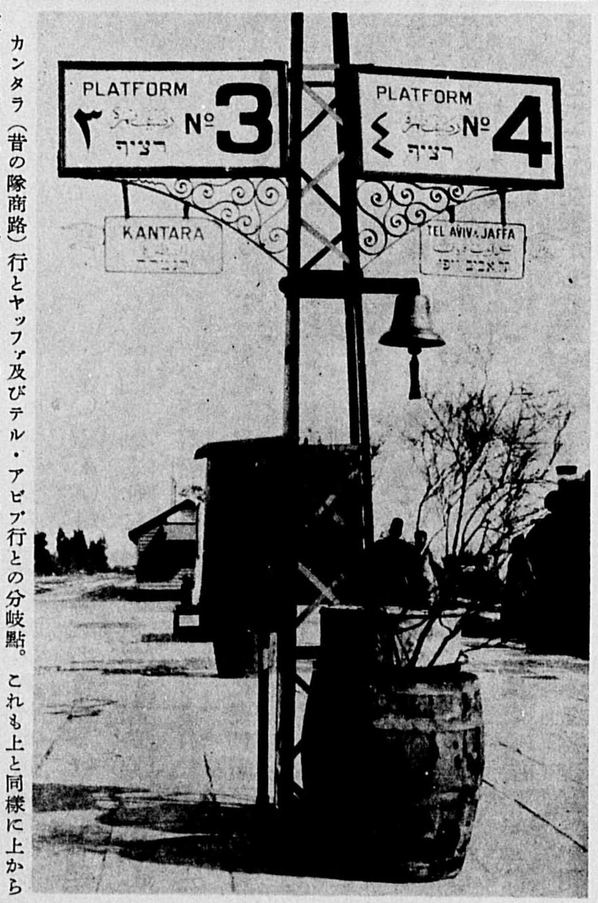
夕食は今夕が最後であるから、隨分落着いて食事をした。食堂の給仕はダマスの様にアフリカ產の煮黑ではなく、英國製の若い愛想のいい男であった。記念のために其夜の獻立表を掲げておく。

十一月十八日　月　曜・好　晴

朝食の時、この宿ではいつもグレープ・フルートがある。すきだから必ずとるが、一體どこから

エルサレム驛掛札

此驛には當時は立札がなかった。多分今でもないだらう。上から英、暴夜、ヘブライ文字。



パレスタイン鐵道リッダ驛(jn.)乘降場

カンタラ（昔の隊商路）行とヤッファ及びテル・アビブ行との分岐點。これも上と同樣に上から英・暴夜、ヘブライ文字で書いてある。3は7の反對の樣で、4はMをねかした樣だし、またギリシャ文字のシグマをヘたに書いた樣な形をしてゐる。

（兩圖共昭和十年十一月十八日）

輸入するだらうと思って、給仕にきいてみたら、ヤッファで澤山できる。國内で用ひきれず、外國へも輸出するのだといった。8.30に宿を出で9·0*エルサレム驛を發車した、車中は一人で一室を占領し、大に納って景色をながめながら行った。リッダ（Lydda）（地圖は5）驛で乘換た。左もないとヤッファへ行って了うのである。乘降場の風景は隨分異國情緒が横溢してゐた。英字とヘブライ文字と暴夜文字が幅をきかしてゐる。乘降場の番號札の下の三角形の持送の輪郭内を飾ってゐる渦線の唐草は不得要領で甚だ非美術的である（前頁下圖）。

西カンタラ驛立札

（昭和十年十月二十三日）

5.30東カンタラ驛（地圖は4）着。スエズ運河の東側である。下車した時は最早日は暮れて、照明も左程充分ならず、どうしていいか薩張判らなかったら、忽ち制服制帽のクックが出現したので助かった。ここで稅關の檢閲あり、荷物と人と長方形の渡船にのり、運河を渡

埃及國有鐵道で埃及國内を通ってゐるから最早ヘブライ文字なし。

* 今では鐵道が通じてゐるので、坡西土とエルサレムの間、安價に樂に旅行ができるが、『埃及聖地旅行談』に「……近頃はヨッパよりエルサレムまで鐵道が敷設されたので、旅客は少なからざる便利を得ることとなつた……」とあるのでみると、昔の旅行の不便さが想像できる。

り向ひ側へつくとそこが西カンタラ驛。カンタラとは「橋」といふ意味だとか。KANTARA ともQANTARA ともかいてある。漢字を當嵌めて「寒鰐」はどうか。最も覺え易いだらう。「坡西土からエルサレムへ行くのは開路行の汽車へのり寒鰐で乘換だ」。これでもう忘れっこはない。6.40發7.45無事二十四日間の旅を終へ、坡西土へ歸着したのである。着いたのはいいが、實は夜で少しばかり恐縮してゐたら、幸に南部商會の例の伊太利番頭、略して伊太番が群衆を押分けて迎に來てくれた。今夜歸る事はたつ前から南部さんには話はしてあったが、旅行中は半分は遠慮と半分はなまけとから、一度も音信をしなかったにも係らず、適當の處置をとってくだされたことは感謝に辭なき次第であった。私は早速伊太番に禮を述べ、宿は此前の通り「マリナ・パラス・ホテル」かときいたら、今夜は南部さんのお宅へ招待されるさうだといって、直に車で南部氏宅（地中海に面せる大きなアパートメント・ハウスのたしか四階の立派な住居）へ案内してくれた。ここで此夜と明夜と二泊する事になった。

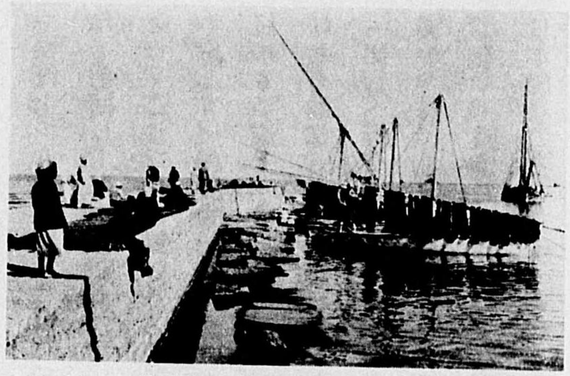
此度の旅行は25分間に歐羅巴から亞細亞へ行ったり、24日間に亞弗利加歐羅巴亞細亞と三大陸に跨がって歩いて再び亞弗利加へ歸って來たり、自分では可なり滿足はしたが、唯バグダッド見物をしなかったのは洵に遺憾であった。

（昭和十六年五月三十一日　稿了）

『歐洲の一部及び西亞旅行記』　終

坡西土から孟買へ

附錄



坡西土突堤一部　（昭和十年十一月九日）

坡西土に於ける最後の日，突堤の先端迄行ってみるつもりで出かけたが，行って見たところで渺茫たる地中海が見えるだけで，何のたしにもならないから，網船を寫してやめにした。

坡西土を解纜して孟買上陸迄21日間の日記をかいておく。孟買へ上陸してからは、日記體ではないが、『印度佛塔巡禮記』にかいておいたから、再記の必要を認めない。

十一月十九日　火曜・好晴

坡西土から歐亞旅行にでる前、11月中旬にここから印度行の船室豫約を南部さんに依頼しておいた。前回にも同氏を煩したが、ここから孟買へは日本船はないから、どうしても外國船に乘るのである。それで外國船のうち伊船もP・O・も乘客が多く歐洲から滿員で來るので、如何ともし難いからとて、獨貨物船ローテンフェルス（Rotenfels）に決めておいてくだされた。一等も二等もなく何れも平等で、孟買まで運賃2925ピアスタ、20朝6.0入港8.0解纜、約一週間でつくとの事に、非常にうれしく感じ、大に愉快になった。

銀行へ行って£100とったら今度は£99くれた。£1が手數料ださうで、此度はどういふものか大に安かった。孟買の東洋綿花と江商の支店長には一面の識もないが、ある方方より紹介狀を戴いてゐたので、船は獨逸のになった事と着が早くなったといふ大體の輪郭を飛行郵便で差出したりした。日本綿花の支店長のも戴いてゐたが、鞄の底へ入り込んで了ひ、當時どうしても見付らなかったので、紛失したものと思ひ込み、依頼狀は遠慮をしておいた。坡西土は町を獨りで歩くと隨分うるさい所だが、愈よ明早朝出發となると名殘惜しくなる。地中海の海岸で波の打寄せるところを歩いてみたりした。こんな事で午後はすんで了った。

十一月二十日　水曜・好晴

朝7.0に船はもう入港してゐるといふ。何か爆發の虞あるものを積んでゐるので、港内に入れないから、沖の方に碇泊したのださうな。8.0に南部さんの宅を辭した。然るに間もなく10.30解纜と聞き、9.30に南部商會を出て、艀で親船についた。此時は商會主の命により例の伊太番が同行して大に周旋をしてくれた。最初案内された室は氣に入らないので、室をかへさせたら、商船學校出の練習生の室と見え、入口の上に2 Kadetten といふ札が出てゐた。やっと落つき、番頭も歸って行ったところが、其あとで直に汽罐に故障があるから正午解纜だと宣告された。其位の事は何でもないと思ってゐたところ、次の瞬間得意の絶頂から失意の谷底へ叩き落されてしまった。

船は一週間や十日では到底孟買へは着かない。少なくとも十六日かかる、多分十七日目になるだらう。十一月二十七日につくと思ってゐたのが十二月六日か七日でなくては駄目らしい。私は直に再び南部の店に歸り、孟買へは豫定取消の手紙を書いて飛行便で出すべく依頼した。同氏も意外に

思はれたか、船會社へ電話をかけたりして聞かれたが、やはり要領を得ない。仕方がないからあきらめた。2925ピアスタで17日とすれば、一日には172となる。左程高くもない。こうあきらめて復船へ歸る事にした。伊太番は復送ってくれた。これは大分うれしかった。船賃を拂ったら£30とった。英封度で計算するものと見える。私の疑問は一ヶ月も前から船室を賴んであったのに、どうして得られなかったかである。

夕食の時船客一同初めて一室に會した。獨逸人三人、私と船長と、五人一緒に食事をした。水をくれないで紅茶をくれる。紅茶はいく杯でもくれるが、二杯のむともう充分である。船の時計は私のより20分進んでゐた。食事の時船長は*マルピ(Mulpi)迄十二日かかるが、上陸して汽車で孟買へ行くかときいたから、やはり船で行くと答へたら、それならそんなに急く旅ではないではないかといった。急ぐのだが、そんなところでは樣子も判らないし、汽車の都合も判らないし、それでやめたのである。驟雨が來たり、眞っ暗に曇ったりいやな日であった。

十一月二十一日　木曜・好晴

* 後に記すが、マルピといふ所はない。マルキならある。果してさうならマンガローヲの北20哩位のところで、寒村らしい。とにかくマンガローヲでないと汽車はない。マンガローヲからだと大迂回をせねば孟買へは行けない。

午後0.30頃スエズ港に着いた。去る10月7日坡西土に上陸した時碇泊してゐた和蘭船「DEMPO」は、瓜哇へ行った歸りと見え、スエズで出遇った。日本船「りばぷうる丸」にもあった。

十一月二十二日　金曜・好晴

午前2.0にはまだスエズにゐたが、5.30頃に眼がさめた時は動いてゐた。此時東天を見たら新月とあけの明星とが並んでゐた。此日一日航走して漸くスエズ灣を出ただけ、午後6.0頃ツバル(Tubal)海峽の紅白光の燈臺が見えた。今日の天氣は實によく晴れ亘ってゐて、シナイ半嶋の山も埃及本國の山も、一木一草なき峨峨たる有樣ではっきりとしてゐた。紅海では太陽が海から出て海に入る。

夜行水を試みた。十九日以來入ってゐないので、給仕に言ひつけたら、蒸氣がない(M・S・だから)から少しぬるいが我慢してくれといった。ところが行ってみたら、夫は少しぬるいのではなくて、少し溫い程度。いくら鹽分を含んでゐるにしても、これでは風を引くから、漸くバケツに一杯の眞水の湯で身體を洗って出た。此船は食事はうまいし、部屋は一人だし、朝のおめざめに珈琲を澤山くれるし、申分はないが、入浴と洗濯とだけがどうも始末にわるい。これが缺點である。

十一月二十三日　土曜・好晴

坡西土から孟買へ

朝6.25に太陽が水平線から顔をだした。7.17迄月とあけの明星は光ってゐた。此星の光り方はおそろしく執念深い。服裝はあひの肌着に白ヅボンに黑の夏上衣となって丁度よろしかった。船長は暇があると蓄音機を鳴らしてゐる。十五歳になる男の子が學校で落第ばかりしてゐるが、怠けもので平氣である。あれでは大きくなって見込がない。食事に箸をつかって見るがどうもうまく行かない。南十字星を知ってゐるか。此船はハンサ・ラインでローテンフェルスとは赤岩といふ意味だ。といった樣ないろいろの事を話す。以前京都の寺町の本能寺に居られた井田日孝師とよく似た(體格も容貌も)人で、隨分面白い人であった。

十一月二十四日　日曜・好晴

東に向って航行してゐるのだから、毎日いくらかづつ時計を進めて行く。坡西土をでてから總計45分進んだ。肌着は今朝から半袖のクレープにした。部屋で煽風機を廻し始めた。紅海の入口なるペリム(Perim)嶋へは火曜日の午前1時頃着くかも知れぬさうな。どうせ見るものはないにせよ、おそくなり序に夜が明けてからにして貰ひ度い。夜中では何も見えないから始末にわるい。午後左舷甲板上風があって涼しいので、甲板椅子を引張って行って其上で風に吹かれながら何度も眠った。

十一月二十五日　月曜・好晴

終日風が隨分吹いた。甲板に浪が來て困ったが、夫でも涼しいから部屋へ入らなかった。午後5.0頃左手に多くの嶋が見えたが、俗に「十二使徒」(12 Apostles)と呼ぶさうだ。其嶋の一つに燈臺がある。船長曰く、あの燈臺守は一年交替、アデンから毎月一回食料を運ぶ、さうして No woman allowed だと。

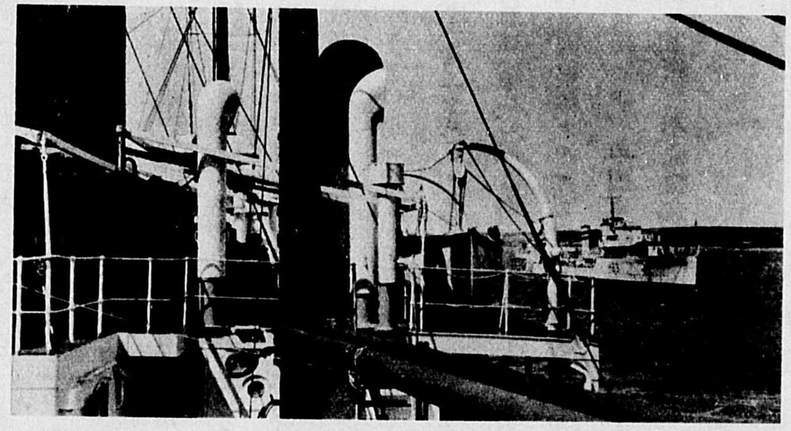
晝食中船員が一人慌しく食堂に入って來て、入口に近く食事をしてゐた事務長に耳打をしたら、並んでゐた機關長と一緒に直に出て行ったが、續て船長はナイフもフォークも投出して飛び出してしまった。あとできいたのでは、船火事を出しかけたとかで、あわてたらしかった。ペトロールを滿載してゐるから、大事件になる所を、幸にうまく消しとめた。暫くして歸って來てもう大丈夫だといった。

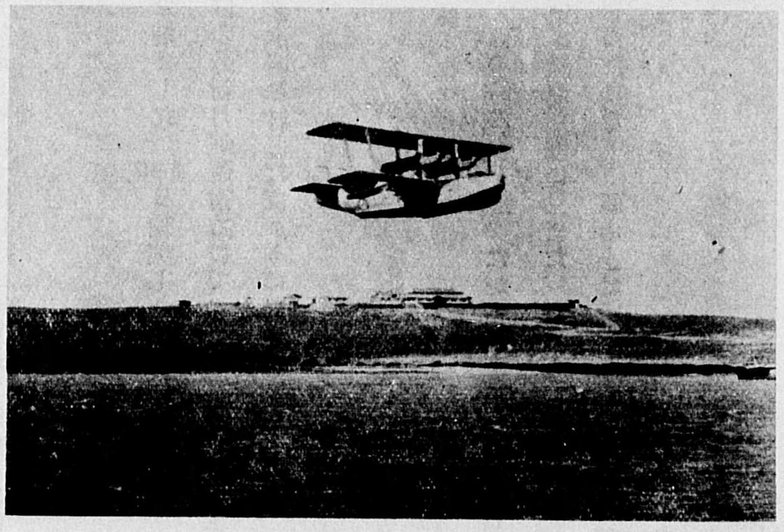
十一月二十六日　火曜・好晴

午前10.30頃ペリム嶋着。英國の小軍艦二隻碇泊してゐた。風は昨日同樣强く吹いてゐる。獨逸人一行四人と和蘭人一人、何を見るつもりか上陸し、晝食の時は私一人であった、午後3.30喇叭二聲、3.50に船は動きだした。赤岩丸は最新式のM・S・だから、給油の爲此嶋へよったのださうな。此嶋の

上、赤岩丸船尾の旗（一〇・一一・二一）
中、紅海の日の出　（一〇・一一・二二）
下、紅海の午后　（一〇・一一・　）

スエズ運河を航行してゐる間は、鍵十字の旗を掲げてゐたので、記念のつもりで寫しておいたのが上圖。大戰記念碑を距る遠くない時にとったもの。中圖は十一月二十二日の朝早く寫した寫眞で、此時は東方に雲があり、太陽は水平線から出なかったが、雲の破れ目からど光がさしてゐる所。紅海では太陽が海から出て海に入るのである。下圖はとった日を忘れたが、二十二日の午后から二十五日の午後に至る四日間のある日で、雲が出て太陽をかくし。大變面白かったから逆光線で寫してみたのである。





上，ペリム嶋碇泊の軍艦　（昭和十年十一月二十六日）
下，飛行艇が離水した所　（昭和十年十一月二十六日）

紅海の入口なる Bab el-Mandeb にペリム（Perim）といふ英領の小嶋がある。赤岩丸は M. S. なので，給油のため此小嶋へよった。上圖近景は赤岩丸甲板の一部で遠景は嶋。中景の軍艦は二隻碇泊してゐたが，小さいから砲艦かも知れない。下圖の飛行艇も，此頃では舊式に屬するものであらう。

一端に三棟並んで建ってゐた銀色に塗ったタンクは5.23迄は確かに見えてゐた。風は漸く凪ぎだした。

十一月二十七日　水曜・好晴

此朝時計20分進む、解纜以來最早75分進ました。5.40日輪美しき水平線に沒した。午後6.40頃恐らくこれより細いのはあるまいと思はれる位の最新月が西南方にでてゐた。赤い色の糸の様な月で、6.50にはもう水平線下に入って了った。今夕水ばなれしたばかりの鹽水につかったが、もう風を引く心配はない。

十一月二十八日　木曜・好晴

風は殆んど凪ぎ海面は平靜になった。7.42の時に8.0を打ったから、又18分進んだわけである。午後0.0—3.0位迄ガルダフィ（Guardafui）といふ嶋が左舷に見えた。風は再び強くなり、止を得ず時時自室に戻った。甲板は打揚げた浪でびしょぬれになり、頭の上はいつも晴れてゐたが、行手の方は大曇りで頗る不愉快な天氣であった。

十一月二十九日　金曜・好晴

朝時計をまた18分進ます。船長曰く、マルピ着は十二月三日朝になるだらう。孟買着は十二月七日、おそくて八日なら大丈夫だと。私のもってゐる地圖は相當に精しいが。いくら地圖と首引してみても、印度の西海岸にマルピ（Mulpi）といふ所は見出せない。其初めについてゐる總索引をみると、マルキ（Mulki）といふ地名がある。マンガローワ（Mangalore）の北20哩位の距離、多分これであらう。北緯13°東經74½°位に當ってゐる。果してさうなら、現今は知らぬが當時は汽車が通じてゐなかった。恐らくこんな所だからD・B・はあるまい。食ふものも泊る所もなし、下手をまごつくとマンガローワ迄ガタ馬車も苦力も雇ふ事ができないかも知れない。朝着くとして餘程奮發して20哩を歩いてマンガローワのD・B・へ一泊し、翌日朝9.05（當時の時間表による）にのり翌朝マドラス着、1時間餘りで孟買行急行へのると其翌朝10.15に着く。さうするとうまく行って六日になる。而も汽車中難行苦行をせねばならぬ。だから斷然上陸は廢案とし、船で行く事に決めた。

十一月三十日　土曜・曇後晴

朝曇天で風あり、時計22分進む。9.30には晴天の程度となり、其後は一曇一晴、午後天氣は益益良好となった。風もさう強くなく、從て浪も左程でもなし。

十一月は今日で愈終りである。九月五日神戸解纜後、浪の上で暮した方が多い。故國を後にして

以來今日で八十七日、船の上で51日、陸上にゐたのが正味36日、埃及旅行は先づいいとして、後の分は汽車中の2日と自動車中の2日と差引くと32日となる。外國へ行く事を洋行といふが、成程大洋の上に浮びに行くのだと明らかに認識し得たのは、此度の旅行の大收穫であった。併しもうつくづくいやになって來た。

十二月一日　日曜・好晴

今朝時計18分進ます。浪は殆んどなく至極平隱になった。室の圓窓から完全に旭日の昇天を見る事ができた。大圓の中心に船があり、圓内及び圓周上には、點點たる雲と水の他に一物もなく、時に飛魚が水面をかすめて飛行してゐる位のことで、光景は頗る雄大である。夜になって月は中天に懸り、大分大きくなってゐた、いい月夜で甲板は大變涼しかった。午後7.0船長はマルピを距る約450浬だといった。

十二月二日　月曜・好晴

今朝も好晴で平隱。時計18分進む。晝食の時、明朝6.0マルピ着の豫定と船長が話した。夜は絶好の月夜。甲板では涼し過る位であった。今夕入浴ができた。

十二月三日　火曜・好晴

朝5.50に6.30の鐘が鳴ったので見ると、昨夜のうちに40分進んだのである。坡西土からこちらへ殆んど毎日進ませたのを合せると2時間49分、夫に40分を加へると、約3時間30分となる。7時間の差が半分になったわけで、大分緩和できたことになる。

マルピでもマルキでも、遠淺なので遙かの沖に碇泊したから、人家等まるで見えない。9.0頃からペトロールの入ってゐるドラム罐を艀に積み始めた。天氣は極めて好く風はなく暑い。丁度先月の今日はイスタンブールに着いた日だ、早いものでもうあの時から一ヶ月たって了った。

海中に白い長楕圓形をした長六寸位のものが二つ浮いてゐた。何だらうと思って船縁から眺めてゐたら、船長がやって來て「ポルトガルの軍艦」(Portuguese man-of-war) だといった。若しさうなら色は青い筈だと抗議したら、いや白いものだといった。海中に下がってゐる觸手や感觸體や其他も少し短か過る樣だし、どうも變だから雙眼鏡を持出して覗いたところ、烏賊の甲羅に烏帽子貝がついてゐたものであった。一つの甲には少しついてゐただけだが、もう一つの方には多數下がって

* エボシガヒ一名ツメガヒともいふ。節足動物のうちの甲殼類のうちの蔓脚目のうちの眞正蔓脚亞目に屬する動物で、「えぼしがひ」科に「えぼしがひ」や「かめのて」等が入り、「ふじつぼ」科に「ぶじつぼ」等が入ってゐる。

坡西土から孟買へ

ゐた。其觸手を三尾の魚が攻擊してゐるらしく、近付いては離れ離れては近づき盛に活動してゐるうちに、どうしたはづみか一尾がやられたと見え、水中を四五回輾轉したが、遂に横になって浮上ってしまった。これは丁度午前10.30の出來事。實に珍らしく面白いものを見た。其他ギンクヮクラゲ(銀貨水母)も澤山に浮いてゐた。上から見たところでは盤の直徑約2cmで黃白色、射出してゐる觸手は靑色であった。先年鎌倉の海岸で見たものより少しく大型であった。

晝食の時船長は土曜の午後か、ことによると日曜の午後には孟買へつくが、土曜の午後はどうせ用が出來ないのだから、日曜でも同じ事だといった。どうも怪しからんから私は先刻の「ポルトガルの軍艦」の話を持ち出した。『あの白い長楕圓形のものはポルトガルの軍艦ではない』「夫ではなんだ」・『あれは烏賊の甲に烏帽子貝*がついたものに魚が三匹だ』「併し自分の見たのは確かにさうだった」といって中中投降しなかったが、私は雙眼鏡で見たので誤りはないといったのでやっと引下がった。夫でも尙ほ其話を蒸返してきて、Portuguese man-of-war は日本にもゐるかときいた。面倒だから居ないといったら、待ってましたとばかり、日本には Japanese man-of-war がゐるだらうと與太を飛ばし、旗色がよくないものだから、話題を轉じて日本でも鮫の鰭を食用に供するか

* 烏帽子貝では判らないから、どうせ同じ蔓脚動物で親類同士だから「フジツボ」(barnacle) といってみた。フジツボ(富士壺)といふものを知ってゐるかときいたら、知ってゐると答へた。併しこれはどうも怪しい。

ときき、とうとう胡魔化してしまった。

午後になって又甲板で船長に出遇った。何か話をしてゐたが、急に思ひ出した樣に自分の書物を見てくるといって室に入って行った。暫くしてから出て來て自分の書物には「ポルトガルの軍艦」の事が書いてないから、あなたのほんを見せてくれといった。私は本なんか持ってゐないけれども、よく知ってゐるのだどいったら、漸くのことで承知したようであった。餘程さう信じ切ってゐたものらしかった。

抑も「ポルトガルの軍艦」といふのは、和名をカツヲノエボシ(鰹烏帽子)と稱する一種の水母である。讀者諸者はクラゲといへば常に食用に供する「ビゼンクラゲ」か、乃至はよく海岸に打上げられてゐる「ミヅクラゲ」の樣なものばかりと思って居るか知れないが、凡そクラゲと名のつくものには數多くの種類があり、こんなのでもさうかと思ふ樣なものもある。中には淡水に產するものさへある。

其本籍を詳しく書けば、腔腸動物のうちのビドロ蟲類のうちの管水母(クダクラゲ)目、鰹烏帽子科に屬する變挺な動物で、普通は暖海の產。氣胞があって夫で海に浮んでゐるから、管水母目の下にもう一つ囊泳亞目といふのがあり、其中に入ってゐるが、大きいので長徑10cm位ださうだから、第一烏賊の甲羅では大さが異る。Portuguese man-of-war といふのは英の俗稱で、フヰサリア・フヰサリス (Physalia physalis) といふ歷とした學名をもってゐる。又烏帽子貝といふのは軸の先に五枚の貝がつき、身體

は其内にゐて臺脚を動かして食物を得るのであるが、杭等に附着してゐる奴は一所に固定してゐるから、いくら海水が流れるとしても、食餌をとる點に於いては、海中に移動する浮木等についてゐる奴よりは何割か損なわけである。だから海中に浮いてゐる甲羅等につくのは大分頭のいい奴である。隨分前の事だが、筆者は海龜の背中に付着してゐる例を見て、恐らく烏帽子貝中では最優等な位置を占めたものであらうと思った事があった。とにかく烏賊の甲羅の下からゴチャゴチャと此等の臺脚目の動物が逆さに下り、下に魚が三尾泳いでゐたのだし、いくら波がないといっても漣はたってゐるのだから、私の様な視力の鈍い眼では、遽に何物だか判斷できなかったのである。今日は終日勿體ない程の上天氣であった。

十二月四日　水　曜・好　晴

南十字星を見るつもりで早起、甲枚に出てゐたら船長が出て來て教へてくれた。一昨朝想像できめてゐたのは誤りで、ほんものは東南に水平線に近く寢轉んでゐた。

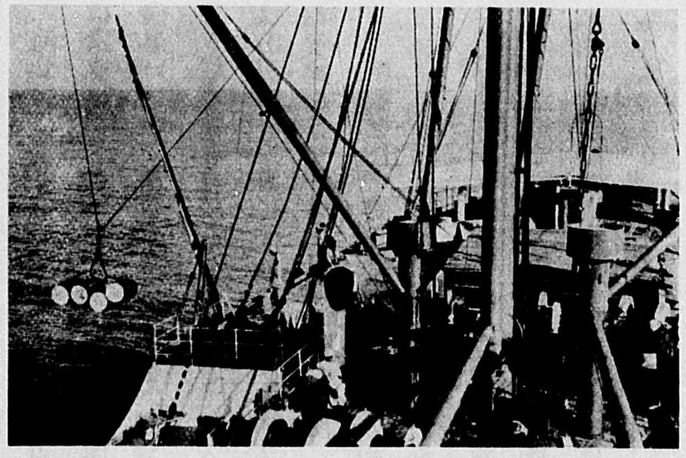
8.0頃から復船が押寄せて來て、ドラム罐を積込んで陸へ運びだした。朝の間に船の周圍を見てギンクァクラゲを數へたら28ゐた。昨日問題になってゐた烏賊の甲羅は、今日も亦二つ流れよって來たが、もう船長は見ても知らん顔をしてゐた。案ずるに完全に閉口したらしい。午後1.0にはクラゲの數も增し、見渡す限り點點としてゐた、152迄は數へたが、少なくとも數百乃至數千又は夫以上の數が、そこいらに浮いてゐたのであらう。

隨分暑く、甲板で仕事を監督してゐる高級船員迄が半袖の肌着一枚。船に乘ってゐる獨大（獨乙大工）は素裸體でショート・パンツ一枚、印度人と同じ事だ。歐羅巴人で氣取って厚着をしてゐるのは行儀がいいのではなくて氣候のせいだ。歐羅巴では寒くて裸體になれないと同時に、印度では（北の方は別だが）暑くて着物を着てゐられないのである。3.20に荷揚げ全部すみ、4.10に動き出した。昨朝も今朝も太陽は山から出て海に沈んだ。今夕は6.02に沈み6.45になっても西の方は薄紅色をしてゐた。夕食の時船長はあともう一ケ所で孟買だといった。こうなると少し名殘惜しくなる。夜は大變に月がよかったので、甲板を長い間散歩した。

十二月五日　木　曜・好　晴

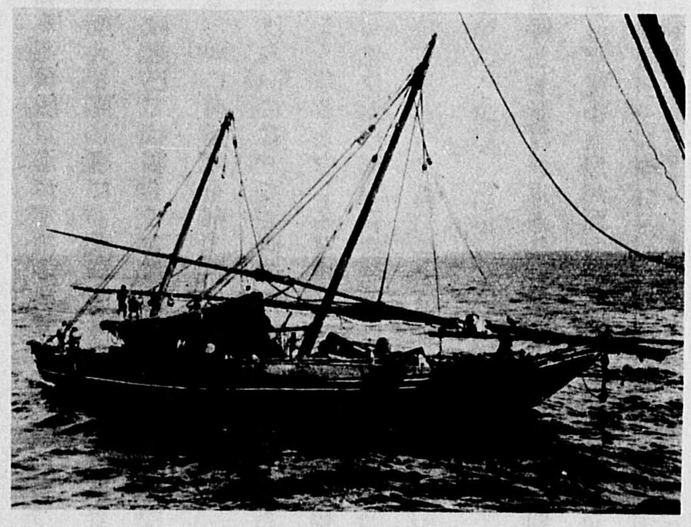
陸に近いせいか、山を雲との關係は何とも形容ができない程面白かった。7.05船長の謂はゆるママ*ゴアの港口に投錨した。押寄せた船はマルピより形が面白い。ペトロールの罐をあげ始めた。何を

* 水先案内の船には MORMUGAO とかいてあり、白耳義製セメント袋には MARMAGOA. 地圖には MARMAGAO とある。葡領ゴアの近くの町。



ママガオ所見　其一　ドラム罐を艀へつむ所。

（昭和十年十二月七日）

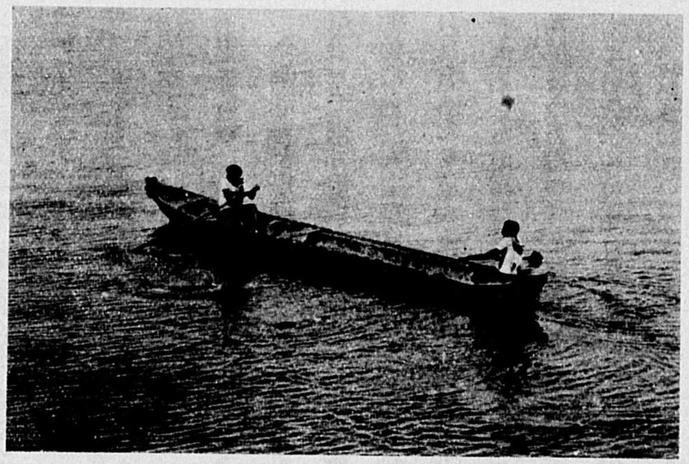


同　其二　ドラム罐を積んだ艀。

（昭和十年十二月七日）

美しい Papilio hector が群をなして船へ飛來した。獨逸客の一行の中の寫眞師、昆蟲採集に趣味のある我黨の士であると見え、捕蟲網を持ち出して甲板を駈け巡った。其種類は印度の庭園に多くゐるから、いくらでも捕れる。先年南印各所のダク・バンガローの庭園等で、何疋でも帽子で伏せた位だから、いま騷がないでもよろしいと教へてやったら引込んだが、夫でも早く捕りたかったと見え、午後も復網を振りまわしてゐた。併し遂に一疋も捕れなかった。實は私も捕り度かった位美しかった。

此邊ギンクックラゲは一疋も居ず、鳥賊の甲羅も浮いてゐず、至極平凡に終った。シジミテフ一疋と蜻蛉一疋が飛來した。パピリオ・ヘクトルは後3.30に見たのが最終であった。獨大は今日も亦素裸體にショート・パンツ一つで仕事をしてゐた。



ママガオ所見　其三　獨木舟　（昭和十年十一月五日）

十二月六日　金曜・好晴

坡西土から孟買へ

好晴無風，海面には漣があるだけ。ドラム罐を積む艀の間に，小さい二人乘った舟がきた。氣がついてみたら樹幹をくりぬいて造ったほんとうの獨木舟なので，早速甲板上から見下ろして一枚とった。

此朝は5.45から6.35迄最上甲板にゐて夜のあけるのを見た。南十字星は今朝もよく見えた。印度の苦力は話にならない。甲板の上に手鼻をかんだり痰唾を吐いたりするが、誰も何とも言はない。氣がつかないのか、あきらめてゐるのか、とにかく船の幹部の責任であらう。午後から風が出て夜に入ってもやまなかった。

十二月七日　土　曜・好　晴

今朝甲板を片附けてゐたから、扨ては出かけるのかと喜んでゐたら、7.20になってまた昨日の一團がやって來て甲板へ踊込んだので悲觀して了った。昨日のセメントの袋をあげるにつき、適當の指揮者なく、人夫頭は頭がわるく大混雑をした。獨逸水夫一名甲板へ唾を吐いた。これでは印苦の惡口は言へないばかりでなく、取締なんか出來る筈はない。

セメントの積替は2.10に終って皆引あげた。あとは嵐のあとの靜かさ、こんなだと4.0頃には出かけるだらうと思ってゐたところ、明日でないと拔錨しないとあった。孟買へおそくとも17日目にはつくといったのはまるでうそであった。今日は正に18日目である。

十二月八日　日　曜・好　晴

6.40に一船來り又荷揚を始めた。これでは昨日出なかった筈である。朝食の時、今日午後孟買に向ふ筈だといったが、もうほんとうにはしないでゐた、11.0になっても尙ほ盛にあげてゐたから、併し正午になって仕事を終り、食事中に拔錨をした。動き出したのは0.20であった。最上甲板卽ち羅針盤のある甲板に昇り二時間ばかり景色を眺めた。化物の樣な大きな鯨らしいものが鰭を動かして泳いでゐるのが見えた。

もうおしまひだから、食後も上に行って暫く居り、下の甲板にも長時間ゐて歸室した。夜も昨夜同樣いい月で、今夜のは殆んど圓かった。明日は午前9.0頃孟買港に投錨し、そこから波止場へつけるので、正午頃には全部片づくといふ事である。

今日は獨逸貧民救濟の爲、國民一同一菜日ださうで、朝麭麭、晝煮込、夕煮込(但し晝の餘)で、ハムだけが特別お負けであった。船長は Winter relieving fund にするのだといった。船客も船員も總て同樣であった。これはいい事と思ふ。腹をへらして貧苦を偲ぶのは、日本でやったらどうかと思ふと此日の日記に書いておいた。

十二月九日　月　曜・好　晴

9.0孟買灣内に碇泊。役人來り旅券の檢閲をした。ビルマの分も序にくれた。赤い色の紙に「上陸

許可、蘭貢水上警察署」と印刷してあった。さうして遂に11.30亞歴山波止場に横付けになった。甲板へ出て見て少し驚いたのは、波止場に日本人が十數人居り、内婦人二名を數へた。これは實は私のため態態來てくださったことが後に判ったので、大に恐縮をしたが、船のつく日も申出さなかったし、知らない人にこんなに迄して頂いた事は未だ經驗がないから、初めは何だか見當がつかなかった。だから船の上では知らん顔をしてゐたが、愈横附になってから、其中の四五の人が船内に來て、私に言葉をかけられたので、初めて氣がついたのであった。

下船して皆さんに初對面の挨拶をし且つお禮を述べた。併し後ではTさんとHさんとSさんと、T夫人とH夫人の他は記憶にない。宿もいろいろ相談したが、先づ最初江商宿舍へ來て、暫くして東綿の宿舍に移ったらどうかといふ樣なことになり。萬事よろしく願って先づ Hornby Road の江商宿舍の「八角堂」に落付いた。先づ湯に入った。此湯位有難くうれしかった事はなかった。其有難味は恰も昨日の出來事の樣にはっきりと記憶に殘ってゐる。此月の二日に入ったきり、今日で八日目だから、さうして眞水の湯で、風呂の外で垢を落す事ができるのだから、スリッパア・バースの樣に氣味の惡い事はないのである。

Hさんは何でもしてやるといってくだされたので、いろいろお願ひをした。T氏夫人の話では、大正十一年十一月二十二日、故東紡社長A氏の一行と共に、アジャンタ窟院の見學をした時、Hさんは自動車を運轉しながら同行されたとかで、そんな關係もあり、一層親みを覺え、遠慮なしに勝手な事を申出した。其中で一番大事なのは旅行の見積をたてるべく、クックへ申込む件であった。普通に申込んでもするにはするが、二日や三日では埒があかないから、これは一つ早くさせるため、江商の手を煩はさうと決めた。

若し十二月十三日以後にでて、來年一月十四日正午迄に孟買に歸着するならば、さうして同じ線路を往復するならば各等*共往復運賃を合計した額の⅓を割引する、即ち2のものは1⅓になるから、さうしたらどうかとクックで言ったさうだ。若し十四日の正午より後れると割引は無効となり、全額との差額を追徵されるのだとHさんは態態知らしてくださった。これは明日決める事にした。夫で先づ南印方面を第一回に歩いてこよう、これなら一月十四日に歸れるだらうと考へた。

夕食は江商宿舍在住の社員一同、夫妻同席安着を歡迎してくださった。故東洋紡社長Aさん及び當時の江商社長Kさんの紹介で、一面の識もなかった孟買存住の關係日本人各位の配慮を煩すことになったのは、今でも衷心感謝してゐるのである。

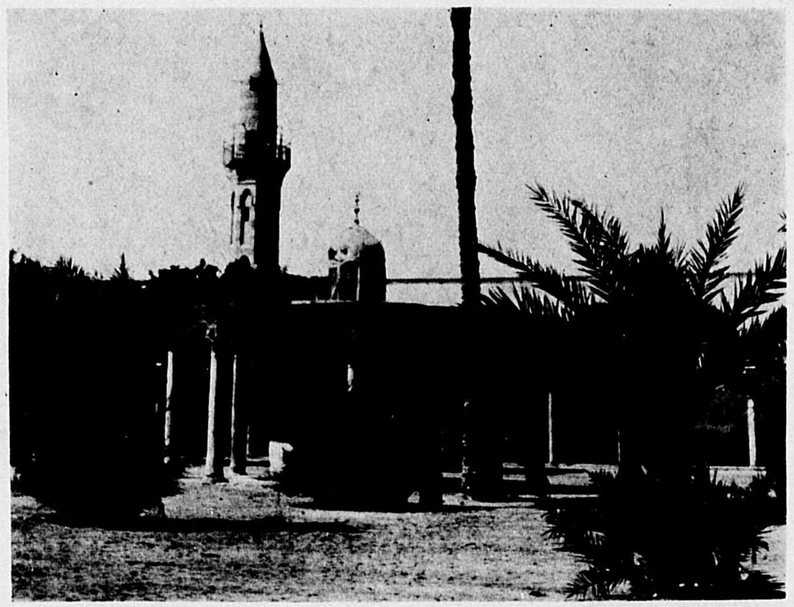
（昭和十六年六月一日　稿了）

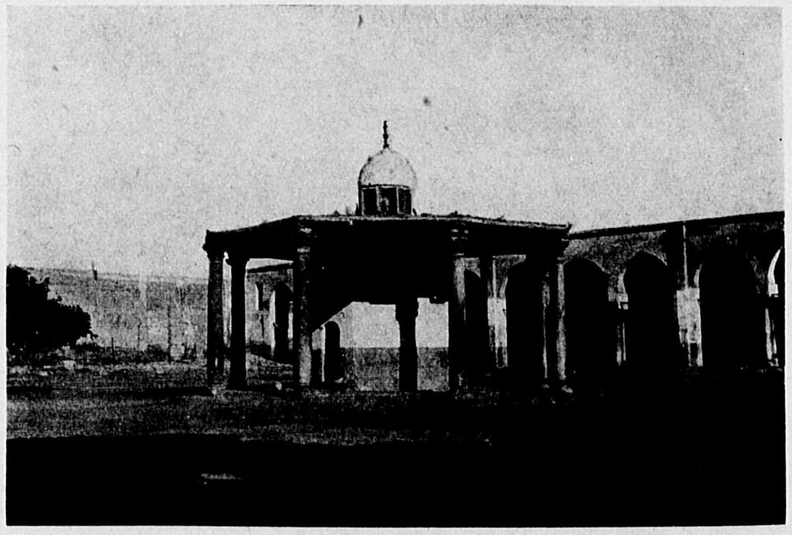
* 耶蘇降誕祭から新年へかけての休暇に旅行する人の便を圖ると同時に、鐵道會社も收入の一助とするため、つまり一舉兩得一石二鳥といった樣なつもりからか、年末から年始にかけ、各鐵道會社で「コンセッション・チッケット」—Concession Ticket—といふのを發行してゐる。つまりクリスマスの大割引券である。例へば私特權切符とか特許切符とかいふ意味だらうが——が南印方面の旅行に、昭和十年十二月十四日に出て、翌十一年一年十四日前10時15分孟買へ歸着したが、この運賃普通ならRs. 270 以上となるのに、夫が 181/40/0（一八一ルーピー四アンナ）ですんだ。

『坡西土から孟買へ』 終

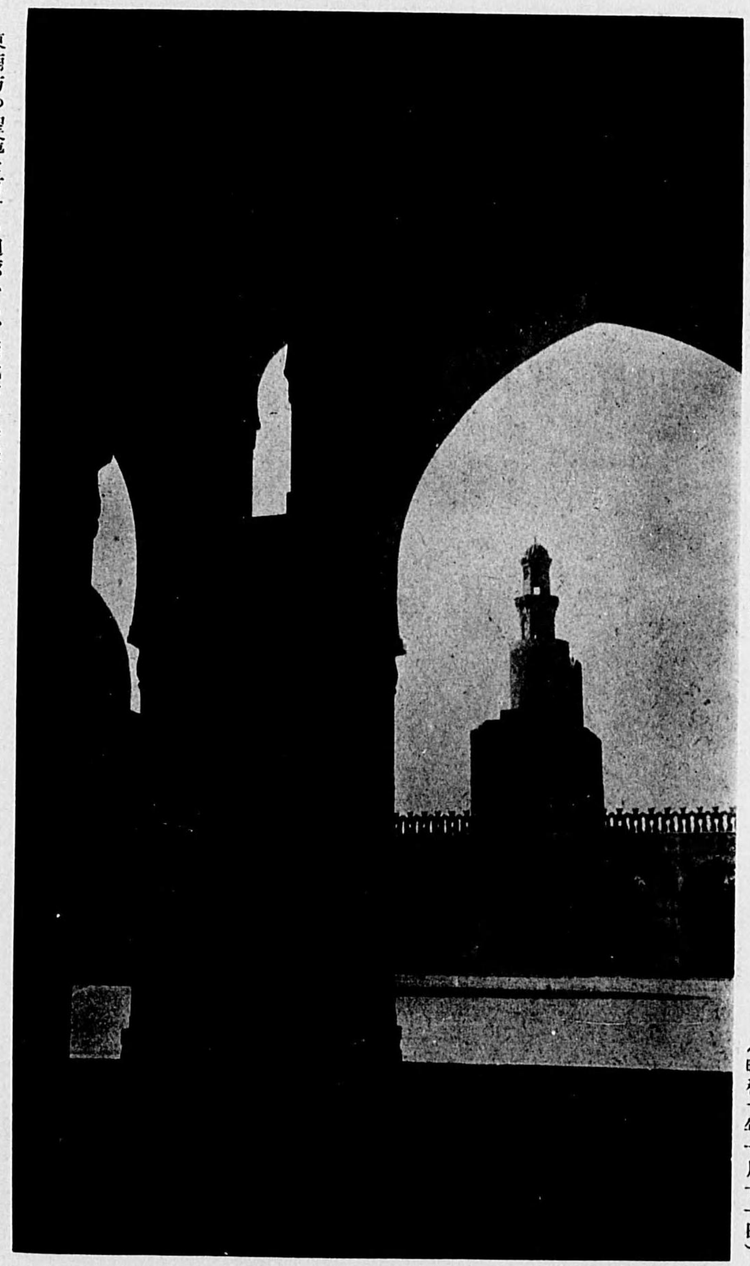
附圖

1
―
145



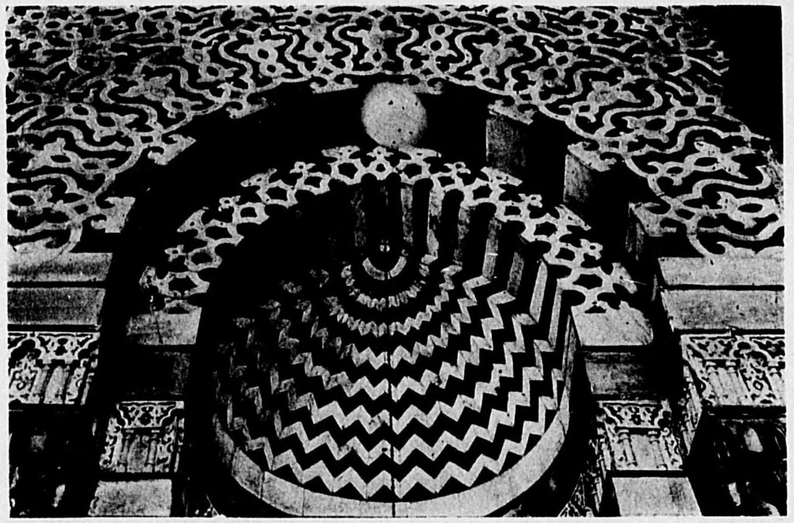


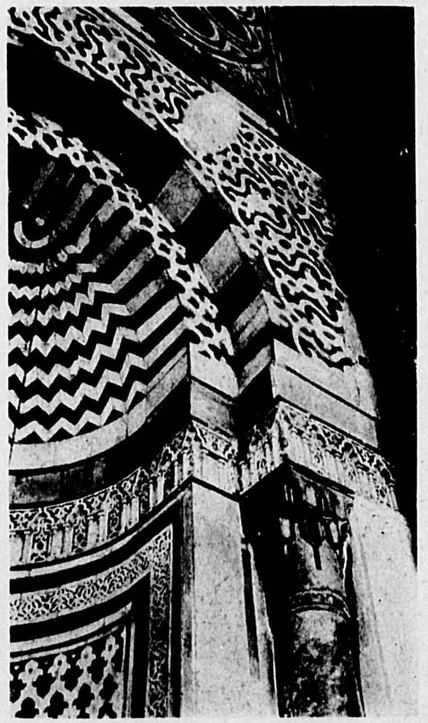
上，1。開路市アムル寺中庭一部　（大正十一年十月二十二日）
下，2。同　　（昭和十年十月九日）
上圖は修理前，下圖は修理後の狀況。



3。開路市イブン・ツールーン寺廻廊より中庭を隔てて光塔の遠望　（昭和十年十月十一日）

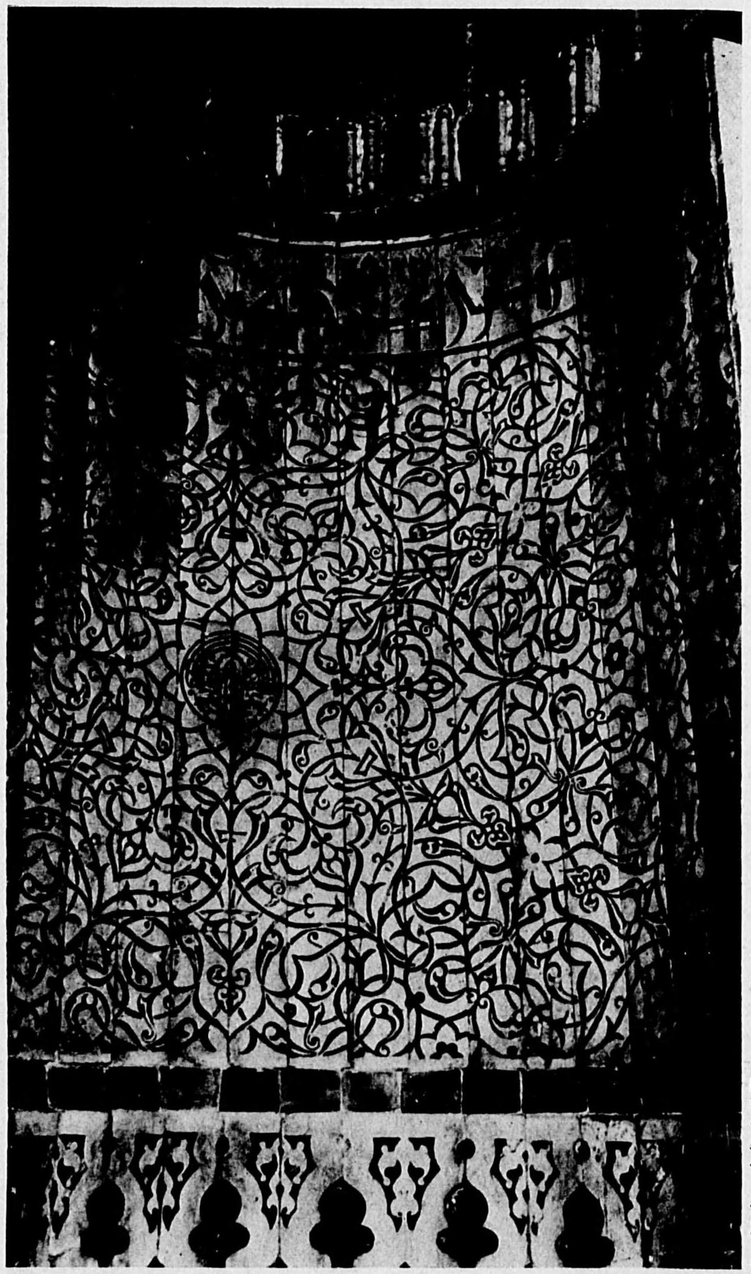
東南方の聖龕を有する廻廊から、西北方の特殊なる型式を有する光塔をみた所で、階段が外についてゐるところが、他のと趣を異にしてゐる。此寺は開路市に於ける創立年代最古のもので、アーメッド・イブン・ツールーンが第八世紀末にたてたといふ。口繪2—5は此光塔の上からとつたものである。





上、4。エル・ムアイヤド寺聖龕一部　其一　（昭和十年十月十二日）
下、5。同　其二　（昭和十年十月十二日）

ムアイヤド寺（Gami el-Muaiyad）の聖龕は、ダマスカス市所在のスナニエ寺の夫（第一四三頁）の如く、上部半圓蓋の内部は、白と黑との大理石で波線をなす樣に嵌入細工がしてあるし、其上部の平たい壁のところも、果して正直な嵌入細工がしてあるかどうか、若しさうとしたら如何にして仕事をしたか、甚だ込み入った施工しにくいものであらう。聖龕の兩方に立ってゐる柱形の鐘乳柱頭は鍍金をしてあったが、大して感心ができなかった。此寺はムアイヤドの建立にかかり、西紀一四一二年（應永十九年）頃の落成といふ。數回の修理を經て今日に及んでゐる。



6。キジマス・エル・イシャキ寺聖龕一部

（昭和十年十月十三日）

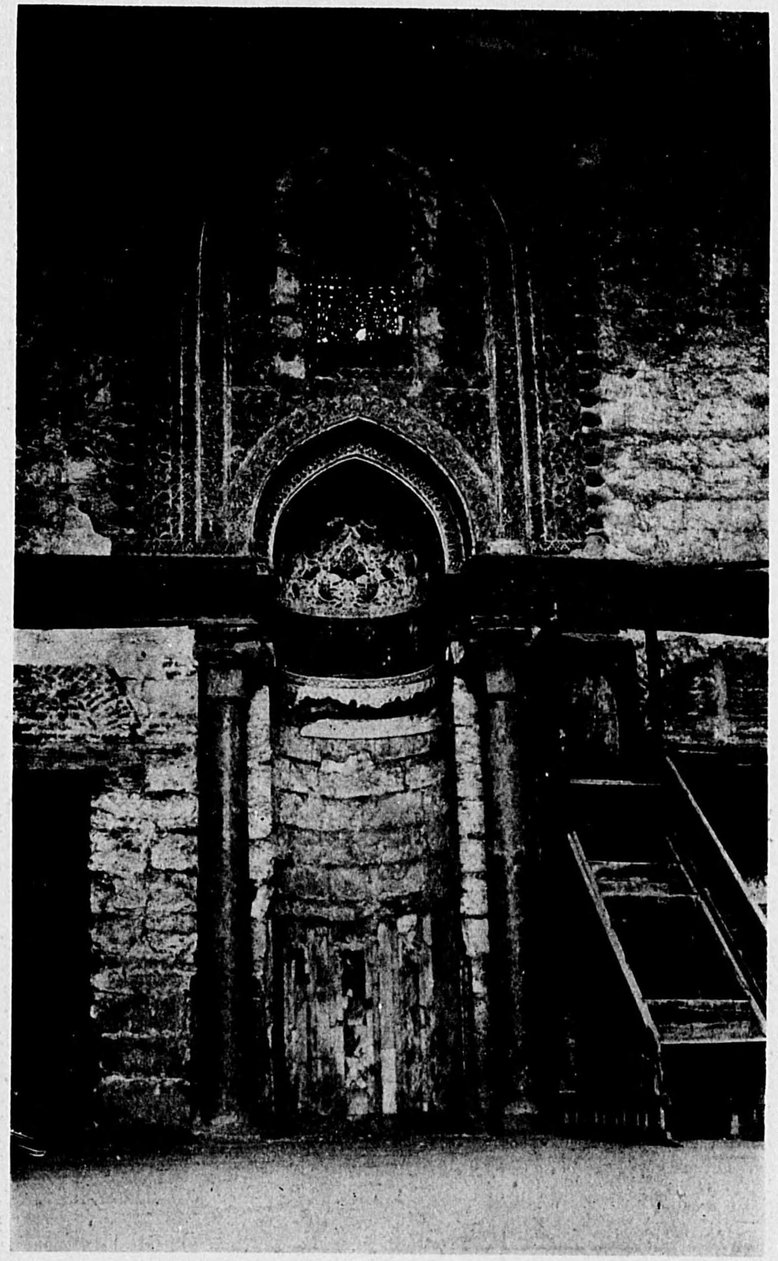
此寺(Mosque of the Emir Kijimas el-Ishaki)は西紀一八四一年(文明十三年)の建立。聖龕後壁の嵌入細工は大理石より成り、文様に東洋的のところがあり、特に私の興味を惹いた。其上部は模様化した暴夜文字であらう、

上、7。開路市カイト・ベイ寺聖龕一部　（昭和十年十月十三日）

下、8。カリフ墓カイト・ベイ廟聖龕一部　（昭和十年十月十二日）

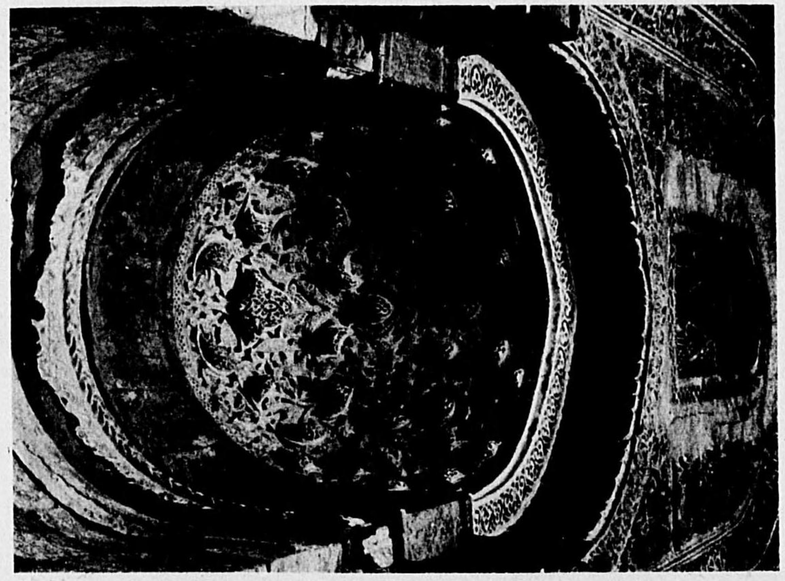
開路市に於けるカイト・ベイ寺は西紀一四七五年(文明七年)の建立で、其光塔は開路市に於ける最美なるものの一といふ。説教壇に比べると聊か淋しい。

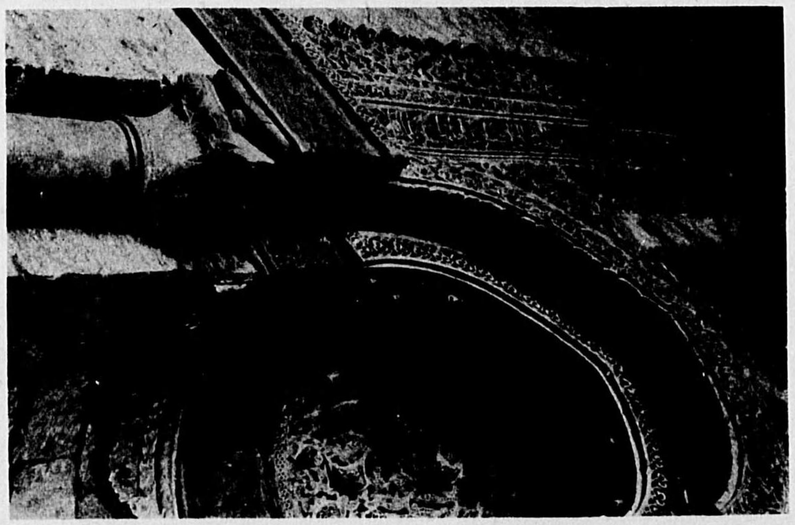
カリフ墓に於けるカイト・ベイの廟寺は、36の解説にも記しておいたが、前者に先だつ事十二年、西紀一四六三年(寛正四年)のものだが、明治三十一年に修理されてゐる。此等二圖により讀者諸君は、聖龕の部分は如何様にも意匠ができる事を知り得たであらう。



9。エン・ナシール寺聖龕全景（昭和十年十月二十二日）

現在隨分ひどくなってゐる。傍の説教臺は殘骸を止めてゐるに過ぎない狀態である。

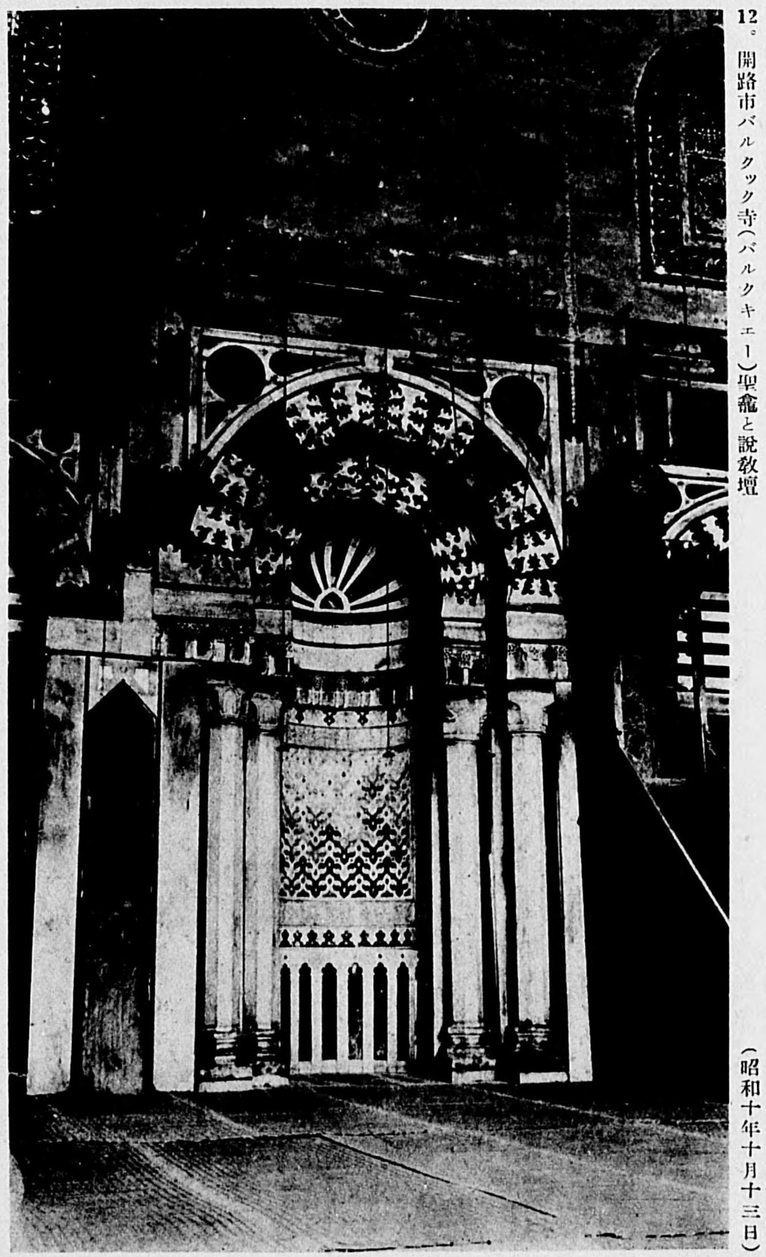




右、10。エン・ナシール寺聖龕一部　其一（昭和十年十月二十二日）

左、11。同　其二（昭和十年十月二十二日）

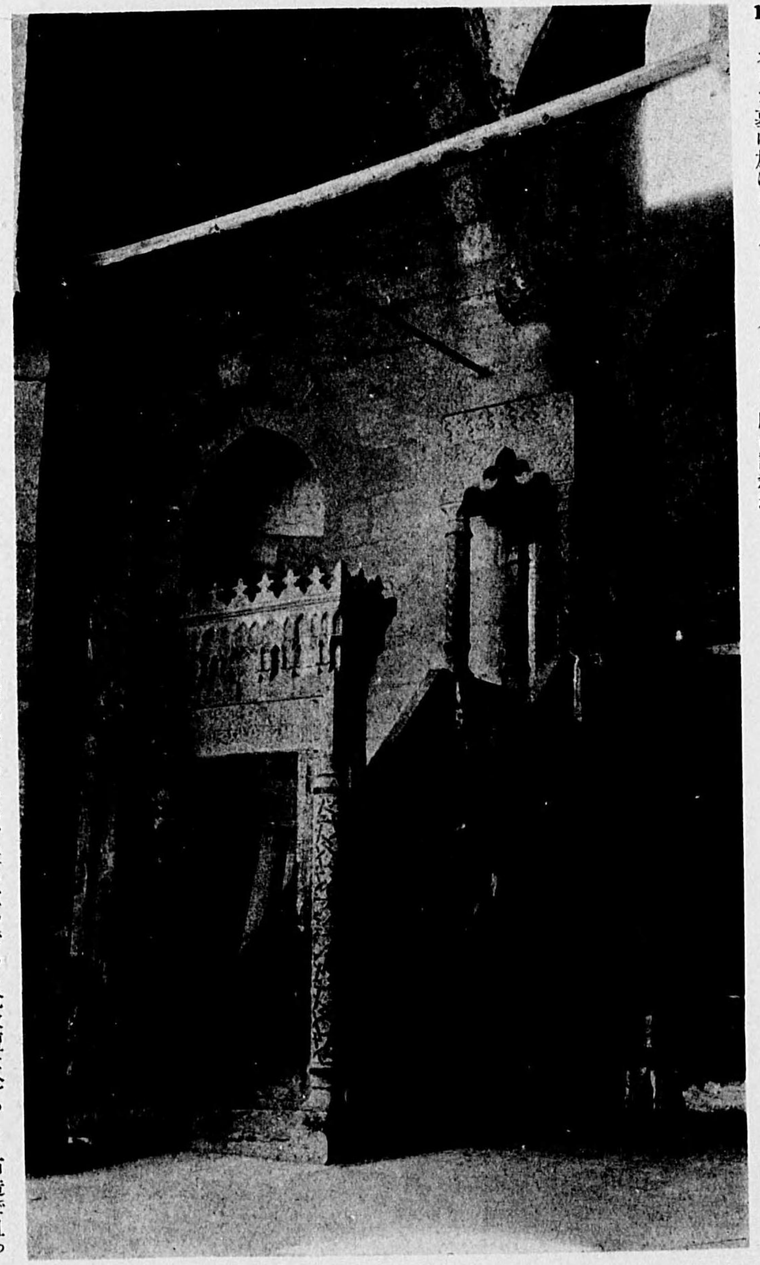
聖龕上部の美事な漆喰師の仕事を見せたもので、10は横の方と柱頭とを主としたもの、11は稍や見上げたところである。



12。開路市バルクック寺(バルクキエー)聖龕と説教壇

バルクック寺(Mosque of Barkuk, Barkukieh)は西紀一三八四年(元中元年・至德元年)の建立。日本なら鎌倉末で吉野時代。聖龕の半圓蓋から迫石へかけての嵌入細工は、ムアイヤド寺のとは比べものにならない。これこそどういふ風に施工したものか。

(昭和十年十月十三日)



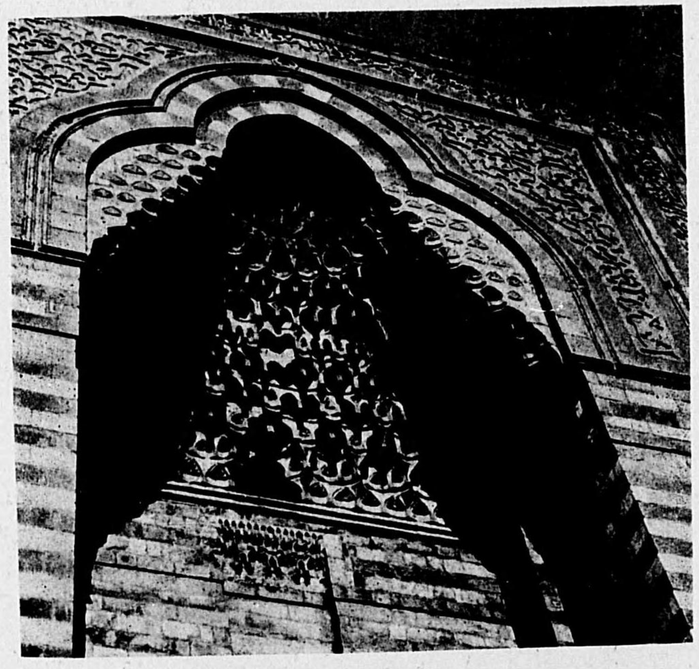
13。カリフ墓に於けるソルタン・バルクック廟の説教壇

バルクック廟寺の聖龕は、此圖に見る如く何等の裝飾をしないで、簡素此上もないが、夫に並んでゐる説教壇は珍らしく石造で且つ非常に美しい。これはカイト・ベイ(Kait Bey 1465—1496)(應仁二年—明應五年)の寄贈といふ。日本だと室町時代の美術工藝品。

(昭和十年十月十二日)

14。開路市イブン・ツールーン寺説教壇　（昭和十年十月十一日）

此説教壇はソルタン・エル・マンシュール（Sultan El-Mansur）が西紀一二九八年（永仁六年）につくらしたといふことだから、そっくり殘ってゐれば鎌倉時代といへるのだが、惜しい事にさうはいかない。

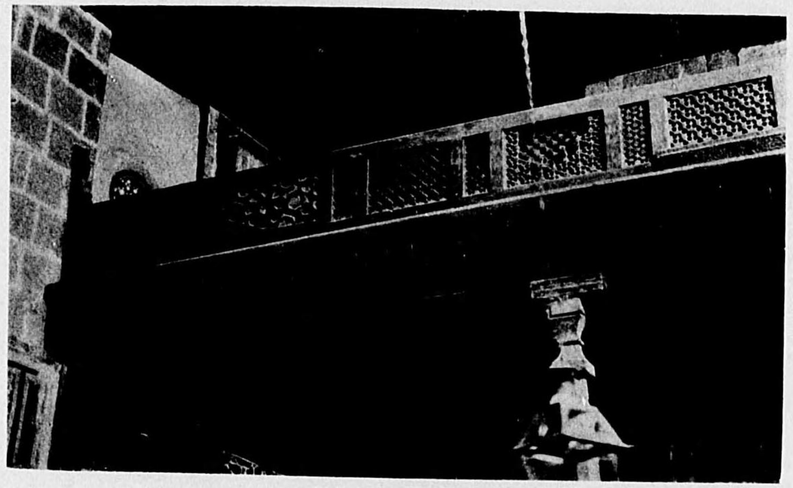


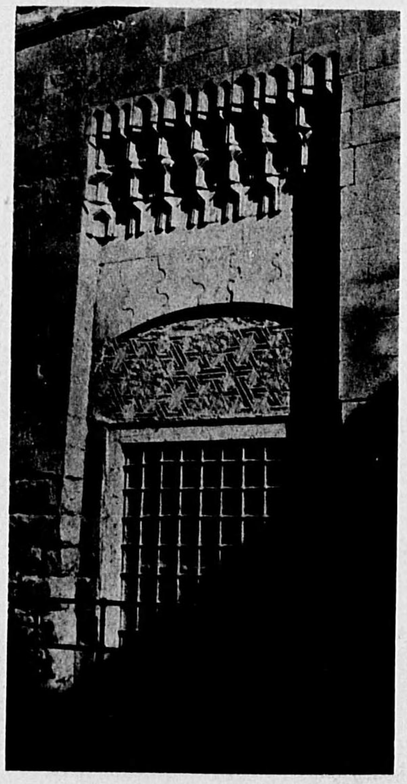
15。エル・ムアイヤド寺正面出入口上部　（昭和十年十月十三日）

16。同上隅柱一部　（昭和十年十月二十二日）

17。イシャキ寺出隅切面上鐘乳飾　（昭和十年十月十三日）

鐘乳飾は出入口の上・窓の上・柱頭・出隅切面上部等、手の込んだのと比較的簡單なのとの差こそあるが、隨所に好んで用ひられてゐることを、寫眞によって示したのである。前頁・前前頁並に次頁及び本文一一九頁註參照の事。

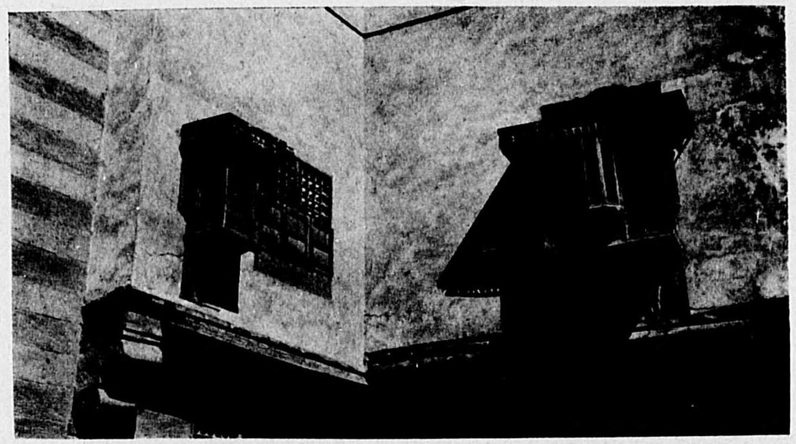


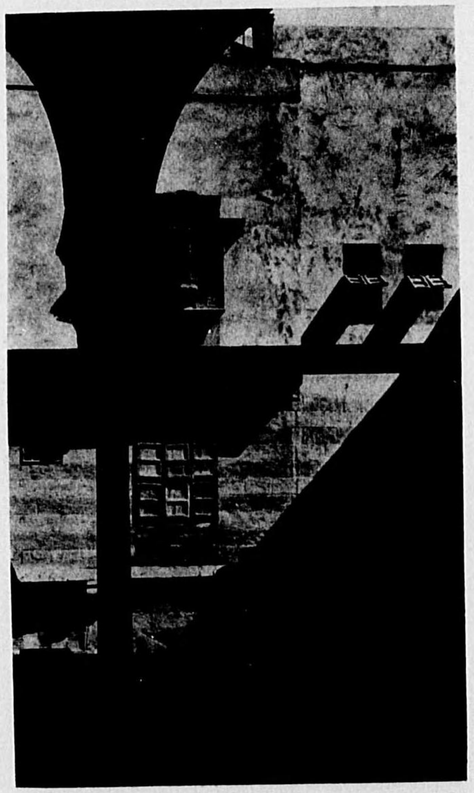


上、18。開路市エル・ブルディニ寺内部階廊　（昭和十年十月十二日）
下、19。開路市のあるモスクの窓　（昭和十年十月十一日）

上圖はエル・ブルデイニ（Gami el-Burdeini）寺内部階廊勾欄下の鐘乳飾を見せるためにだしたのである。寺は西紀一六三〇年（寛永七年）の創立、一八八五年（明治十八年）修補したといふのだから、この部分は古くても其頃よりは上るまいと考へられる。

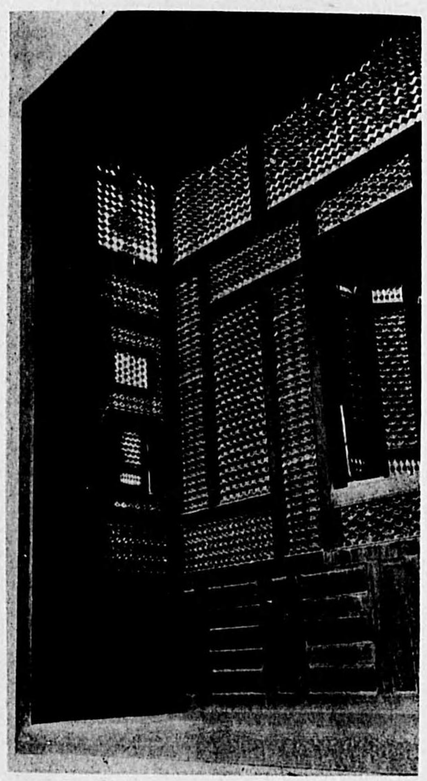
下圖は開路の町を歩いてゐて、偶然出逢ったモスクの窓の上部、例のスタラクタイトが目立ったので寫してみた。實はある書物の挿繪になってゐた窓をみて、非常に面白く思ひ、さがしたが見當らないので、此で間に合はしておいたが、かかる種類の裝飾は開路市のモスクの窓等には決して珍らしくない。

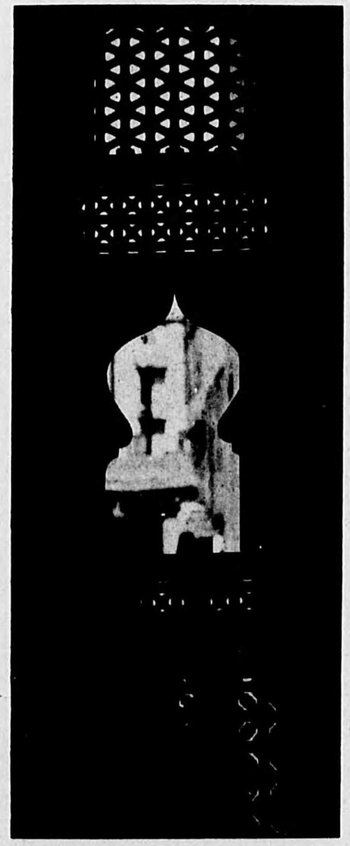




上、20。開路市「製本師の家」中庭の窓　其一　（昭和十年十月十三日）
下、21。同　其二　（昭和十年十月十三日）

普通には「製本師の家」（House of the Bookbinders）と呼ばれてゐるが、本名は「ガマール・エッヂン・エズザハビ」（Gamal ed-Din ez-Zahabi）で西紀一六三七年（寛永十四年）の建立ださうだから、丁度日本だと江戸初期の民家になるので、大したものである。20は中庭に面せる出窓の二例で、右のは出窓に出窓がある子持出窓、左は更に其一部が開く様にしてある。21は向ひ側の濡椽から右の出窓のあたりを見たもので、何れも特有の格子細工が愉めてある。

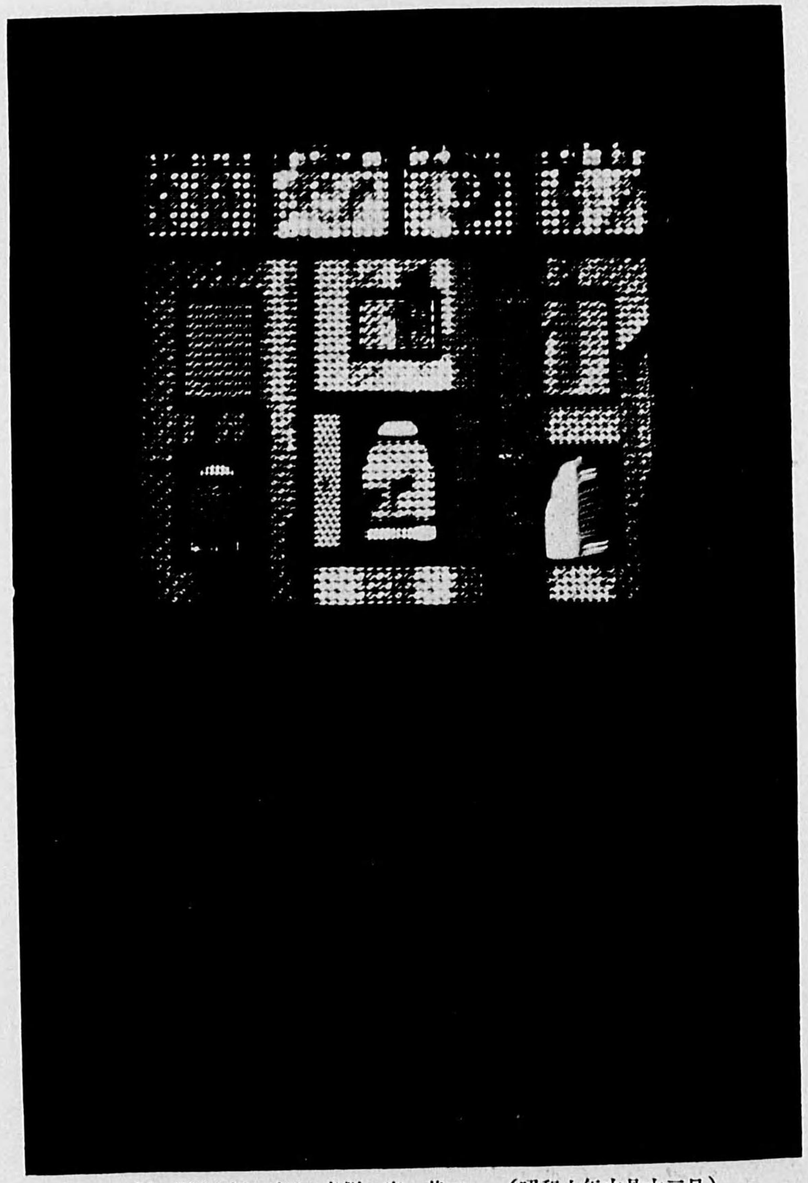




上、22。「製本師の家」表側の窓一部　其一
下、23。其窓の横につけてある小窓
（物差は曲尺の一尺・兩圖共昭和十年十月十三日）

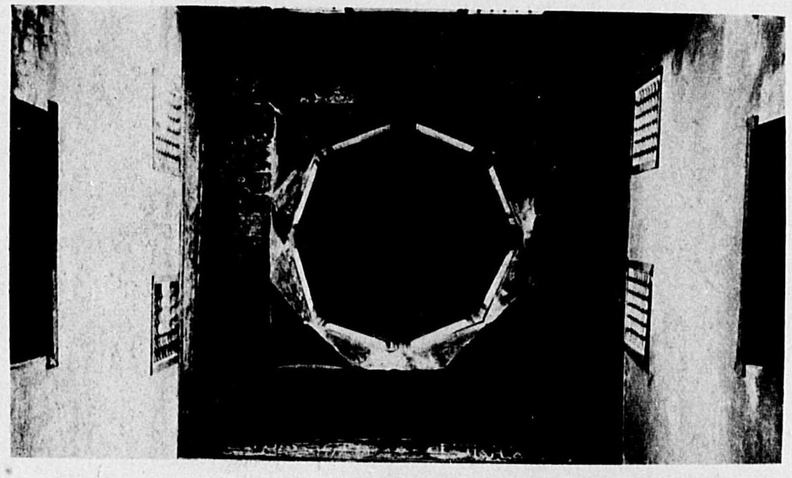
前圖は中庭に面せる小窓を外部から見た圖であったが、此は表通についてゐる窓を室内からみたところである。窓が大きいから、何も彼も大きいが、ただ同じなのは格子で、いくら面積が廣いからといって、格子の眼を大きくすれば、目的に反するからである。さうして横の方にも小さい開きの格子付の擬寶珠型窓がついてゐる。上圖では片方きり見えてゐないが、勿論兩側にあるので、これは洵にうまい考へである。中庭に面した出窓にさへもつけてあるのだから（上へ）（下より）ら、往來に面した出窓へつければ、さうして其往來がまっ直であれば、視界は遠方迄きく。下圖は其窓を開いたところ。此等幾何模様の格子を「マッシュラビェー」(Mushrabeyeh)といふ。

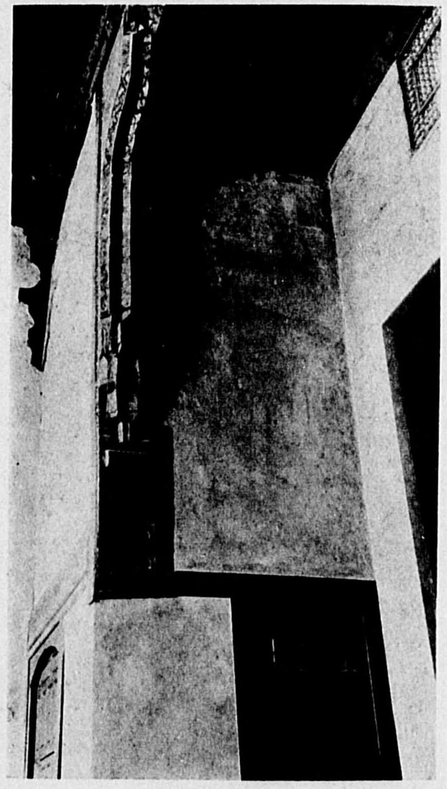
此種の格子は埃及ばかりではない。私は印度の北方、ヒマラヤ山の南麓なるネパル國の首都なるカトマンヅ（Khatmandu）の町家でいくらもみた。あの邊には珍らしくはない。



24。「製本師の家」の表側の窓　其二　（昭和十年十月十三日）

此種の窓の意匠は千篇一律，いくつあっても同じといへば夫迄だが，幾つ見てもやはり格子にいろいろの種類があり，又小窓の形にも變化があるから面白味はある。



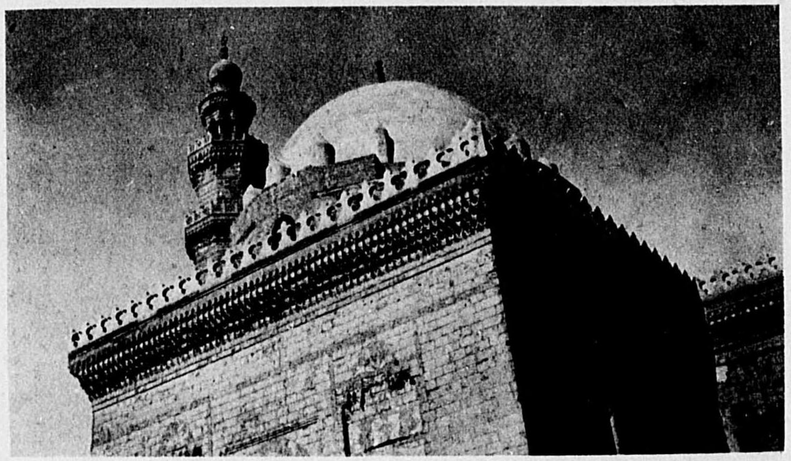


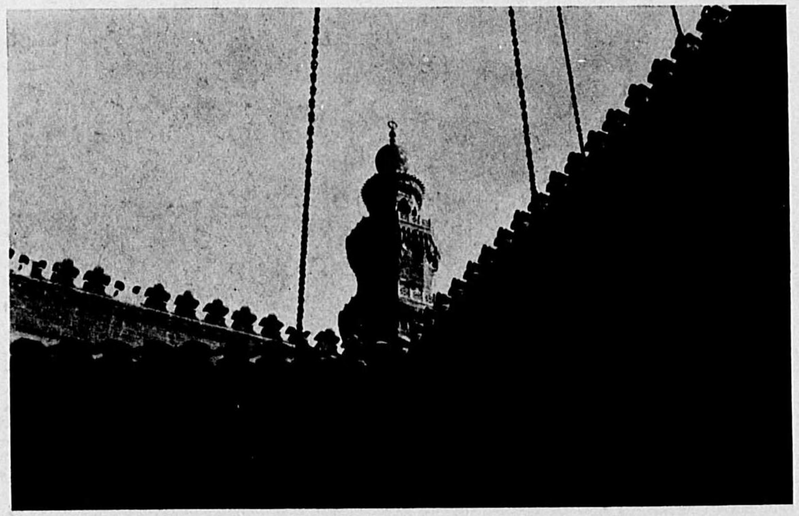
下、25。「製本師の家」階上濡椽持送下鐘乳飾　（昭和十年十月十三日）

上、26。同　一室天井の木造圓蓋見上　（昭和十年十月十三日）

21圖の人がつかまってゐる手摺上は半圓拱になってゐるが、其半圓拱の一方は細い柱に、他方は下圖の如く持送になってゐる。さうして其持送りの下のところは鍾乳飾を應用してゐる。こんなところの納りにはもって來いである。

上圖は四角な室の天井の周圍を少し持ち出して隅切りとして八角とし、更に其各邊の中心を角點として少し小さい八角としたもの。其上は圓蓋にしてあるが、やはりこれはこの家の二階の一室で、全部木製圓蓋でおさめてあるから珍らしい。

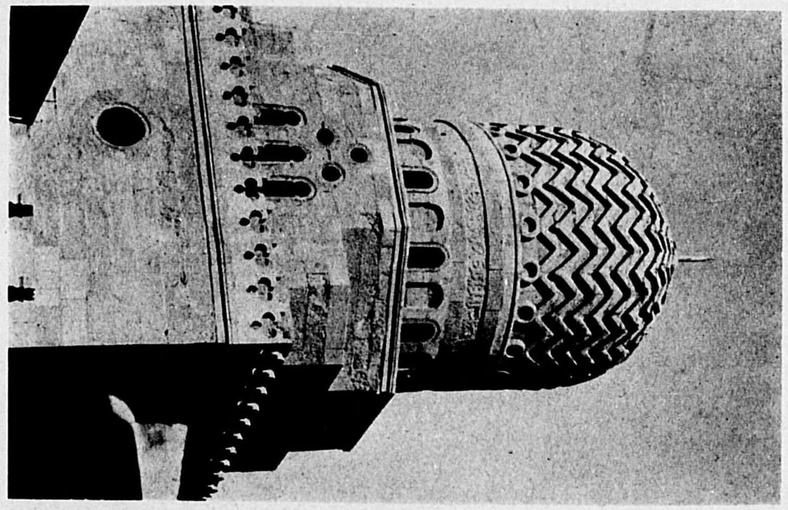


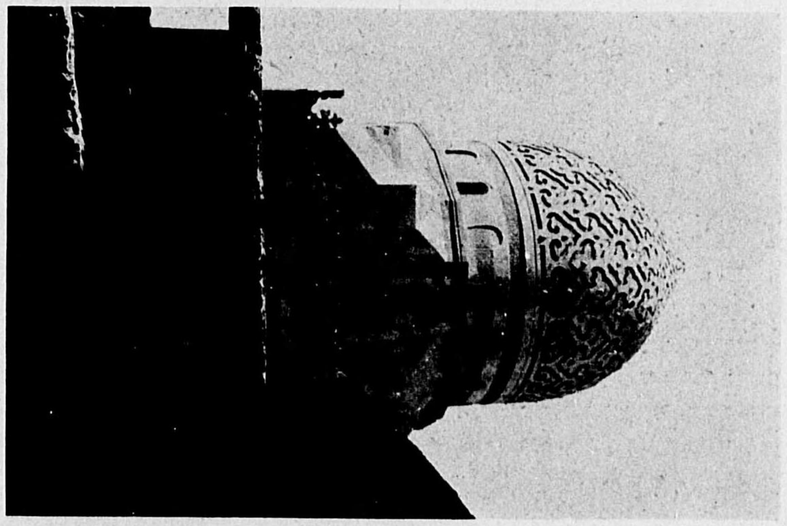


上，27。開路市ソルタン・ハサン寺の軒一部　（昭和十年十月十二日）

下，28。同　光塔　（昭和十年十月十一日）

鐘乳軒飾もこうなると少しばかりしつこいかも知れぬが，光塔や圓蓋等とよく調和がとれ，總てがよくまとまってゐて，立派に一樣式をなしてゐる。下圖は丁度上圖の光塔を內方からみたことになってゐるが，影になってゐるのは西南の壁で，其軒飾の影が寫ってゐる方のは東南方の壁である。此寺にはソルタン・ハサンの墓があるが，夫は上圖の突出部の內にあるので，其寫眞は本文第12頁の挿圖として出しておいた。





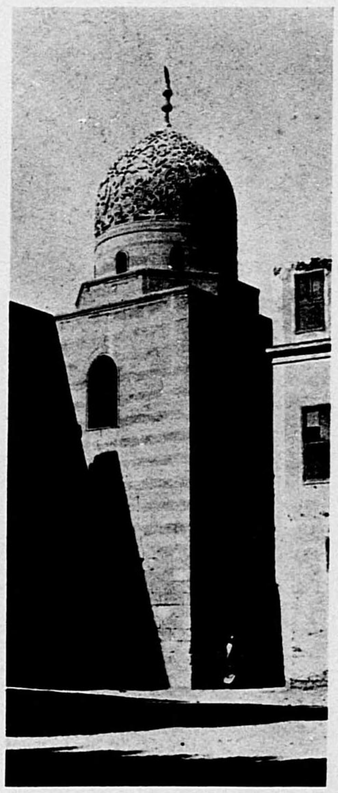
右、29. カリフ墓に於ける墓　其一（昭和十年十月十二日）

左、30. 同　カリフ墓に於ける墓　其二（昭和十年十月十二日）

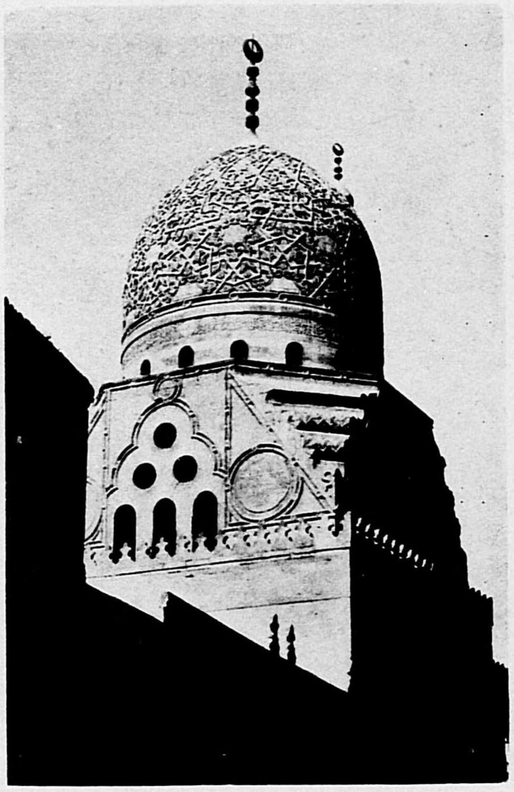
カリフ墓（Tombs of the Caliphs）は開羅市の東方にある一地域で、ここには堂々たる廟墓が多く建ち、其小規模のものでも、以下數例に示す通り、何れも注目に値するものばかりである。圓蓋の意匠が頗る非常に精巧なものがあり、其一

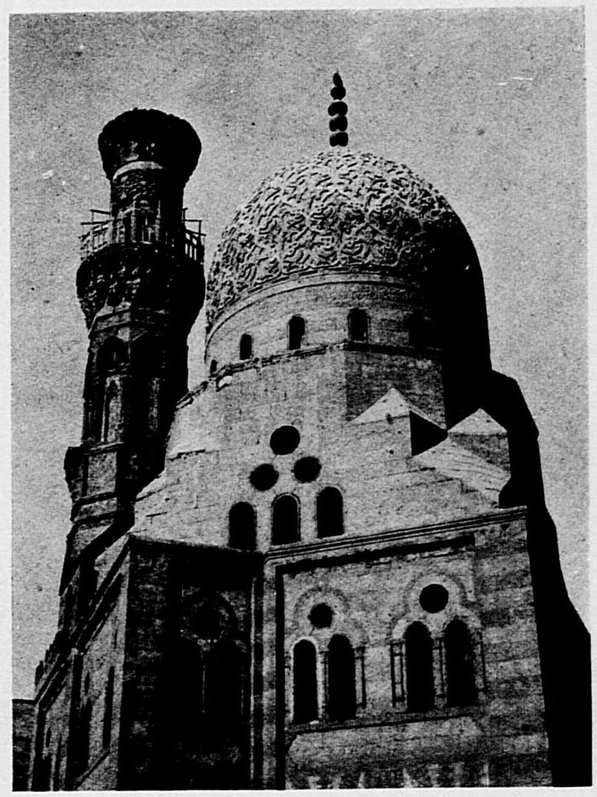
31. カリフ墓に於けるソルタン・バルクック廟の東北方圓蓋（大正十一年十月二十一日）

ソルタン・バルクック廟寺（Tomb Mosque and Convent of Sultan Barkuk）は Sherkis el-Haranbuli なる建築技師の設計と傳ふ。圓蓋が二つあるが（口繪9）、此寫眞のは北の方ので、これは西紀一四〇〇－五年（應永七年－十二年）にかけて建立されたものといふ。



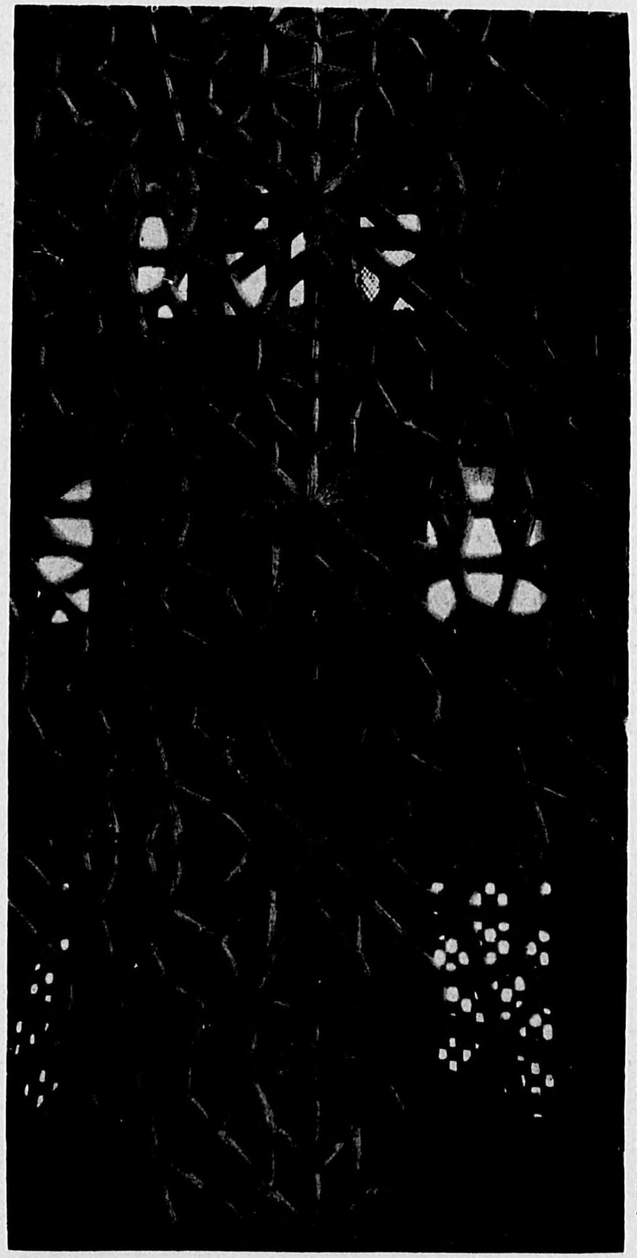
右、32・カリフ墓に於ける墓　其三　（昭和十年十月十二日）
中、33。同　其四　（昭和十年十月十二日）
左、34・同　其五　（昭和十年十月十二日）





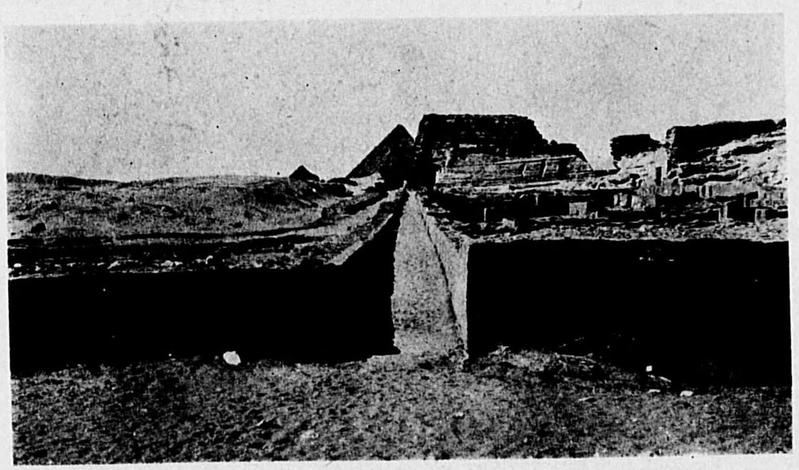
右、35・開路市ケイルベク寺　（昭和十年十月十二日）
左、36。カリフ墓カイト・ベイ廟圓蓋　（大正十一年十月二十一日）

實の所、この五種では、最後の36が西紀一四六三年（寛正四年）に建立され、一八九八年（明治三十一年）に修理された事を知ってゐるだけであるが、圓蓋の意匠に大なる特徴がある。



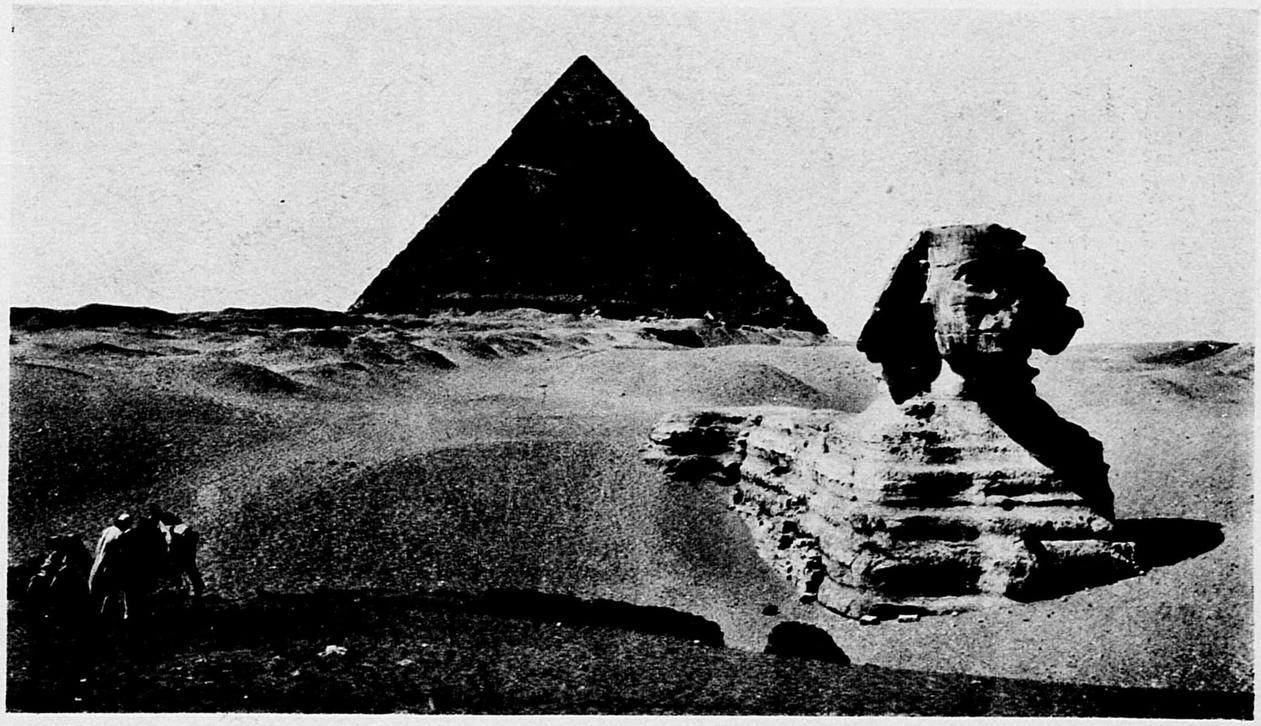
37・カリフ墓に於けるソルタン・バルクック廟妃妾墓出入脇の花狹間　（昭和十年十月十二日）

此花狹間は埃及式サラセン建築のものたるはいふ迄もないが、これと、印度に於けるサラセンの花狹間と、更に支那・朝鮮建築に於ける夫と、又我國の唐樣建築に用ひられたる桟唐戸の花狹間と比べると、相當に面白いものである。この樣な格子細工は中中支那人にはむづかしいから、一はもつと簡單化して花狹間の樣なものとし、他はとてもうまく行かないので氷裂模樣として窓の狹間飾に用ひたといふ風に解釋しても、強ち無稽の愚考とばかりはいへなからう。サラセン建築の格子細工は何といつても面白いものである。



上，38。ギザの發掘　其一　（昭和十年十月九日）
下，39。同　　其二　（昭和十年十月九日）

ギザの發掘は頗る大規模に行はれたらしく，隨所に種種なものが現はれてゐた。38の右方は第二塔，左端に近きは第三塔及び其附屬小塔の一で，この後の二つが39の正面背景に見えてゐる。卽ち上圖右下から左上に向へる斜の泥土煉瓦土塀は，下圖に於いては中央から第三塔の方向に直線に通つてゐるので，上下圖の關係はよく判るであらう。この狹いのが通路で，塀の內に壁體下部の現はれてゐるのが家屋らしいが，下圖右方塀外に「無用の者入るべからず」の立札のため，入つてみることができなかった。

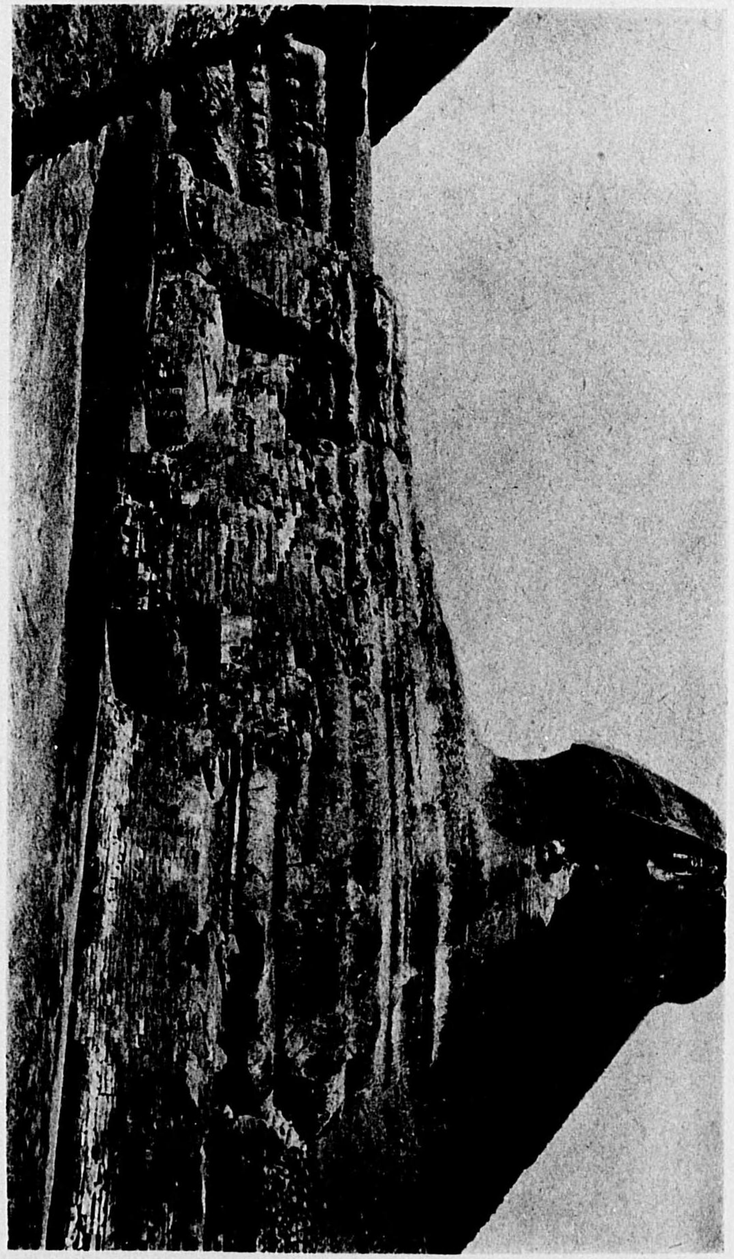


40。ギザのスフヰンクス　發掘前　（大正十一年十月十日）

大正十一年十月十日に初めてここへ來て，スフヰンクスを見て第二塔と共に寫眞をとり，現像させたら左方に駱駝がゐたので，寫眞は大分に工合がよくなり，素人寫眞でも幾分ものになったし，あたりは如何にも平和で，靜かな心地のいいものになったが，（次頁へ）

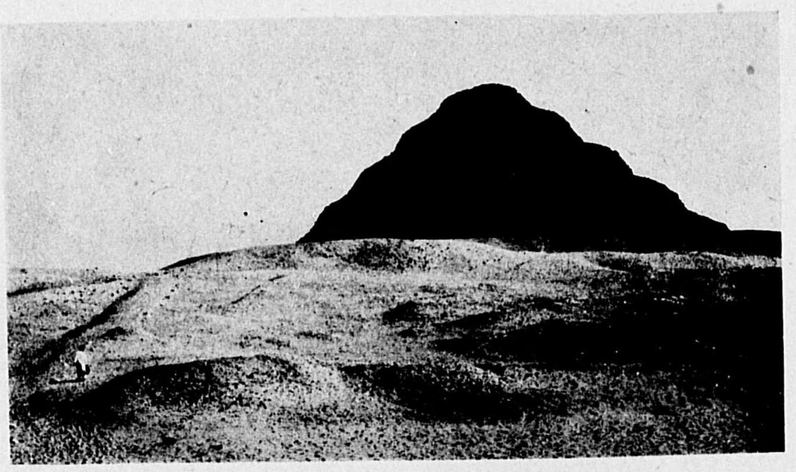
41。ギザのスフヰンクス　發掘後　其一　（昭和十年十月九日）

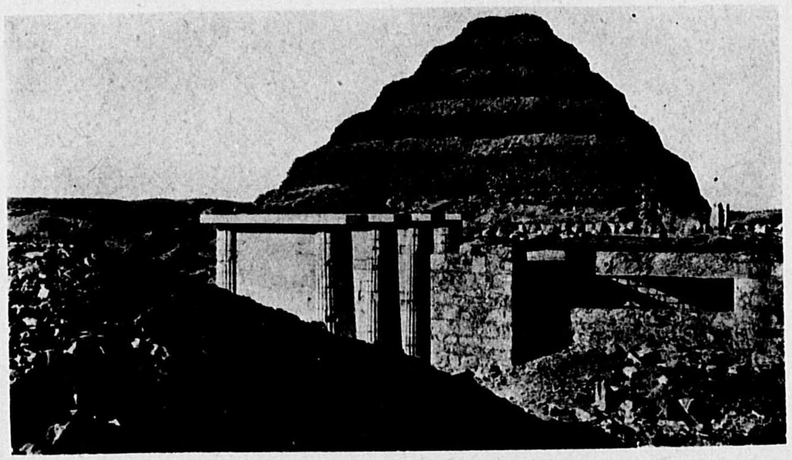
（前頁より）其時から滿12年と364日目には，殆んど其全身が現はされ，其他いろいろ發掘され，全貌は明らかになってゐた。



42. ギザのスフィンクス　發掘後　其二　（昭和十年十月九日）

餘り近くて前肢と後肢と同時に寫し得なかったので，ここでは後肢を見せておいた。左端は第二塔で右端は第一塔の夫夫一部分である。





上，43。サッカラの段塔　發掘前　（大正十一年十月十八日）

下，44。同　　發掘後　（昭和十年十月十日）

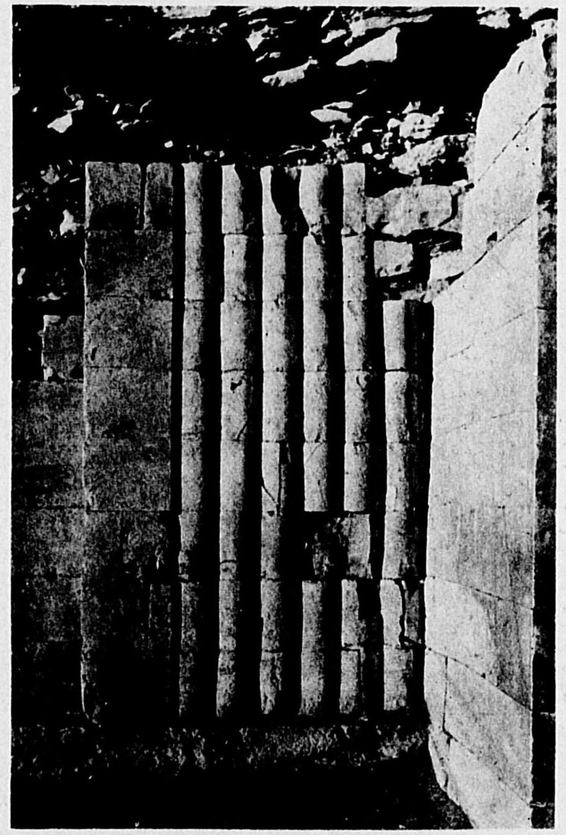
大正十一年十月初めてサッカラ見物をした時，あちこちで二三の墓をみた歸りに有名なステップ・ピラミッドの傍を通った時，案内人が私の鞄を提げて先に歩いてゐたので，丁度點景人物になるからと思って，後ろから寫したのが上圖。丁度夕刻で太陽も大分低くなり，あたりはまことに靜かであった。ところが其後いつだか忘れたが，此周圍を發掘して，次頁以下數圖に示す樣な種種な發見をしたのであった。

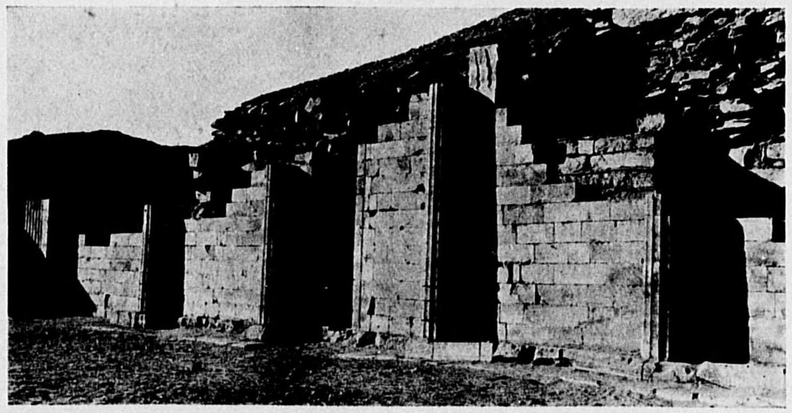
下圖は發見した大建築を前景として東南方からとった全景である。

上、45。サッカラの段塔發掘　其一
下、45。同　其二

（物差は曲尺の一尺・昭和十年十月十日）
（昭和十年十月十日）

發掘は實は段塔其物に試みたのではなくて、主として其東側で、塔から少し離れたあたりであり、興味ある柱や土留壁(?)の樣なものが現れたりしてゐた。第一に出遇ったのが上圖の胡麻殼決りを施した石壁で、これはこれはと感嘆し、少し歩いたら今度は下圖の樣な溝刻をした片蓋柱があつたので、よく見に來たと思はざるを得なかった。

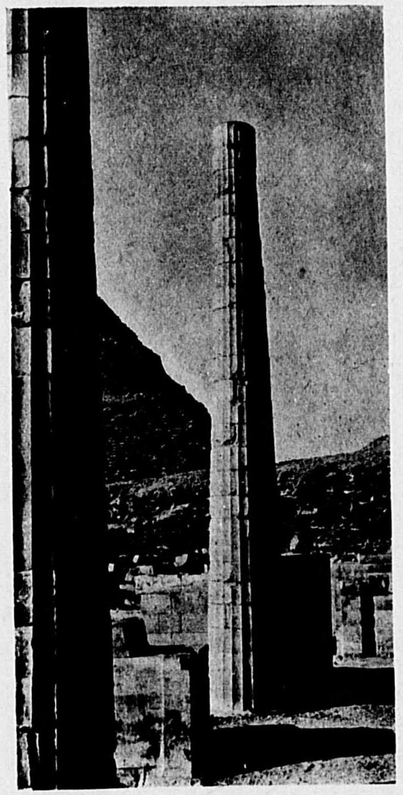


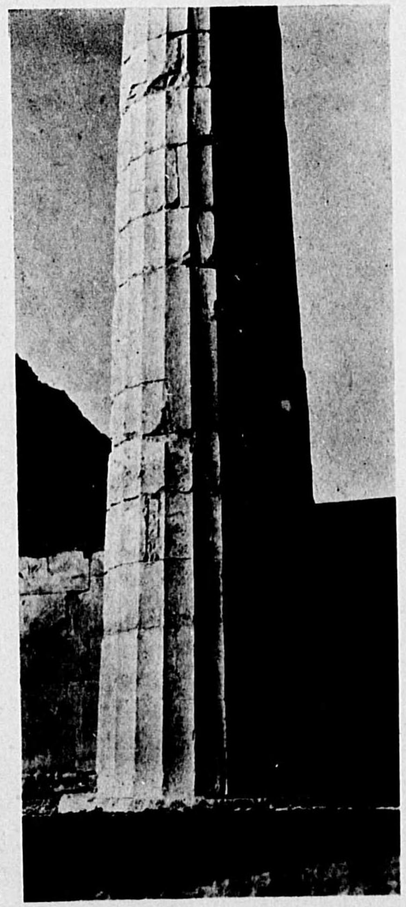


上、47。サッカラの段塔發掘　其三
下、48。同　其四

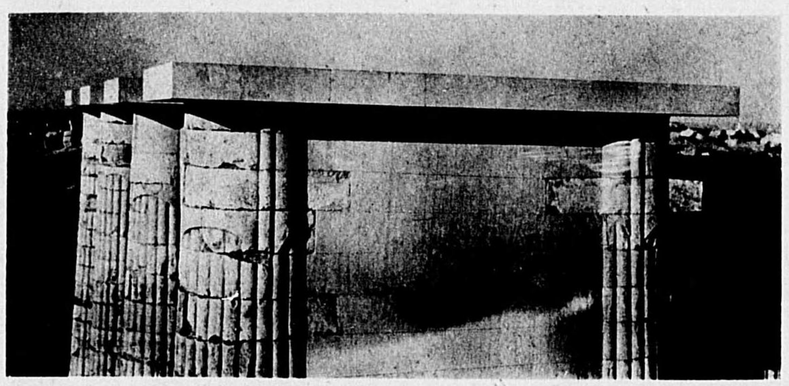
（兩圖共昭和十年十月十日）

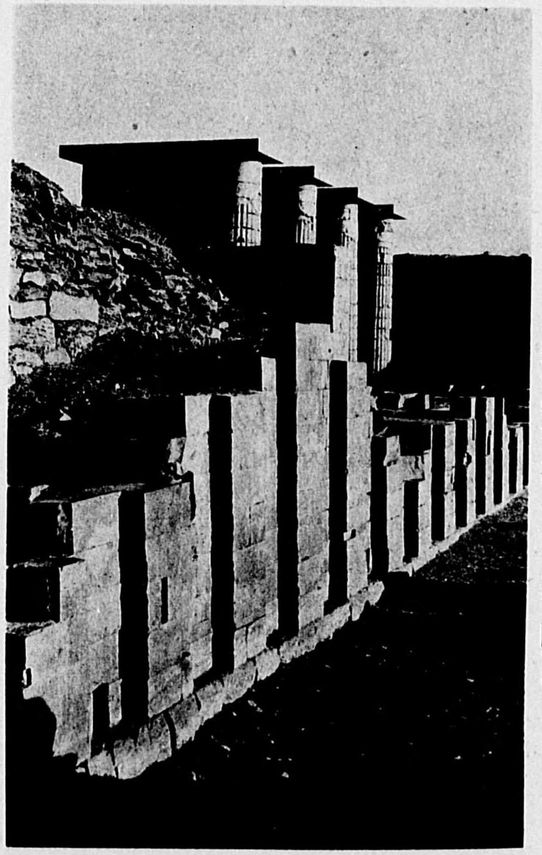
段塔の東南面から上圖の樣な柱が發見されてゐた。其背景に塔の一部が見えてゐるから、44と比較すれば、略其位置が判るであらう。下方にある物差は曲尺の一尺だから、此柱は大體下徑二尺上徑一尺、高十六尺位。もっと上があったかどうか不（下へ）





（上より）明だが、これなら正にドーリヤ式原柱といひ得る。目通りのあたりで試みに寸法をとって見たら、溝刻りの深さ約二分五厘、稜から稜迄三寸あった。下圖で明らかな通り、横から光線があたった時は、實にはっきりする。斯樣に溝刻りをもってゐる柱は我國の建築にはなく、僅に室町時代の多寶塔の須彌壇勾欄親柱に唯一例をあげ得るのみである。下圖の物差は曲尺の約五寸(六吋)。これで胴張があり、下圖の樣な比例であったら、希臘のドーリヤ式柱と區別ができないであらう。

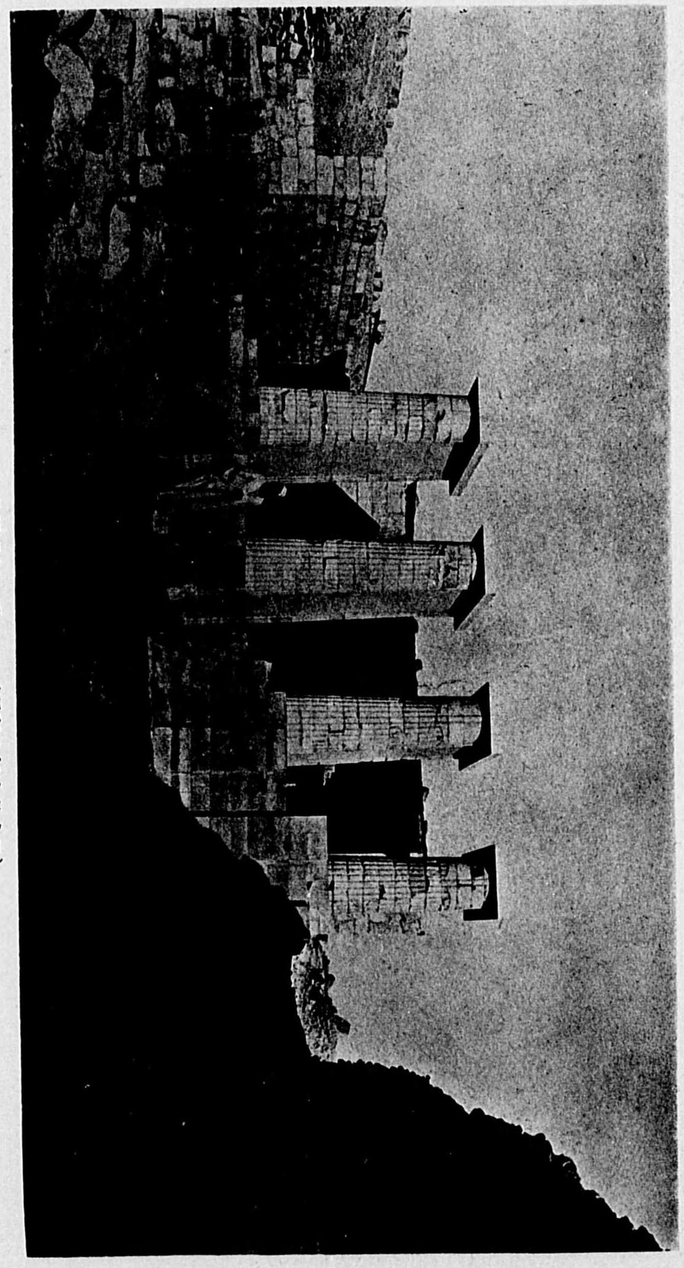




下、**49**・サッカラの段塔發掘　其五　（昭和十年十月十日）

上、**50**・同　其六　（昭和十年十月十日）

前頁に掲げたドーリヤ式原柱の樣なのを見て、更に南方に歩いたら、四角な控壁が、目まぐるしき迄に出てゐる土留壁があり、其南の入隅に近いあたりに、少し東に引込み、西面して胡麻殼決りを有する堂堂たる石柱が四本建ってゐる大建築があった。下圖が卽ち夫で、正面から見たのが次頁の圖、而して柱頭の部分を近くでみたのが上圖である。



51. サッカラの段塔發掘　其七　（昭和十年十月十日）

サッカラ段塔の東南方に發見された「四柱式堂」(Tetrastyle Temple)を西方卽ち正面から見たところ。後方にも多くの柱が整然と並んでゐるから，當初は隨分大きな立派なものであったらう。規模は驚く程雄大である。

上、52。サッカラの段塔發掘　其八

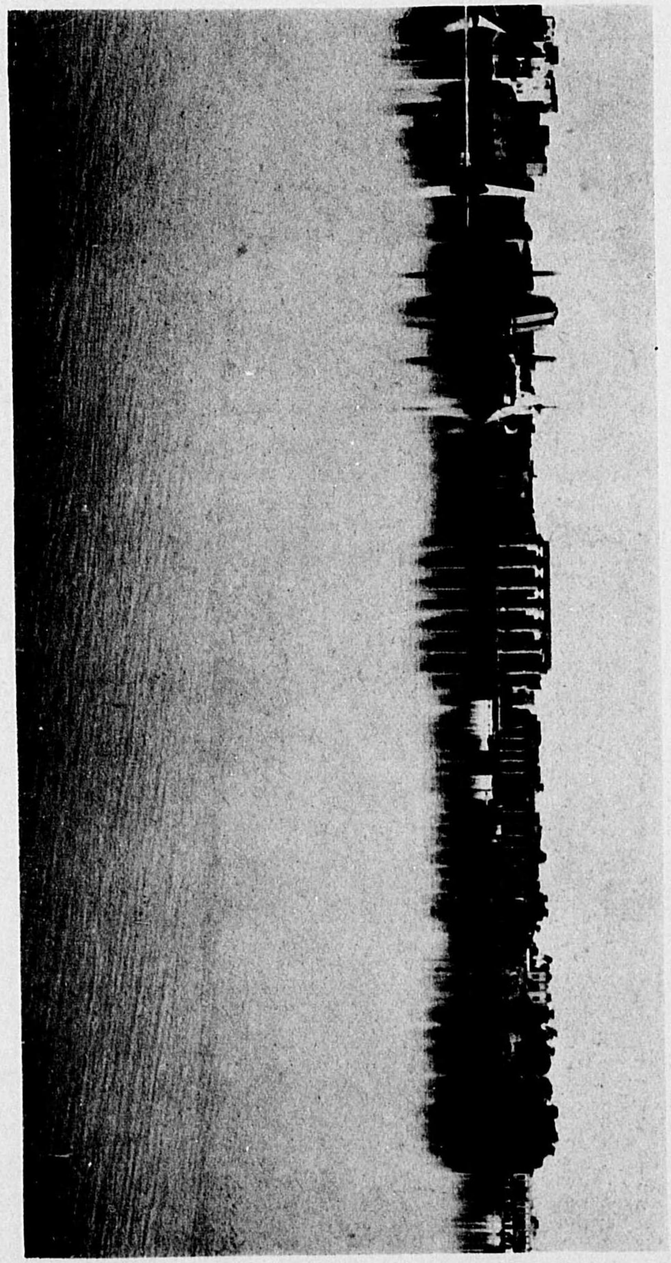
（昭和十年十月十日）

上圖と50とで明らかな樣に、前後の柱の間には最初から石壁があったと見られるが、上の平たい板石は、後に保護のため蓋をしたらしいから、これはないと見る方がよからう。だから柱の最上部はこれでよかったか、或は未だ上があったか、その邊は判然しないが、柱頭は形が面白い。柱は胴張がなく、胡麻殼決りが28本あり、丁度7本目が上迄通ってゐるから、圓周（上）

下、53。サカラッの段塔發掘　其九

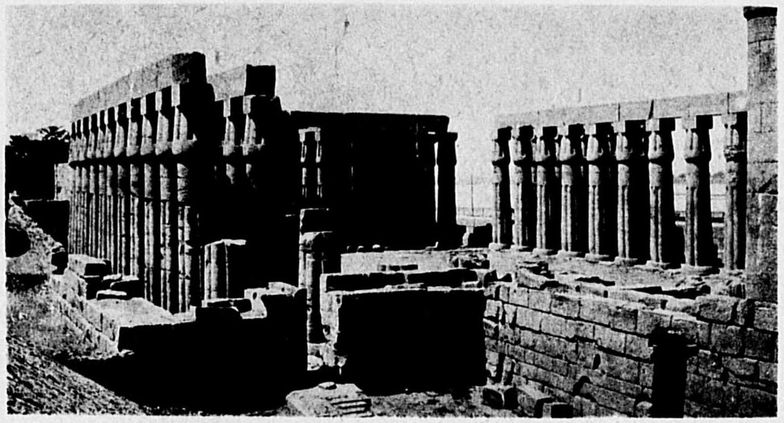
（昭和十年十月十日）

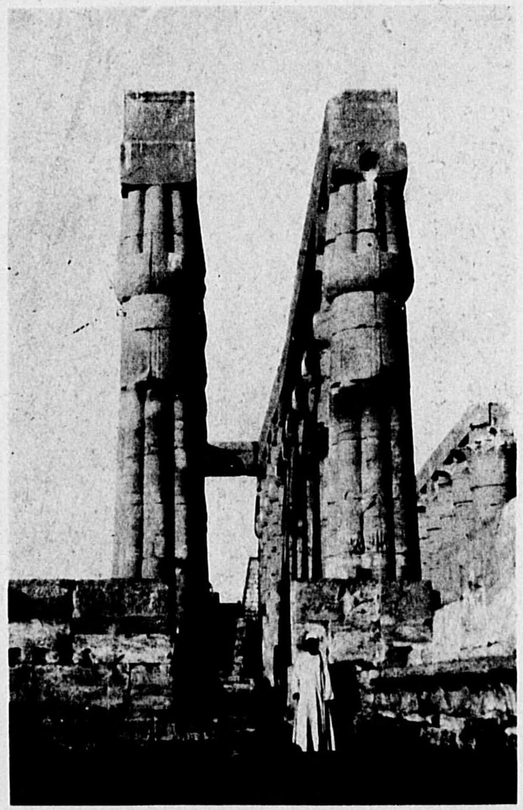
（下より）を四等分してゐる。溝の間隔は目通りのあたりで三寸六分、膨みの高さ六分五厘位あった。丁度地上五尺二寸のところで上がない柱かあったから、約目通りの高さなので直徑を測ってみたら、山からままで三寸五分あった。柱が前方の八本が殆んど完全で、あとは皆途中からないが、片側に22本づつ並んでゐるから、合せて44本あり、實に壯觀を極めてゐる。だから當初の有樣は想像できる。下圖物差は曲尺の約五寸（六吋）。



54。ラクソル堂遠望（大正十一年十月二十九日）

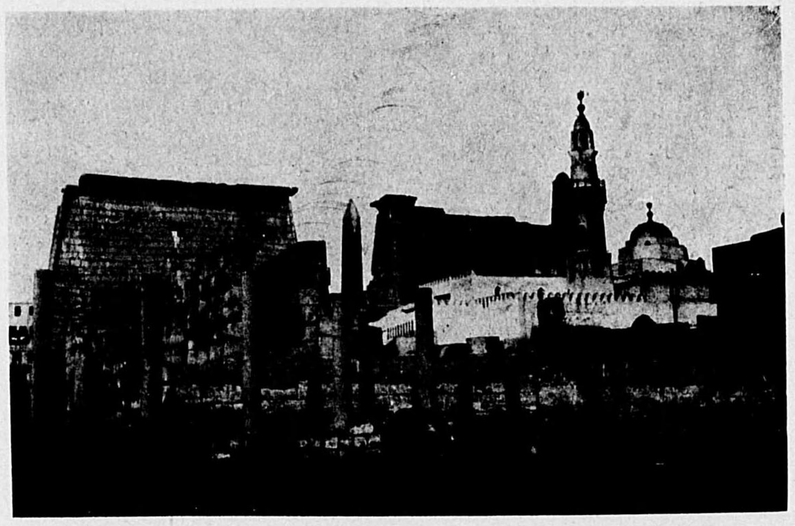
內流河を渡り，西岸から全景を見たところ。左方オベリスク，大門，夫からずっと右の方へ全堂夕日を受けて靜かな大內流の流れに反射して，洵に美しい。前回は左岸廢墟の見學を終り，歸りが早かったので此寫眞がとれた。

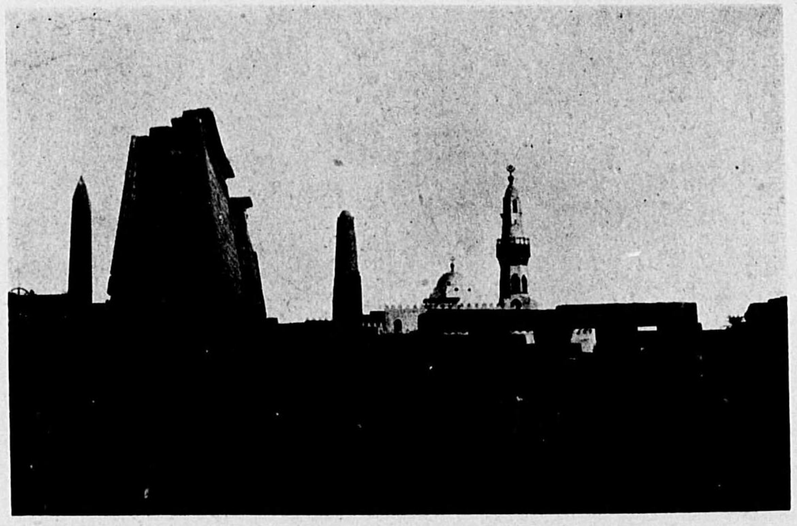




上、55。ラクソル堂の列柱　其一　（大正十一年十月二十七日）
下、56。同　其二　（大正十一年十月二十七日）

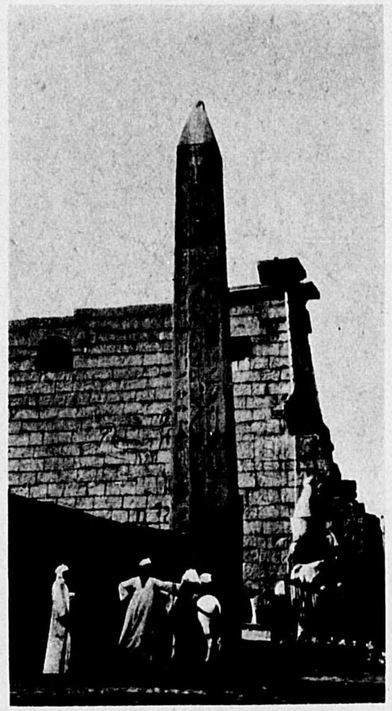
ラクソン堂は内流河の東岸に沿ひて建つ。だから對岸から寫眞をとると、前頁圖の樣なのができる。此堂は第十八王朝の王アメノーフヰス三世(Amenophis III)の創始するところといふ。上圖には開花柱頭をもつてゐるのは一本も寫つてゐないが、蕾のがこの位集ると實に美しい。これこそ廢墟の美觀を擅にしてゐるといへる。アメノーフヰス三世の大中庭を東方から見たところ。下圖同西側の列柱で、右方に開花柱が見えてゐる。





上，57。ラクソル堂　其一　（昭和十年十月十七日）
下，58。同　其二　（昭和十年十月十七日）

上圖は西南方から大門(パイロン(Pylon))の方を見たところで，其中間からオベリスクの先が出てゐる。下圖は西北方卽ち內流河の方からの眺めで，又別種の趣があるが，此兩圖から新しい回教寺なるアブー・エル・ハガッグ(Abou el-Haggag)が古い堂に喰ひ込んでゐるのがよく判る。つまり此下圖は，丁度54の左端を近くでみたことになってしまったのである。

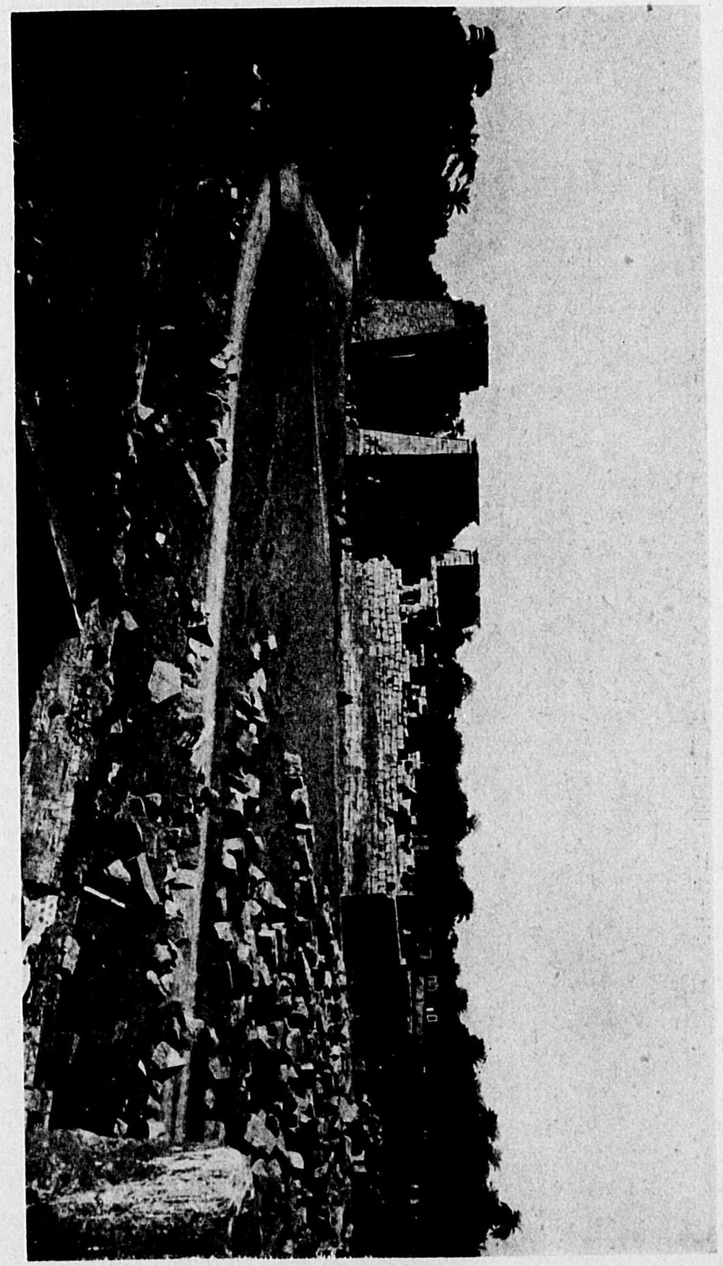


下、60。ラクソル堂　其四　（昭和十二年十月十八日）

大門塔の左端を東方から見た所で、背景は内流河がゆるく流れ、三角帆も見えてゐる絶景である。石像はラムセス二世（Ramses II. ca. 1292—1225 B. C.）。古埃及帝國時代の最も有名な王で、ラムセス大王ともいふ。寫眞の左端に近く壁面に穿てる長方形の大なる凹所は、一方の大門塔に二所づつ、合計四所あるが、旗竿をたてるためであり、各殿堂の大門塔には常につくってあるものである。

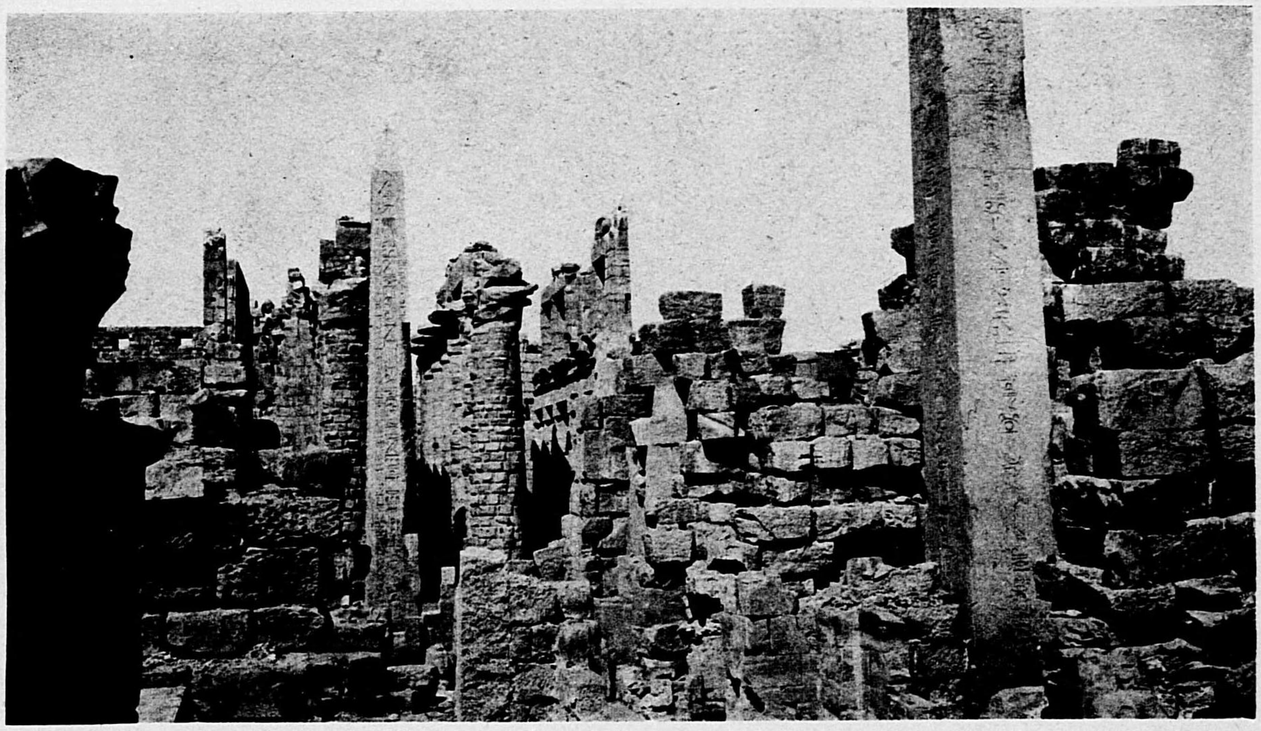
上、59。ラクソル堂　其三　（昭和十年十月十八日）

大門の向って左側の大門塔を背景としたオベリスクの寫眞である。これは元來二本あったのに、右方の分は西紀一八八六年（明治十九年）佛人が持去り、コンコルドの廣場に建てたから、其後は一本になって了った。大びらで泥棒をするのだから言語道斷である。大同や龍門の石佛の頭をかいてそっと持歸り、あちこちの金持に高く賣りつける樣な生やさしいやり方ではなく、歐米列強が國家として公然と強奪するのだから世話はない。罪亡しに今からでもおそくはないから、返したらどうだ。



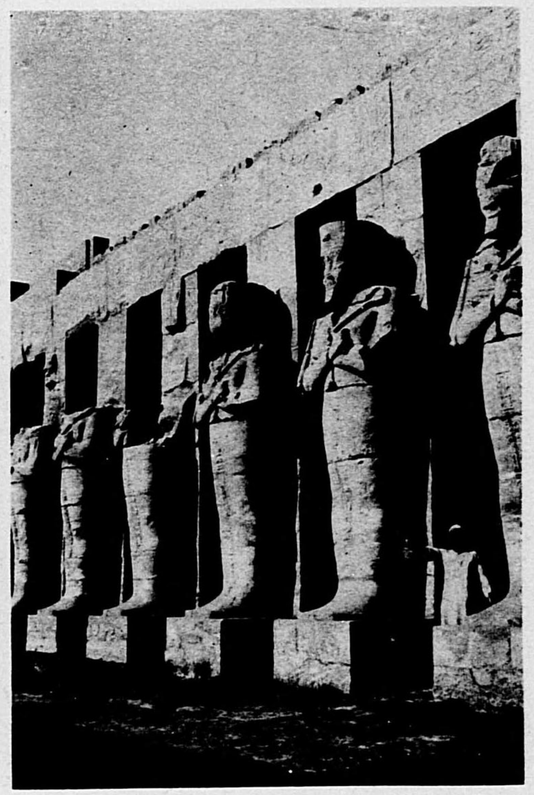
61。カーナックのコンス堂俯瞰圖（昭和十年十月十二日）

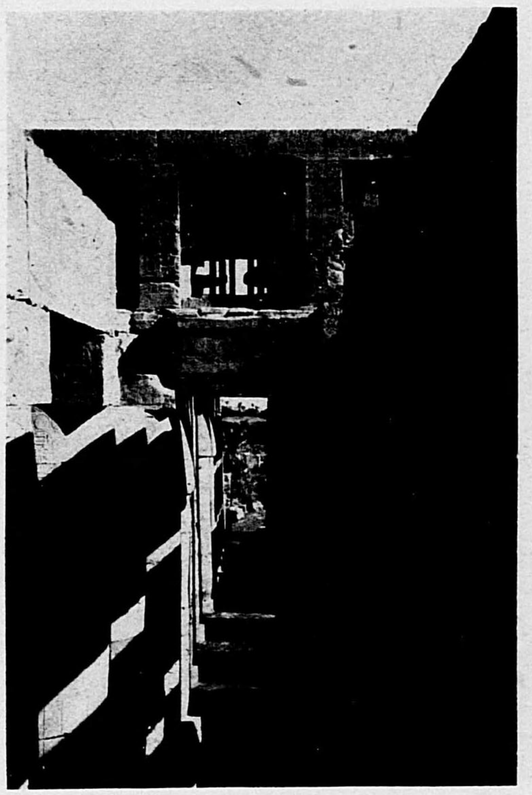
カーナックに於けるアモン大堂第八大門上よりコンス堂（Khons, Khonsu. 1200 B. C.）をみたところ。東方から西方を見たことになる。



62。カーナックのアモン大堂の一部の現狀（昭和十年十月二十一日）

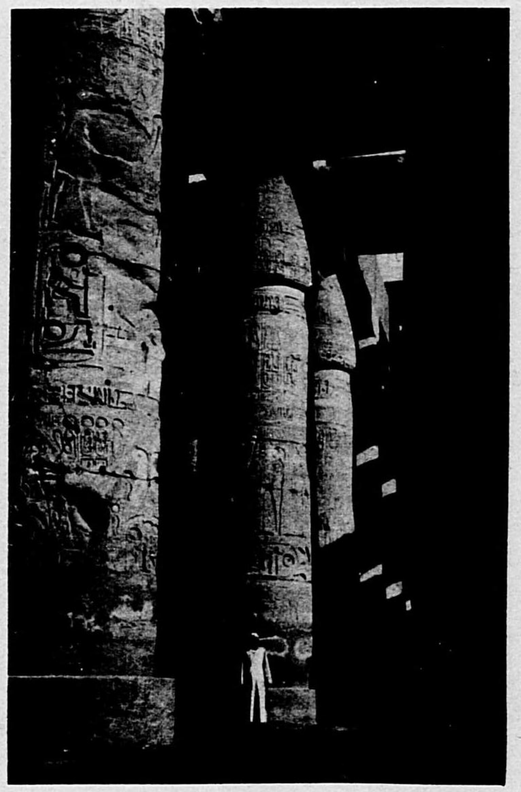
第五大門の邊から西方をみた所で，前に見ゆるは列柱堂の開花柱頭の持った二列に竝んだ柱である。二本のオベリスクの中，左方遠き分はツートモーシス一世（Thutmosis I）ので，右方近きはディル・エル・バハリの殿堂（67—70）を建てたハタス女王（Hatshepsut）の夫。





右、63。カナックに於けるラムセス三世堂のオサイリス立像（昭和十年十月二十一日）
左、64。同　大列柱堂上部の明窓（昭和十年十月二十一日）

カーナックの大堂の正面の大門を入ると大中庭がある。ここの右手にラムセス三世堂が正面を大中庭に向けてゐる。ここのオサイリス立像はよく保存されてゐる（右圖）。この大中庭から列柱堂へ入ると、當初明層から内部に採光してゐたことがよく判る（左圖）。

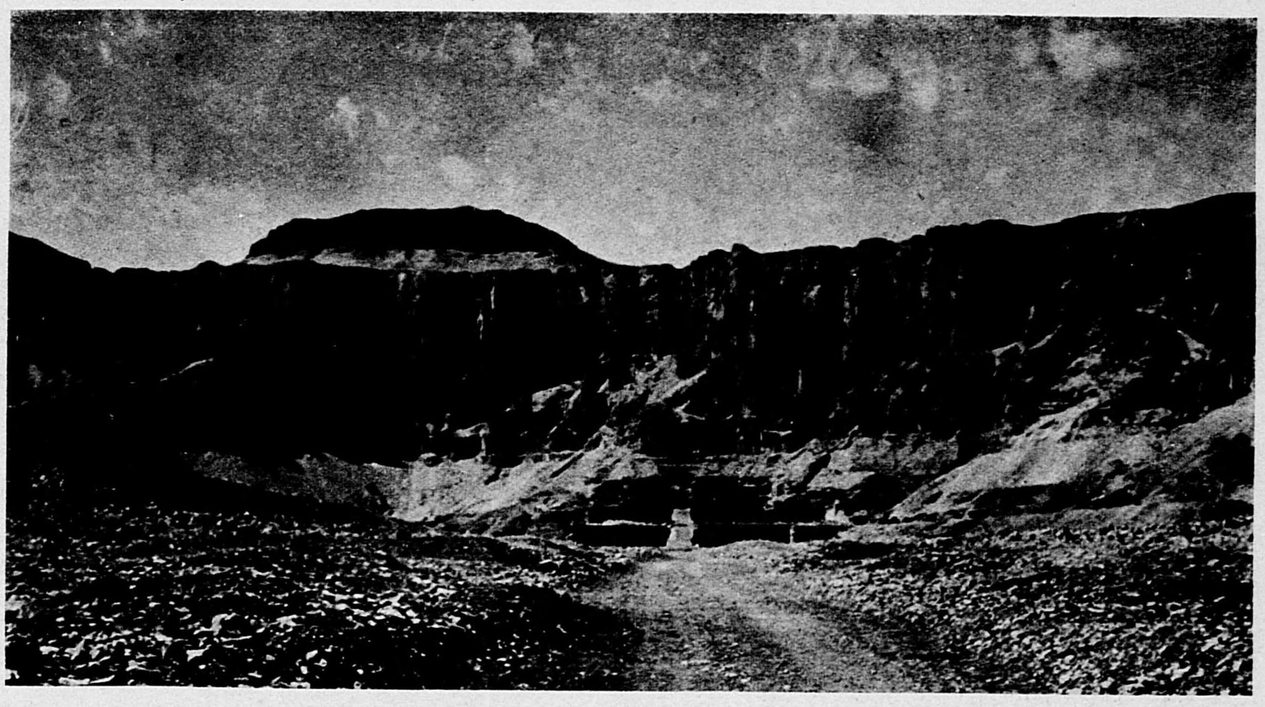


右、65。カーナックに於けるアモン大堂の蕾柱　（昭和十年十月二十一日）

左、66。同　開花柱　（昭和十年十月二十一日）

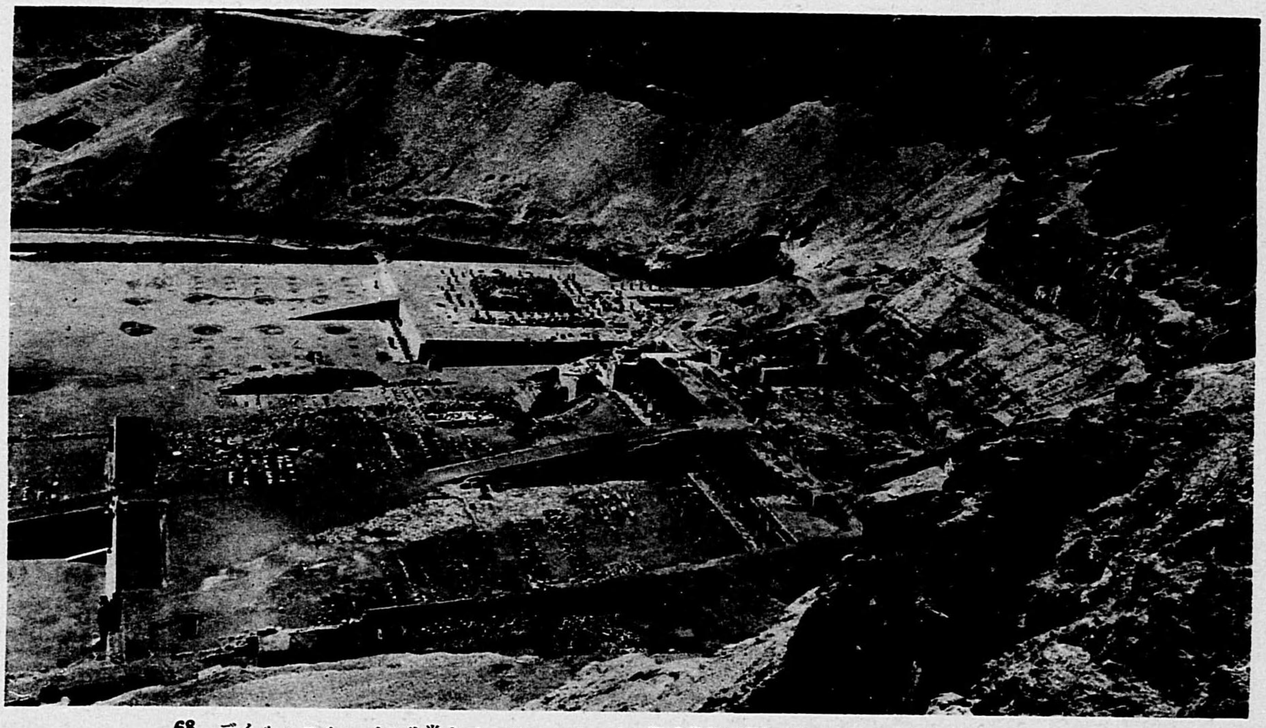
右圖はアモン大堂大列柱堂の側室の柱で、下に立てる人物と比較して、この紙草蕾柱でも、どの位大きいかといふ事が想像できるであらう。蕾の柱頭と頂板と一所にすると、凡そ人の二倍となる。數字でいふと高さ約四十二尺五寸徑約八尺五寸、合せて一二二本ある。

左圖開花柱頭の紙草柱は、中央通路の左右に六本づつたてるもので、高さ約八十尺、徑約十二尺、柱頭はそのうち十一尺の高さを有すといふ。



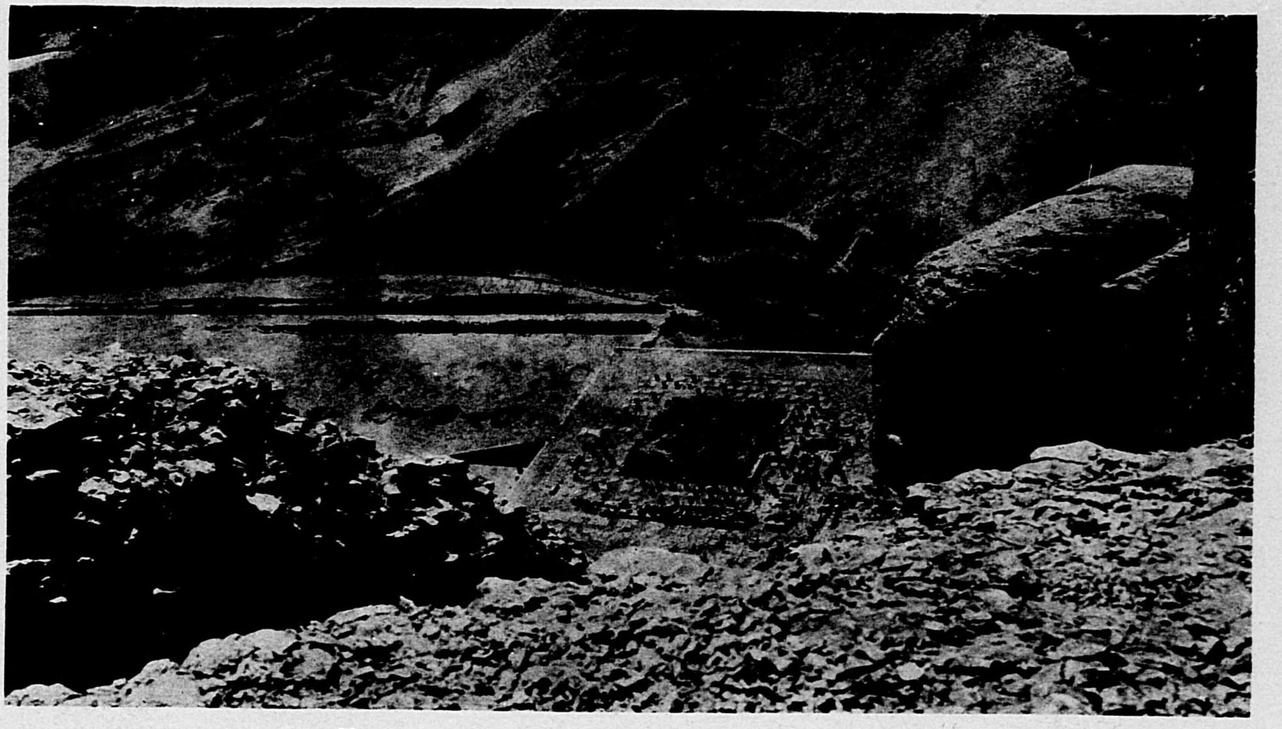
67。デイル・エル・バハリ堂全景　（昭和十年十月十九日）

私が初めて此堂の正面へ立ったのは，大正十一年十月二十八日の事で，「砂は灰色に，背景なるリビアの絶壁は赤褐に光り輝き，澄み渡った青空は，唯さへ青いところに赤褐の餘色の關係上一層濃藍色に見え，絶壁の麓なる段形の壇上に配置されたる僧庵の列柱は白色に光り，各列柱間は深き陰影の爲め黑色に見えた」が，今度も全く同樣で，同じ程度に氣に入ったので，復一枚寫しておいた。



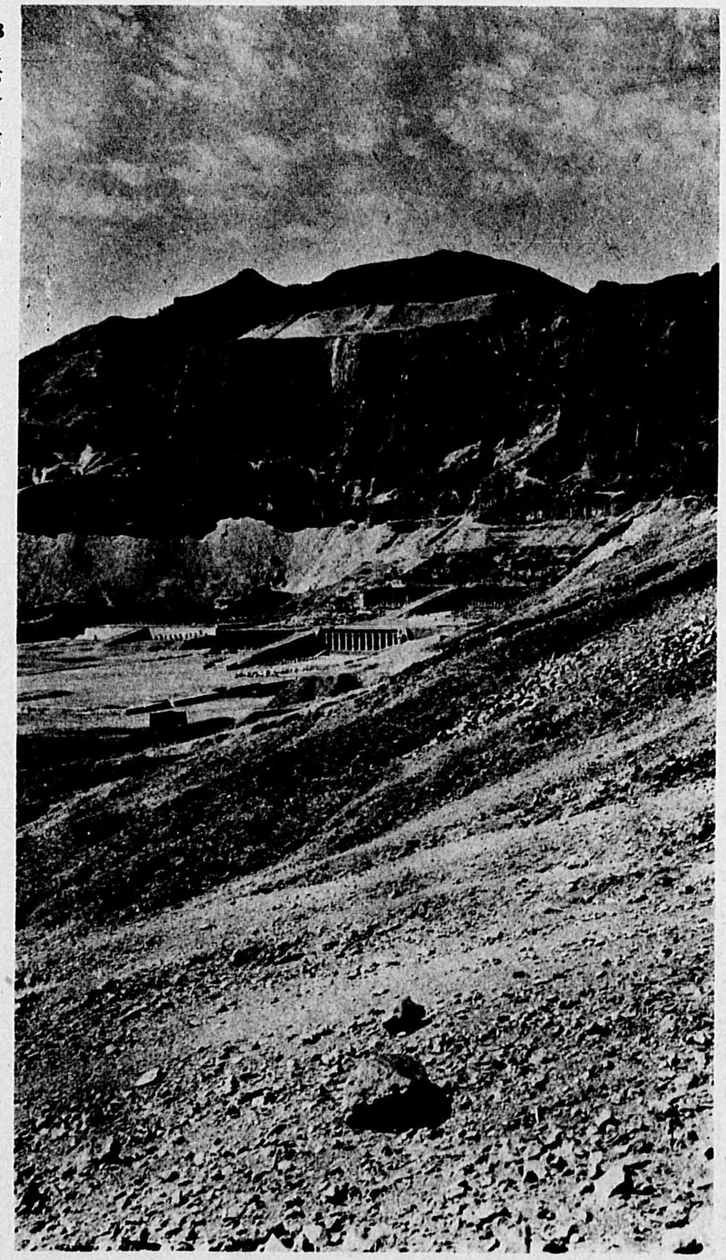
68。デイル・エル・バハリ堂とメンツーホテップの葬禮堂俯瞰圖　其一　（昭和十年十月十九日）

王陵(Biban el-Muluk)から小丘を越え——といっても歩くのではなくて驢馬へ乘ってであるが——てデイル・エル・バハリ(Deir el-Baḥri)堂の方へ行くと，第一に此堂の西南隣にあるメンツーホテップの葬禮堂(Mortuary Temple of Kings Mentuhotep III. (次頁へ)



69。メンツーホテップの葬禮堂俯瞰圖　（昭和十年十月十九日）

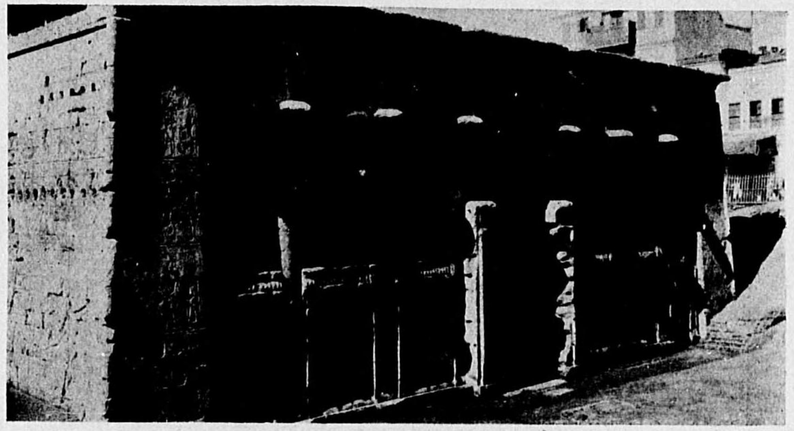
(前頁より) and IV)が見え(69)，夫からだんだん下りて行くと，夫と並んだ美しい殿堂の廢墟が見えてくる。「デイル・エル・バハリ」とは「北の僧庵」といふ事ださうな。實にこの二廢墟を俯瞰するのは，一人では惜しい位(68)。何度見てもあきる事のない景色。

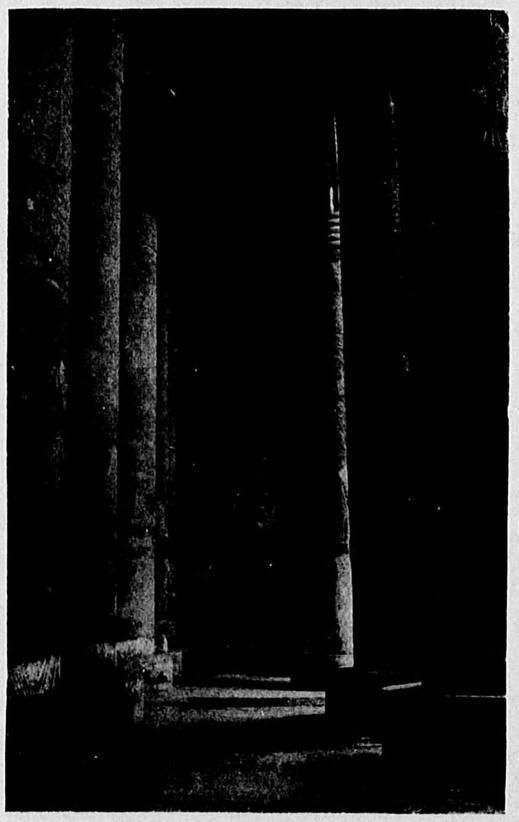


70。デイル・エル・バハリ堂とメンツーホテップの葬禮堂俯瞰圖　其二

（昭和十年十月十九日）

68に示した景を見て尙少し丘を下ると、今度はこの樣な風に變ってくる。こうなると初めて殿堂が二段になってゐることが判ってくる。景勝の地を占めて、洵にうまく造ったものである。ハタス女王（Kemaré Hatshapsut. 第十八王朝の建立に係る有名な堂。



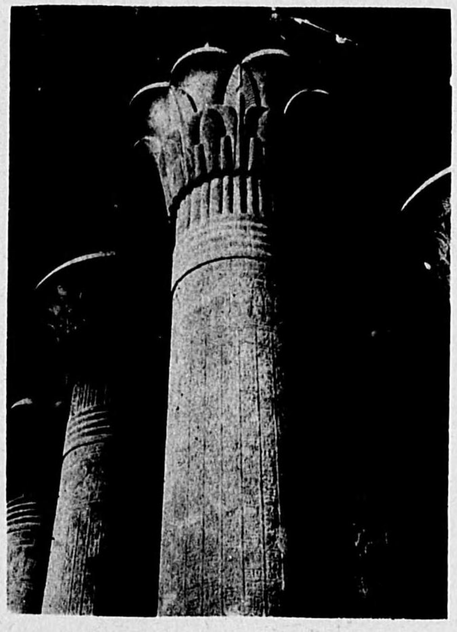


上、71。イスナ堂正面　（昭和十年十月二十日）

下、72。同　内部列柱　（昭和十年十月二十日）

イスナの町はエスナともエスネーとも、其他いろいろに呼ばれてゐるが、町の中に古殿堂の一部分が殘ってゐる。餘りあたりがうるさく、町の中すぎておちつかない。

現存してゐる入口の部分は、四列六行に柱が並んでゐるが、柱間は中央の部分が最も廣く、其左右の三所は何れも柱間が同一である。さうして正面六本だけは、上圖で見る樣に下半を石壁でつないでゐる。下圖は內部の列柱の狀態を見せたもの。



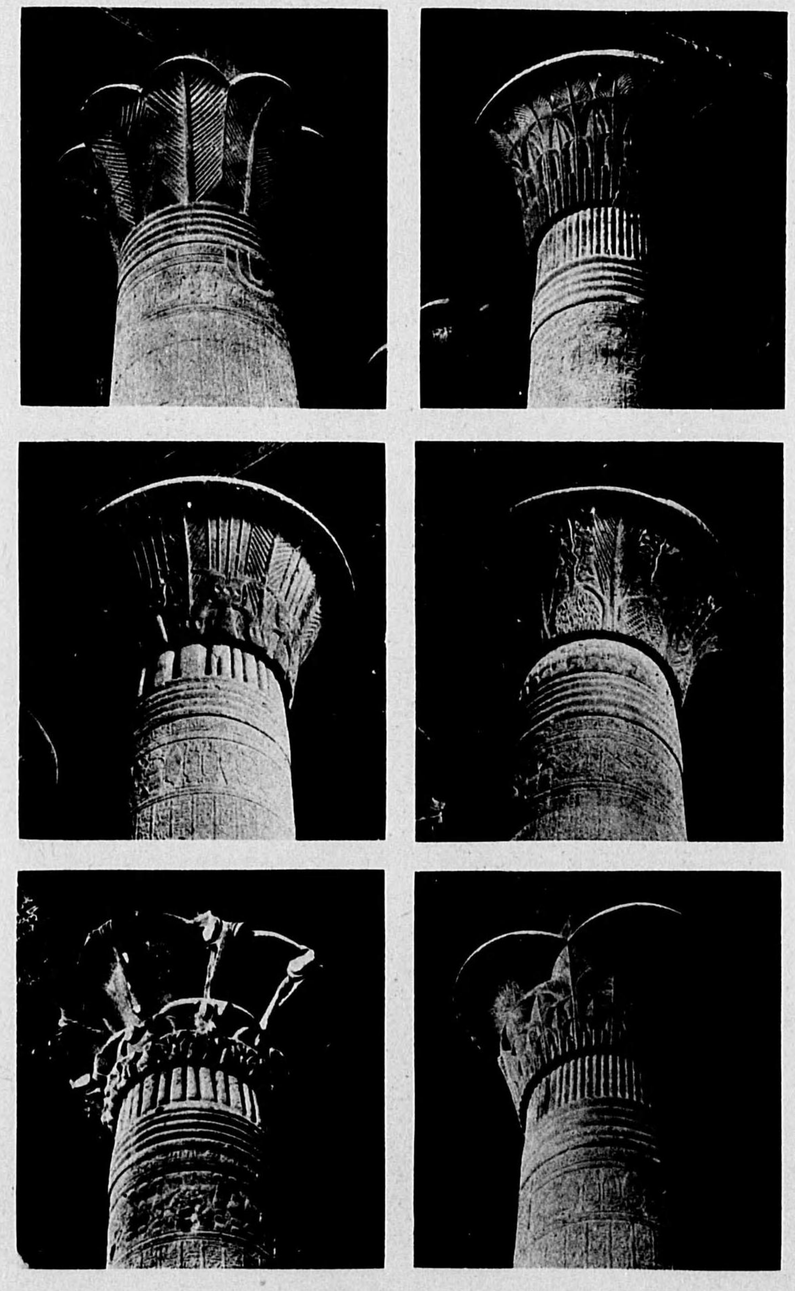
下、74 イスナ堂内部列柱柱頭　其二　（昭和十年十月二十日）

（下より）柱頭をみるに、或は一つや二つは同じ意匠のものがあるかも知れないが、殆んど全部が皆異なってゐて、よくもこの様に變った形が考へ出されたと思はれる位である。此堂はトレミー時代（332—30 B. C.）の建立といふ。これでみると隨分早い時代から柱頭には隨分苦心をして、いろいろの形を考へだしたものである。各柱高さ三七尺、徑約五尺六寸。

此堂正面、長さ一二〇尺高さ五〇尺、羊頭人身の神なるクヌム（Khnum）を祀る。

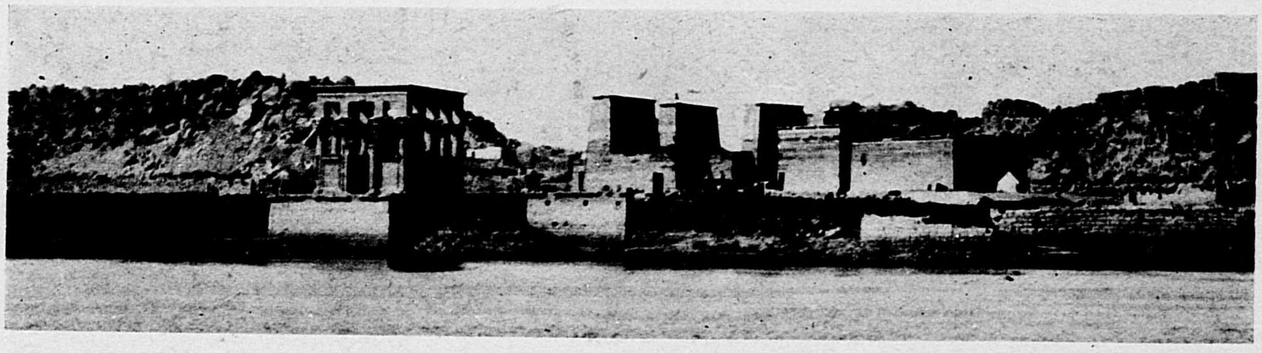
上、73. イスナ堂内部の列柱柱頭　其一　（昭和十年十月二十日）

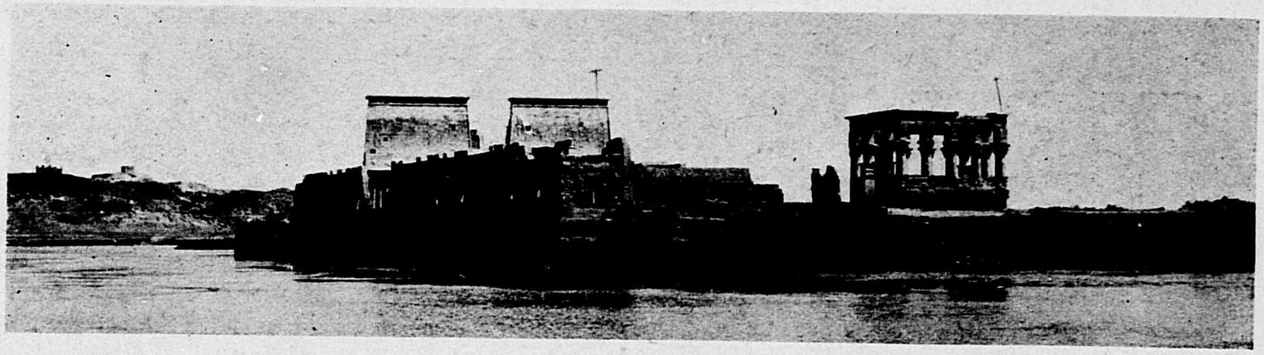
ギリシャ・ローマの建築に於いては、ドーリヤ式・イオニヤ式・コリント式等、何れも一つの建築に於いては、柱頭は何れも同一式であった。ところが東羅馬建築となると、一建築の柱頭は、一つ一つ皆異った意匠のを用ひたりしたから、種種雜多の柱頭があったりした。日本に於いても室町時代頃になると、木鼻の兩側面の彫刻を全部異にしたり、又蟇股の如きは、既に鎌倉時代に於いて、全部異なった繪畫的彫刻を脚間に入れたのは決して珍らしくない狀態である。今このイスナ堂の入口の廣間に用ひられたる（上へ）



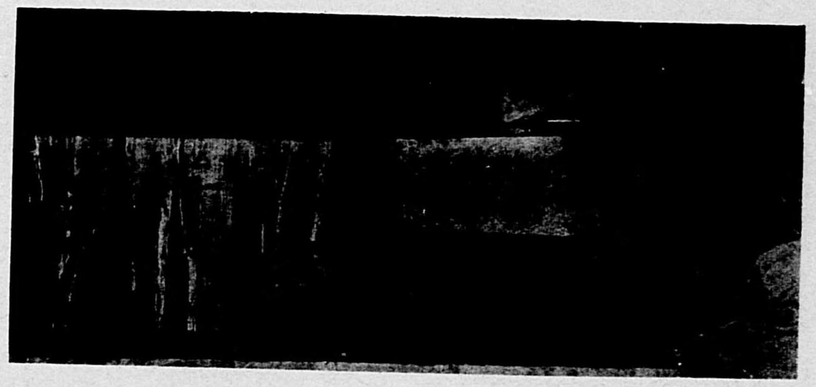
75. イスナ堂柱頭六種

（昭和十年十月二十日）





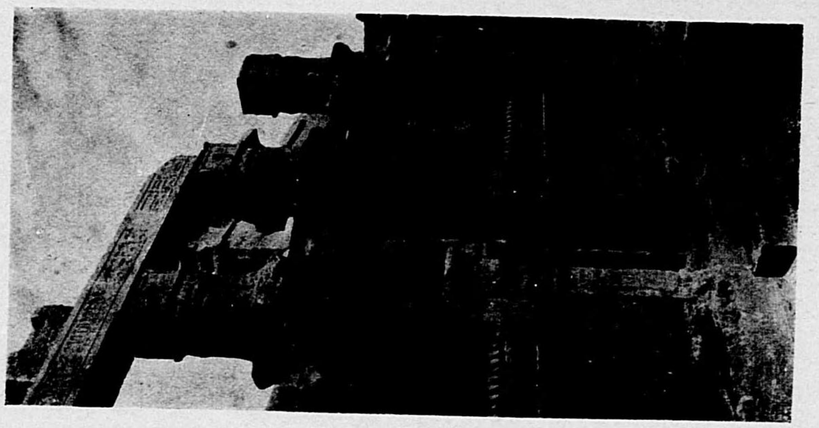
上，76。ファイレー嶋のアイシス堂　其一（東北方より）　（大正十一年十一月一日）
下，77。同　　其二（東南西より）　（昭和十年十月十五日）
以前は内流河の石堰堤が低かったので，水門を閉めても，水は大門の半分位——上圖に色が變ってゐるのと線がついてゐるのでよく判る——までしか水が上らなかったが，今度堰堤を廣くしたため，最高水位は大門及び右方小建築の一角にたてる棒の上迄になった。



左、78。誕生堂の複合柱
（昭和十年十月十五日）

アイシス堂正面の大門を入ると、左手に獨立した小建築がある。其側柱は開花紙草及び女神ハソール (Hathor) ——ハソールには其上にいつも必ず殿堂がついてゐる——の複合柱頭をもってゐる。

ハソールは上古埃及のデンデラ及アフロデテスポリスの女神であり、ラクソルの對岸シープス（テーベ）では塞地の守護神として崇拜された。牛頭人身が出現する事もあった。



右、79。アイス堂内庫
（物差は曲尺の一尺・昭和十年十月十五日）

アイシス堂の最後の室、即ち内庫の眞っ閑な室に高さ約四尺のシエナイト製の盞がおいてある。此盞はユーアージチーズ二世 (Euergetes I, 247—222 B. C.) が妃と共に獻納したものださうで、當初はこの上に「神聖な小舟」があり、この小舟に女神アイシスの像が安置してあったといふ。この種の小舟が實物が殘ってゐるのは一つもない樣である。

80。アクロポリス丘上よりテセイオン堂の俯瞰（昭和十年十月二十八日）
圖の殆んど中央に見ゆる「單列周柱六柱式堂」(Peripteral Hexastyle Temple)が卽ち夫である。

81。テセイオン堂全景（昭和十年十月二十八日）
西紀前465年(孝昭天皇の御世)頃の創建と推定されてゐる。保存の狀態は甚だ良好。ドーリヤ式(Doric order)建築の一好例。

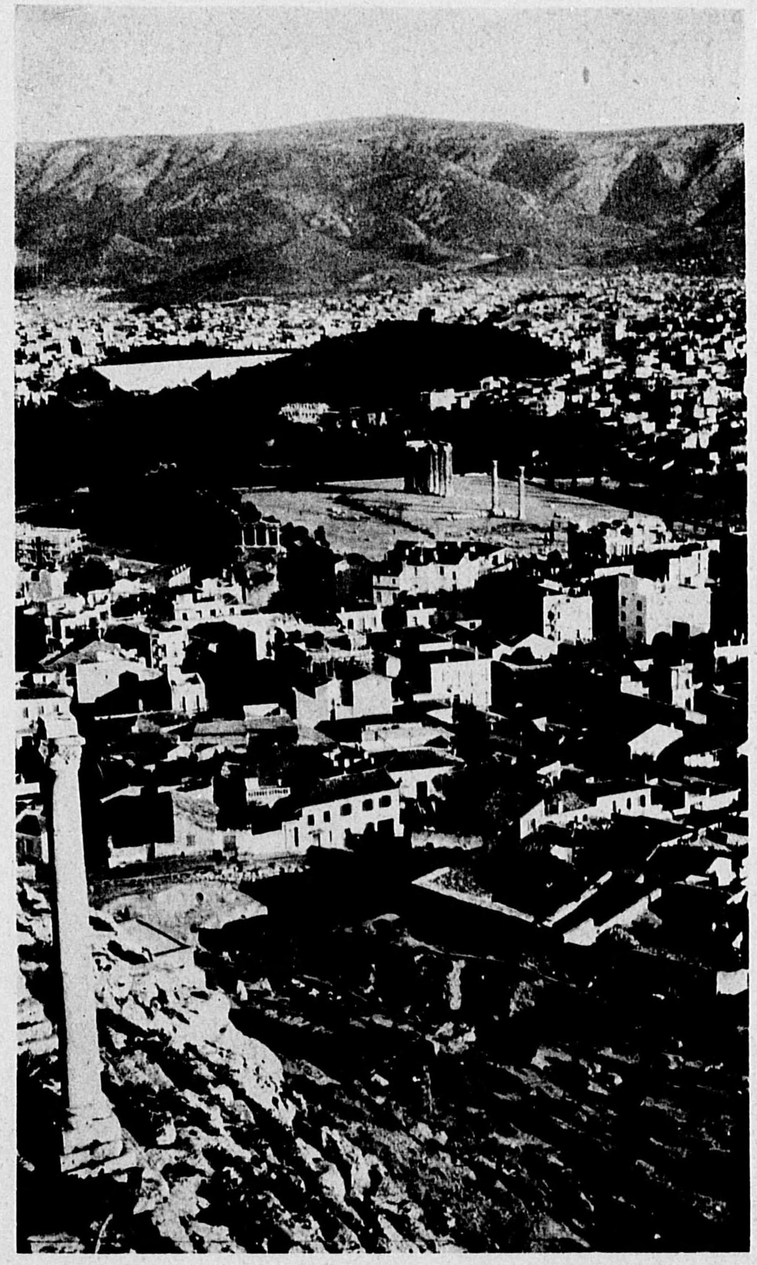
上、82。テセイオン軒一部　（昭和十年十月二十八日）
下、83。同　南側歩廊　（昭和十年十月三十日）

前頁の圖及び此等二圖で見る如く、「單列周柱六柱式堂」(Peripteral Hexastyle Temple)であるから、周圍に歩廊があること下圖の如くである。軒にはいろいろな彫刻が入ってゐたが、現在大部分は失はれ、其僅かが存してゐるのみである。東西の兩切妻の妻飾にも、當初は全部彫刻が充塡されてゐたが、今一つもない。中世一度耶蘇會堂にされた時、東端に後陣がつくられた事があった。

上、84。ヂオニソスの劇場俯瞰　（昭和十年十月三十日）
下、85。同　一部　（昭和十年十月二十八日）

上圖はアクロポリス丘の東端に近いところからヂオニソスの劇場(The Theatre of Dionysos)を俯瞰したところで、中央揺鉢の底の様な部分はオーケストラで、坐席は其部分を巡って段形につくられてゐた。つまり地盤をほりしづめて造ったのであるから、偉大なるアリヂゴクの巣の様なものだと思へばよろしい。この劇場は西紀前三四〇年（仁德天皇の御世）の建造といふ。下圖はオーケストラの一部から坐席を見たところであるが、實はここにおいてある四個の柱頭を見せるのが主である。この種のは風塔(89・90)にある以外に見出されてゐないと思ってゐたもので、コリント式柱頭の一異例である。

85。アクロポリス丘上よりオリムペイオン廢墟遠望



（昭和十年十月三十日）

圖の右上に近く、綠樹に覆はれた小丘の下、長方形の大きな空地の内に、白い細い長さ二分五厘位の棒がかたまって十四五本と、夫から少し離れて二本たってゐるのはジュピター・オリムピウスの神殿卽オリムペイオンの廢墟で、其斜左少し下に下が拱になり、上に柱が四本建ってゐるのは「ハドリアンのアーチ」と呼び、同帝（又は後繼者）の建立といふ。

上、87。オリムペイオン　其一　（昭和十年十月二十七日）

下、88。同　其二　（昭和十年十月二十七日）

オリムペイオン（Olympeion）はハドリアン帝により、西紀後一一七年（景行天皇の御世）に完成されたもの。柱徑六尺三寸餘、高五十六尺、卽ち約一間高約九間半、コリント式柱頭をもった大したもの。下圖地面に倒れてゐるのは、まるで大根でも切った樣だが、徑一間とは到底思へない。

89。謂はゆる「風塔」全景　(昭和十年十月三十日)

「風塔」(Tower of the Winds)と知られてゐる圖の如き建物がアテネの町にある。其創建は西紀前 109—35 (崇神天皇の御世)と傳へ，アンドロニコスなる人が水時計を裝置して時を計ったもので，實名は「アンドロニコスの時計」(Horologium of Andronikos Kyrrhestes)。壁體上部軒下には風神像(次頁右圖參照)と日時計とを刻し，屋上は當初青銅製トライトン(Triton)の像がのせてあったさうである。

右、90。謂はゆる「風塔」近景　(昭和十年十月三十日)

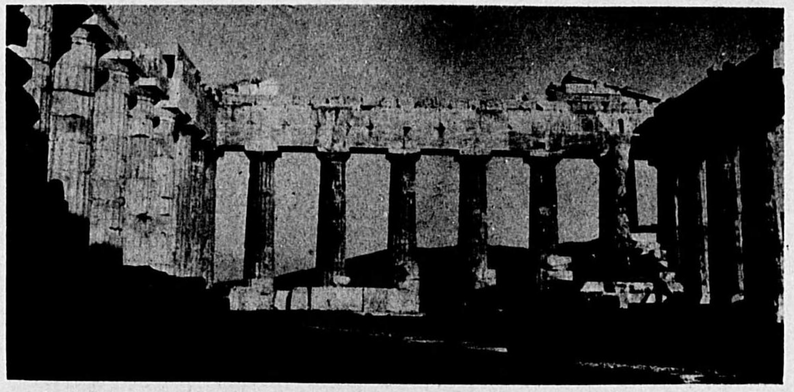
左、91。リシクラチースの記念碑　(昭和十年十月二十七日)

有名なリシクラチースの記念碑(Choragic Monument of Lisicrates)も鐵柵で圍まれ、立札ができたり、民家でとり卷かれたり、古典味は惜しいことに大分減殺されて了った。

上，92，パルテノン全景　其一（西南方より）　（昭和十年十月三十日）

下，93。パルテノン全景　其二（東北方より）　（昭和十年十月三十日）

アクロポリス丘上東西の中央，南北では南によって建てられた有名な神殿で，西紀前454—438年（孝昭天皇の御世）の建立，祭神はアテネの女神なるアテナ・パルテノス，現在の位置は昔のアテナの殿堂の南に當り，アテネの黄金時代と言はれたペリクルスの時であった。テセイオンでは兩妻——といったところで切妻妻入である事は改めて述べる迄もないが——に6本の柱があったが，此神殿では8本であり，又側面が13本であったのに此は17本である。側面の柱は考へずに，正背（次頁へ）

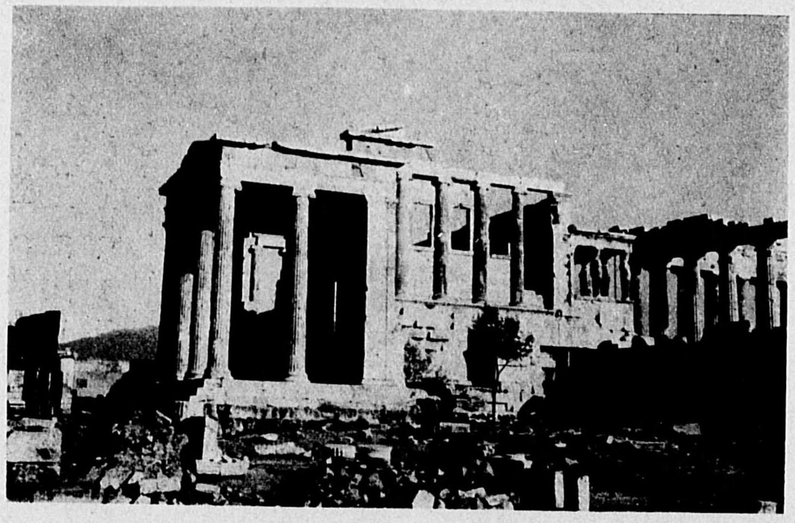


上，94。パルテノン内部（東面）　（昭和十年十月三十日）

下，95。パルテノン北側列柱一部　（昭和十年十月三十日）

（前頁より）面のだけでいふと8本だから，こういふ殿堂を「單列周柱八柱式堂」（Peripteral Octastyle Temple）といふ。

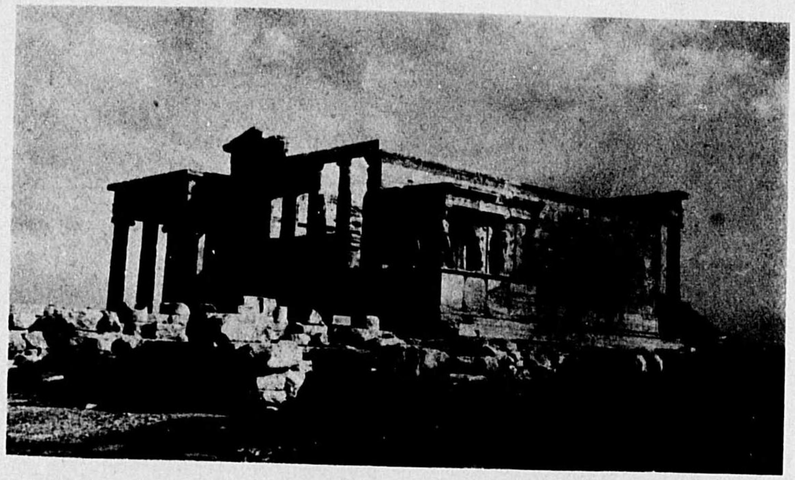
三段の石基壇上に建ってゐるが，其基壇の大さは，正面約四十八尺，側面約一二五尺五寸，其比4とりの割合といふ。其周圍になってゐる大理石柱は，元口徑約六尺餘末口約四尺八寸，高さ約三十四尺だから，さっと基礎に於ける徑の五倍半である。さうして隅柱は我國の木造建築に於いて，普通直徑は一割増だが，此場合は下で約一寸四分，上で約一寸二分増してあるだけである。

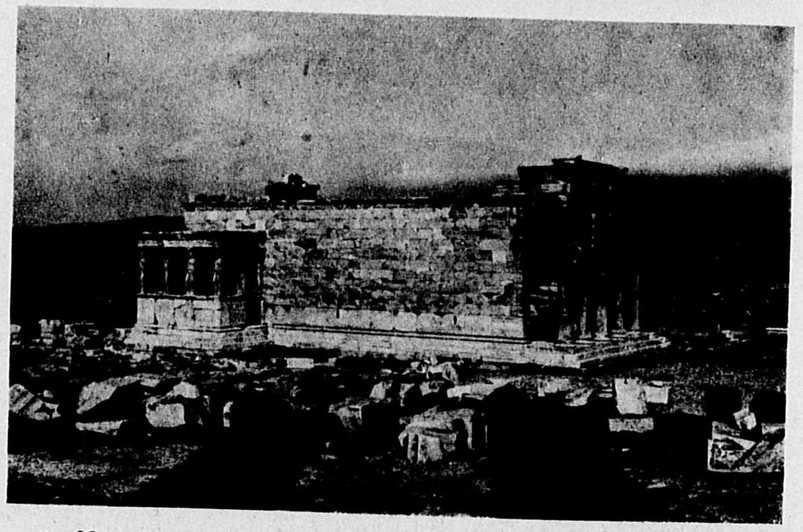


上，98。エレクテイオン全景　其三　（東方より）　（昭和十年十月三十日）

下，99。同　其四　（西方より）　（昭和十年十月三十日）

（前頁より）は特殊の平面を持ってゐる點に於いても有名である。出入口は三個所あり，第一に東入口(98)，第二に北入口(99)，第三に女像入口(96・97)。以上のうち第一の東入口の柱間は直徑の二倍あいてゐるし，第二の北入口は三倍とい（次頁へ）

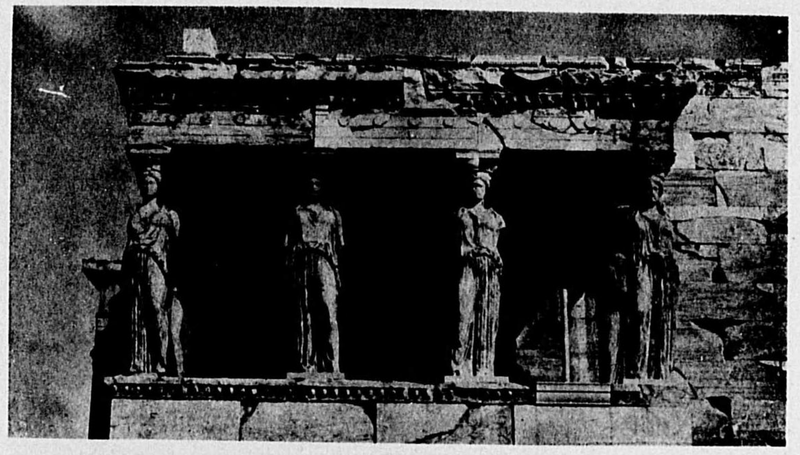




上，96。エレクテイオン全景　其一　（西南方より）　（昭和十年十月三十日）

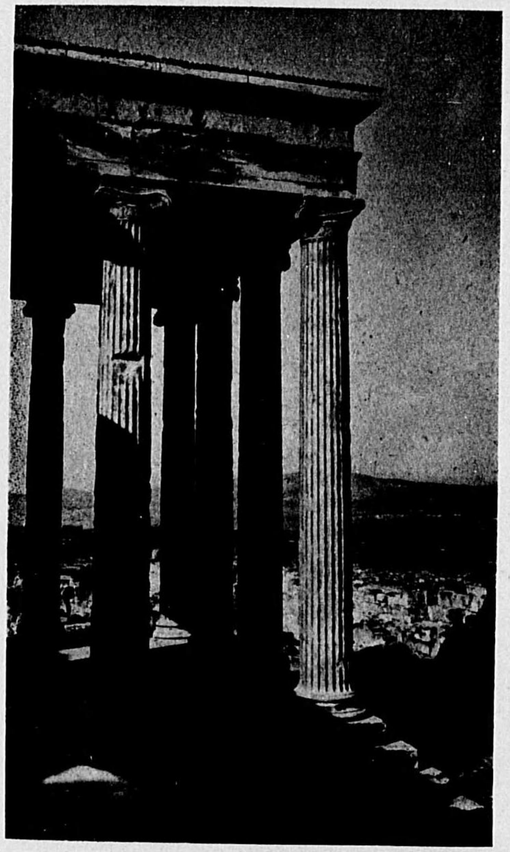
下，97。同　其二　（東南方より）　（昭和十年十月三十日）

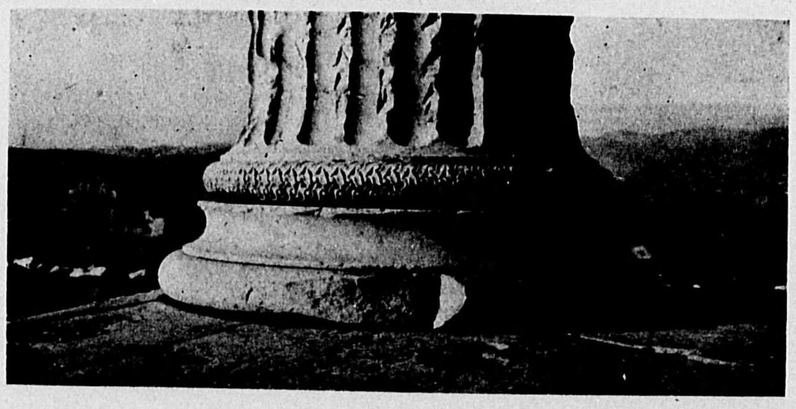
パルテノンの北方，アクロポリスの丘上に建てられた神殿で，西紀前423—393年（孝昭天皇の御世）の創始といふ。地所に高低のあるため，四方の眺めは何れも異なってゐること96—99の四圖に示した如くである。希臘の殿堂は其平面が圓形又は長方形であるのが普通で，小さいのは周圍が壁だけれども，大きいのは柱が一列又は二列にとりまいてゐて，至極整然としてゐるのに，エレクテイオンだけ（次頁へ）



上、102。カリアタイド　其一（南方より）　（昭和十年十月三十日）
下、103。同　其二（西南隅より）　（昭和十年十月三十日）

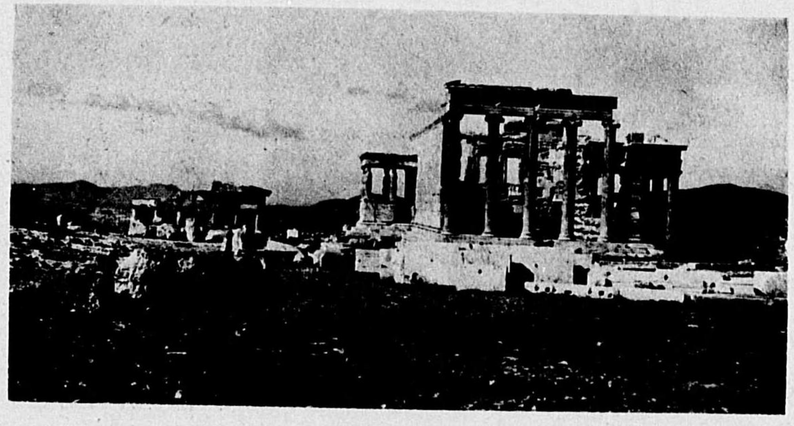
第三卽ち女像柱をもてる入口は、この二圖に示した樣なもので、南側に四人、東と西とに一人づつ、合せて六人の女像を柱の代りとしたもの。カリヤタイド・ポーチ（Caryatide Porch）として甚だ有名である。女像高さ約七尺七寸餘、何れも南面し、中央より東（向て右）は左足に、西の三像は右足に體重を託してゐる。

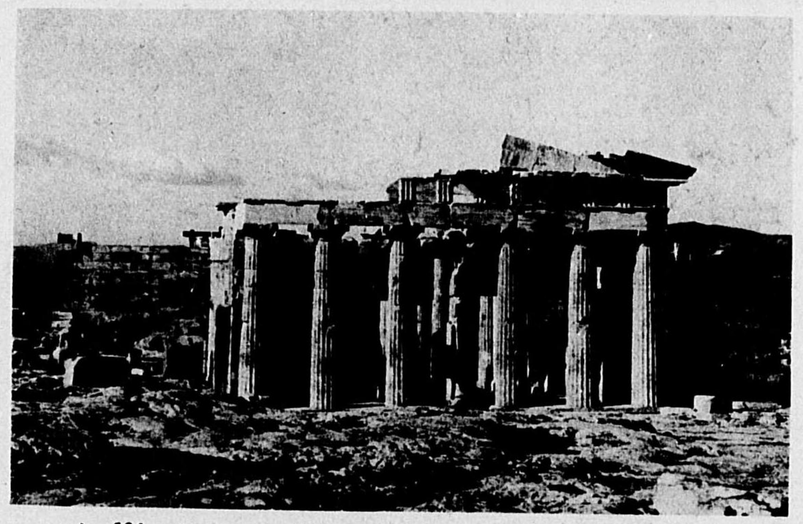




上、100。エレクテイオン北面列柱（東方より）　（昭和十年十月三十日）
下、101。同　西北隅柱基礎詳細　（昭和十年十月三十日）

（前頁より）った樣な關係をもってゐる。さうして其上に隅柱の隅の方向に、渦文が出してあることに注意すべきである。イオニヤ式柱頭は、正面からは形がいいが、側面からは大して感心ができない。夫を隅に用ふるときは、側面の體裁が洵にまづいのに、斯樣にして隅の方向に渦文をつける事を考案してからは、100に見る如くこの點は全く都合がよくなって來た。さうして基礎上部の玉緣には輪繫（Guilloche）で裝飾がしてある（101）。

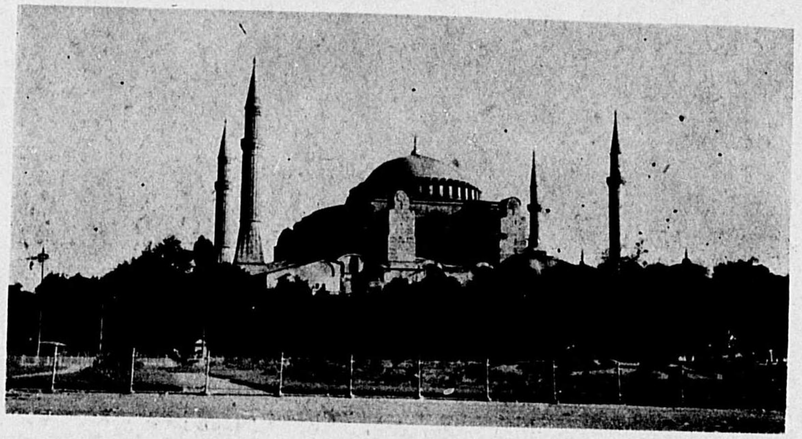




上，**104**。プロピリアム遠望（東方より）（昭和十年十月二十八日）

下，**105**。プロピリアム近景（東方より）（昭和十年十月二十八日）

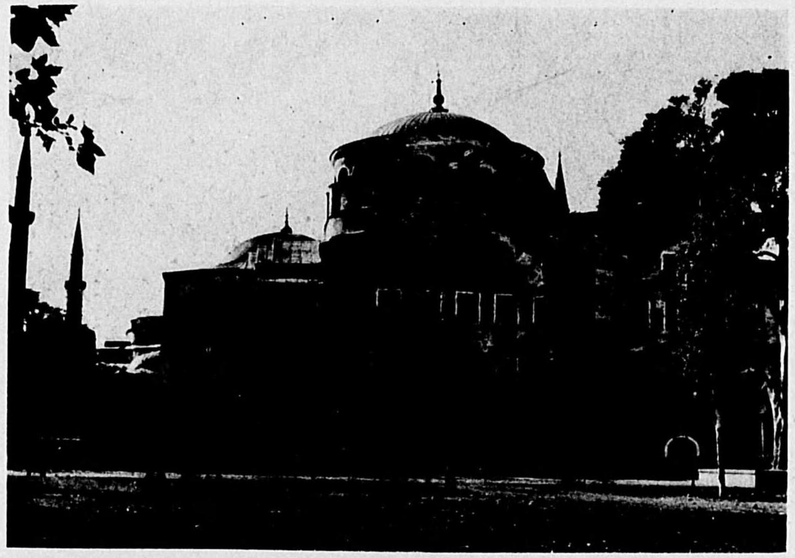
プロピリアム（Propylaeum, Propylaea）とは一般には神殿への入口のことで，定冠詞をつけて「The propylaeum」といふと，アテネのアクロポリスへの入口の事になる。西紀前437—432年（孝昭天皇の御世）にペリクリスの時代に建てたものといふ。正面と背面（正面から寫眞がうまくとれず，ここの二圖は何れも東卽ち背面である）とに柱が六本づつ建ってゐるが，地所に高低あり，中央は幅廣き通路で，兩方にイオニア式の柱が建ってゐる。アクロポリスの門としては堂堂として莊重である。

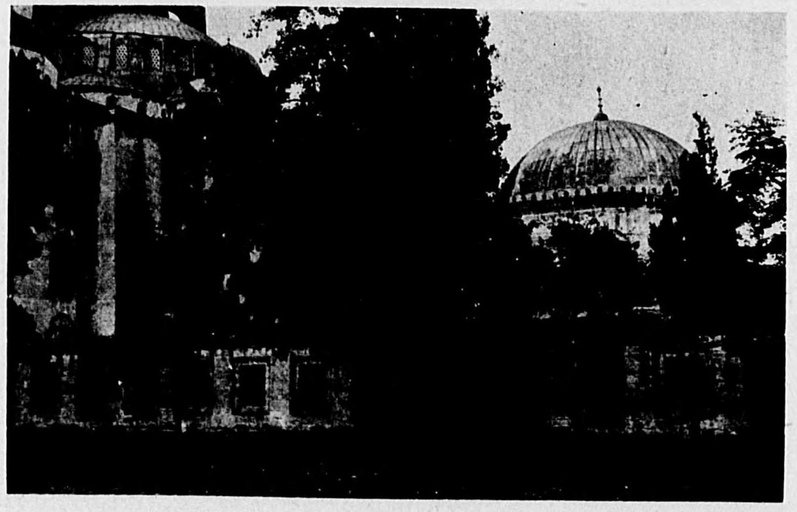


上，**106**。聖・ソフヰヤ遠望（昭和十年十一月五日）

下，**107**。同　一部（昭和十年十一月五日）

古の東羅馬帝國は、首府をビザンチウム（Byzantium）と稱し、今のイスタンブール（前名コンスタンチノープル）に置き、今の羅・勃・希・伊・アフリカの北岸からシリア・パレスタイン並に亞細亞トルコを包含した大國であったが、其建築は普通「東羅馬建築」として知られたところの、餘程特色のあるもので、第四世紀に起原し、今日に及んでゐる。其代表たるのは聖・ソフヰア寺で、西紀532—537（安閑・宣化の御代）に建立されたもの、全面積220尺×250尺四隅の光塔は後世回教徒の補加したものである。

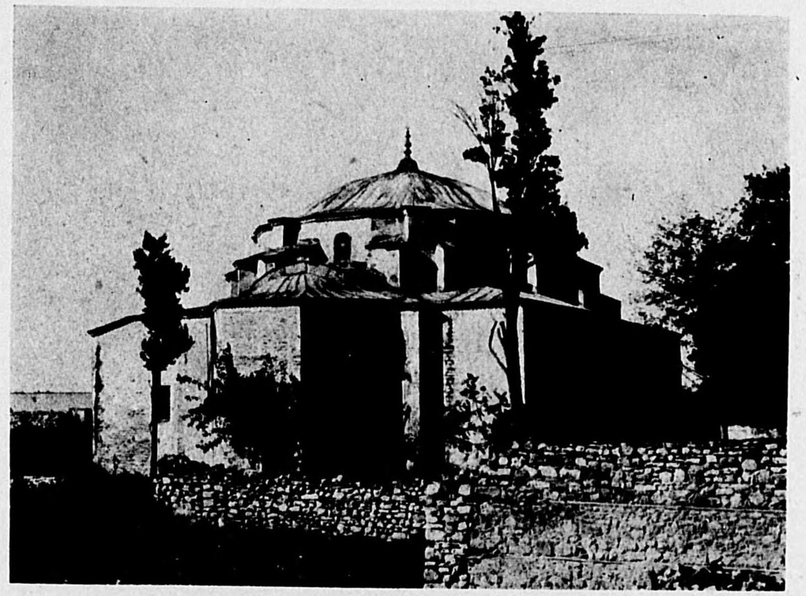




上，**110**。聖・イレーネ全景　（昭和十年十一月五日）

下，**111**。スレイマニエー寺に於けるスレイマンの廟　（昭和十年十一月五日）

聖・アイリーン寺は西紀740年(天平十二年)にコンスタンチン帝の創立といふ。數回破壞され，今は再建のもの。下圖は寺の後方に獨立して建設者スレイマンの廟がある。東羅馬式回教寺院の好例である。



上，**108**。聖・サージアス・アンド・バッカス全景　（昭和十年十一月六日）

上，**109**。同　　軒　（昭和十年十一月六日）

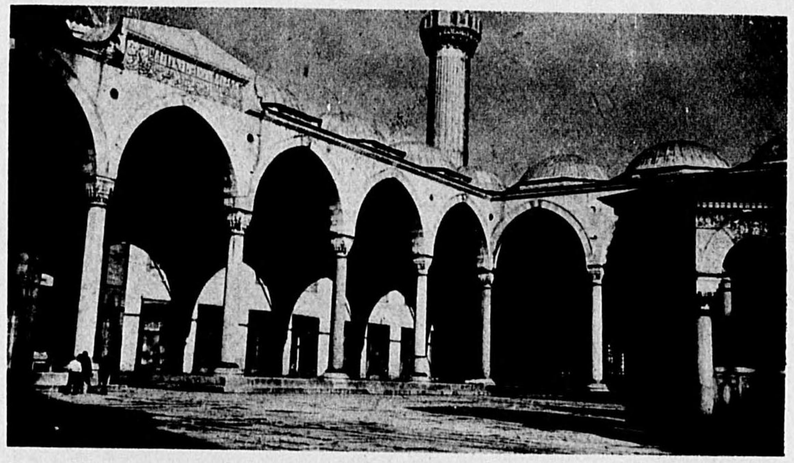
イスタンブール所在の東羅馬式建築の一例で，西紀527(繼體天皇二十一年)の建築に係り，平面の大さ92尺×109尺といふ。當初からではあるまいが，軒の手法は鐘乳飾を模したものらしく，どこにもあるが簡單で面白い(本文一一九頁註)。內部階廊下の東羅馬柱頭は注目に値す(本文一一八頁)。いつ頃の圖か知らないが上圖の位置で左方に光塔のある所が描いてあるが，今は亡い。亡い方がよろしい。

上、112。ソルタン・アーメッド寺　其一　（昭和十年十一月五日）
下、113。同　其二　（昭和十年十一月五日）

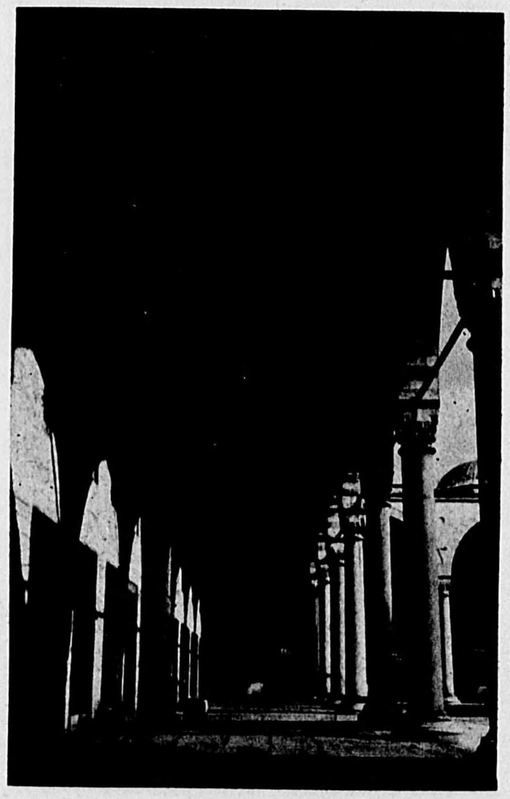
イスタンブールの町には、聖・ソフヰア寺を初めとし、スレイマニエー寺、ソルタン・アーメッド寺――一名ブルー・モスク――等等、とにかくこの様な圓蓋胴(Lantern)付の大圓蓋を中央に、其四隅又は二隅に光塔のある大規模の回教寺が少なくとも五棟あるから、洵に壯觀である。其一例は口繪22・23に示した通りで、同じ回教寺でも、開路市やダマス市のと異なり、一種獨特（下へ）

（上より）の外觀をもつてゐる。光塔の屋根の頂角が鋭角の圓錐形だからいけないが、これで若し斜面がいくらか外へ膨らんでゐたら、春の野にでる土筆と同じだから面白い。

此寺はソルタン・アーメッド一世(Sultan Ahmed I, 1580—1617)（天正十七年—元和三年）の建つる所、割合に新しいせいか隨分美しい。土耳其のソルタンにはアーメッドといふのは幾人もゐたが、アーメッド一世は西紀一五八九—一六一七年（延長七年—天德元年）の人で最も傑出してゐた。二世・三世は戰爭をして敗北してばかりゐた。

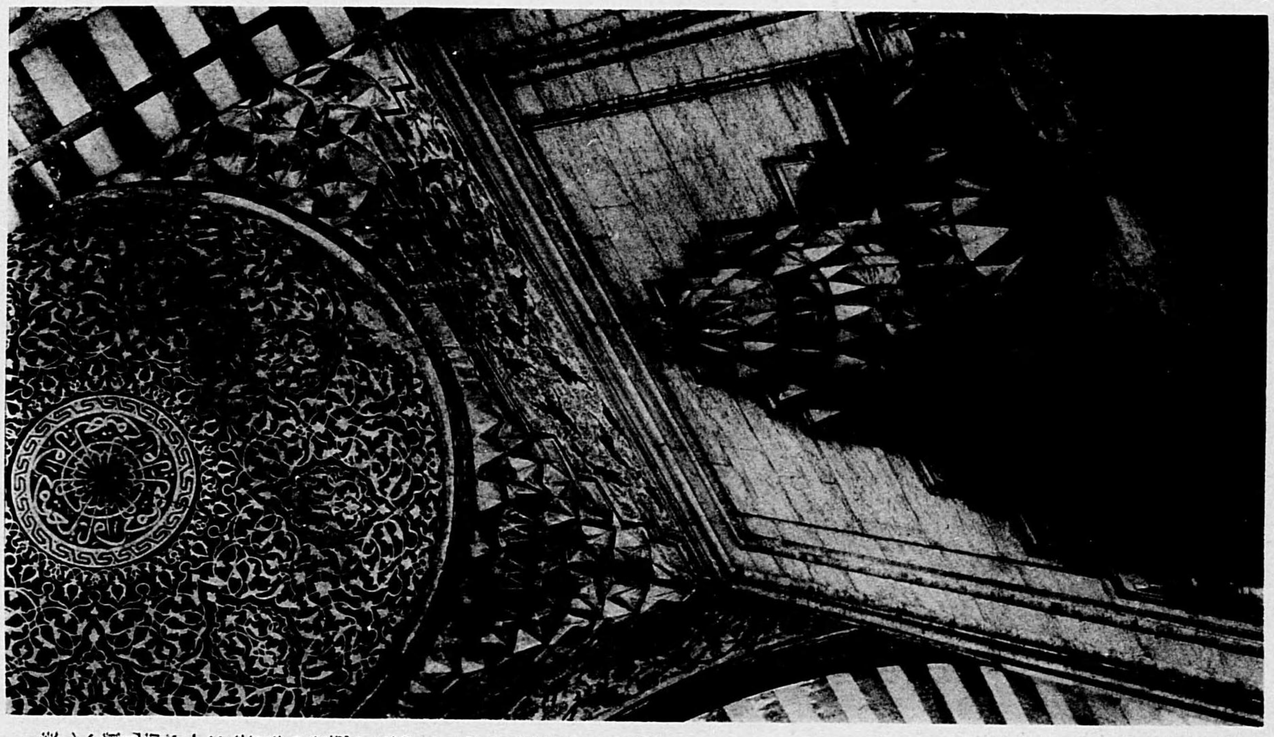


上、114。ソルタン・アーメッド寺中庭回廊　其一　（昭和十年十一月五日）
下、115。同　其二　（昭和十年十一月五日）



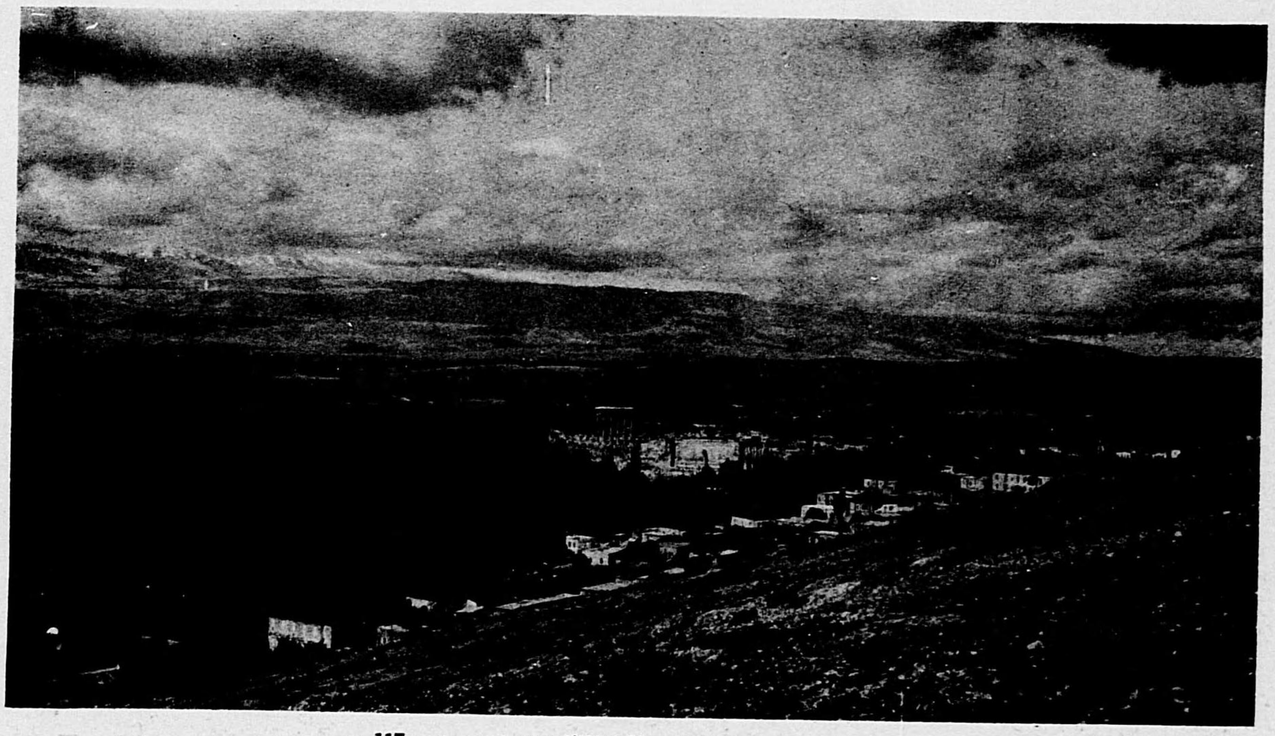
此は鐘乳柱頭の一例である。柱頭全體の形は東羅馬の夫の樣であり、鐘乳飾も少しくづれてゐる樣である。併し埃及には遙に好例があるから、4・5・16等を參照する事をすすめる。中庭の中央には例の通り噴水があるが、其周圍にたつてゐる柱も同樣だし、又光塔露臺の持送りも亦、全部此種の手法から成つてゐる。

116。ソルタン・アーメッド寺内部の鏡乳飾



（昭和十年十一月五日）

美しい鏡乳飾が一は長方形の壁龕の上部と、他は圓蓋隅弓とに現はれてゐる。共に典型的鏡乳飾で、回教建築にはいつもつきものであるが、中でも光塔の露臺下の持送りは、これにきまつてゐるといつてもいい位。13—19・26・27・130・135等參照の事。

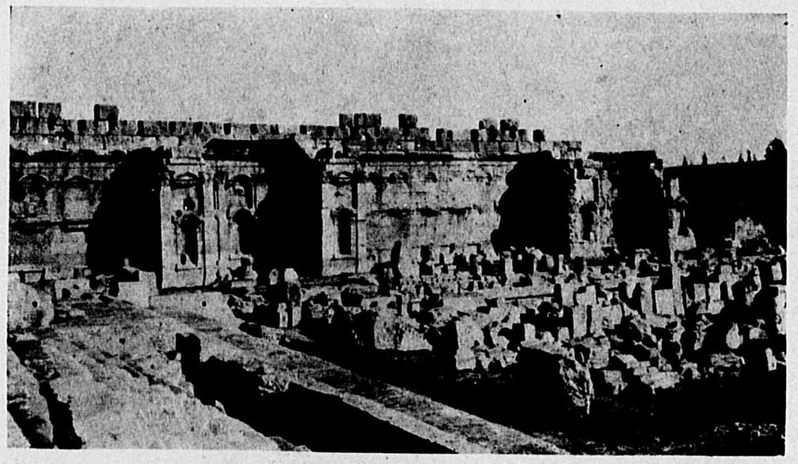


117。バールベックの廢墟全景　（昭和十年十一月十日）

シリア國バールベック(Baalbek)の町に羅馬時代の大遺跡があるが，町の東方の小丘に登ると，西北方に一際高く其全景が，レバノン山を遠景とし，綠樹の間にはっきりと浮上って見える。圖の殆んど中央に六本の柱がたってゐるのは，ジュピター大堂の夫で尙ほ原位置にあるもの(123)。其右方稍や下方の大きな壁體はバッカス堂の側壁(124・125)。

118。バールベック大堂正面大石階より西壁を見る　(昭和十年十一月十日)

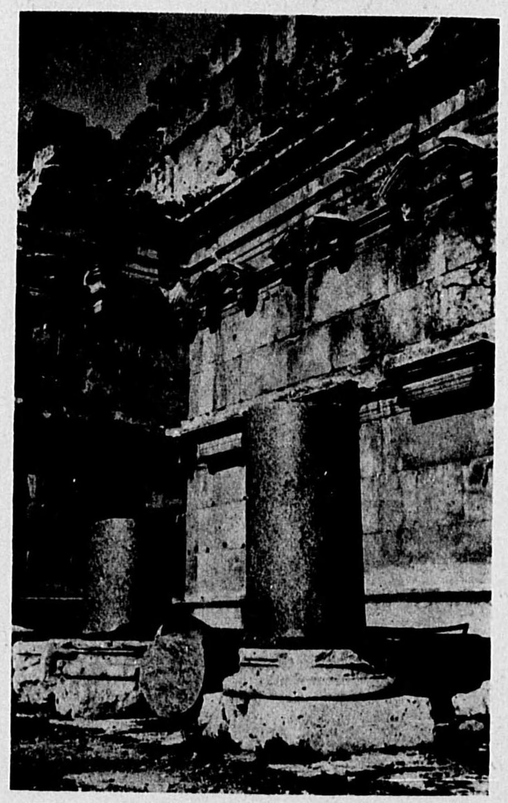
此大堂は西紀131—161(成務天皇元年—三〇年)の建造。正面には柱十二本建の入口があり，そこから六角形の前庭に出る，更に其内方に進むと方約330尺の大中庭がある。その大中庭の壁は周圍の地盤より70尺の高さにあるといふ。大堂はこの中庭のつき當りなる高さ17尺の臺地上に建ってゐたので，其前には幅の廣い堂々たる數十級の階段があったのである。

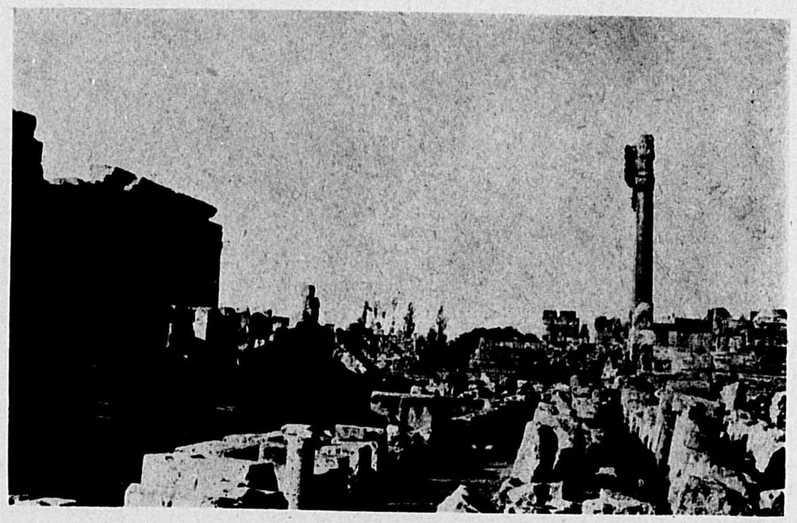


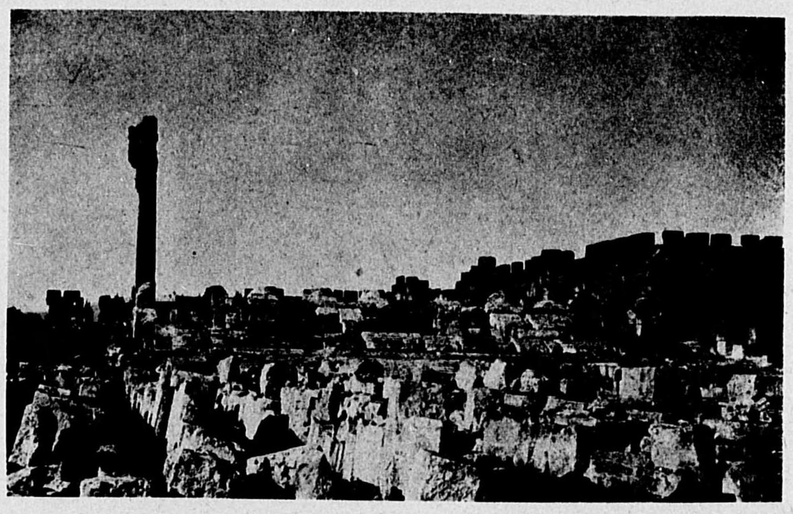
上、**119**。バールベック大堂大中庭西側壁　其一　(昭和十年十一月十日)

下、**120**。同　其二　(昭和十年十一月十日)

正面の柱十二本建の入口を入って六角型の前庭を通りぬけ、更に大中庭にでると、其左右卽ち南と北の側壁に、二個づつ半圓形に引込んだ部分がある。前圖では右端に一つ、上圖では二つ共見えてゐる。下圖は上圖の左端(前圖では殆んど中央になってゐるが)の方形の引込の隅のところを寫したものであるが、此等の部分の前面には、下圖に見る如く列柱があったのだから、復原してみれば、中庭に面しては多くの柱が並び建ち、洵に立派であったのである。







上，121。バールベック大堂正面　其一　（昭和十年十一月十日）

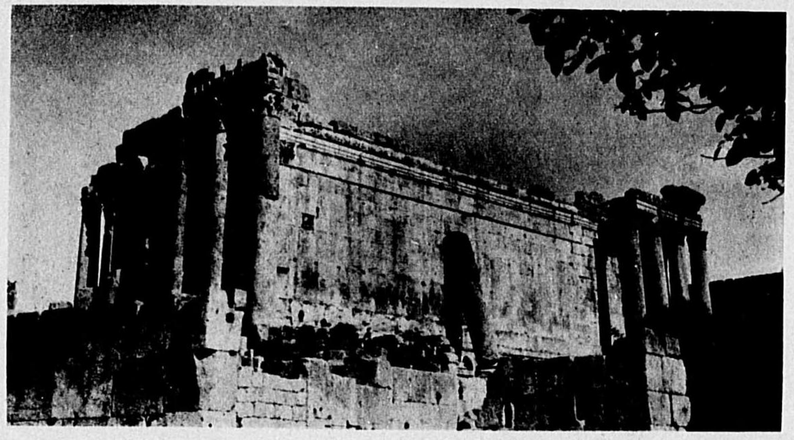
下，122。同　其二　（昭和十年十一月十日）

上圖右方，下圖左方に垂直の棒の樣に見えてゐるのは，現位置に六本だけ殘ってゐる柱(次頁)で，其棒を重ねて一枚の寫眞になる樣にすべきであるが，うまくとれなかったので，こうなったのである。上圖左端の黑く四角に見えてゐるのはバッカス堂(124—127)，下圖右方に高い石垣の樣なのは大堂北側壁體の一部。

123。バールベック大堂殘存の列柱

（昭和十年十一月十日）

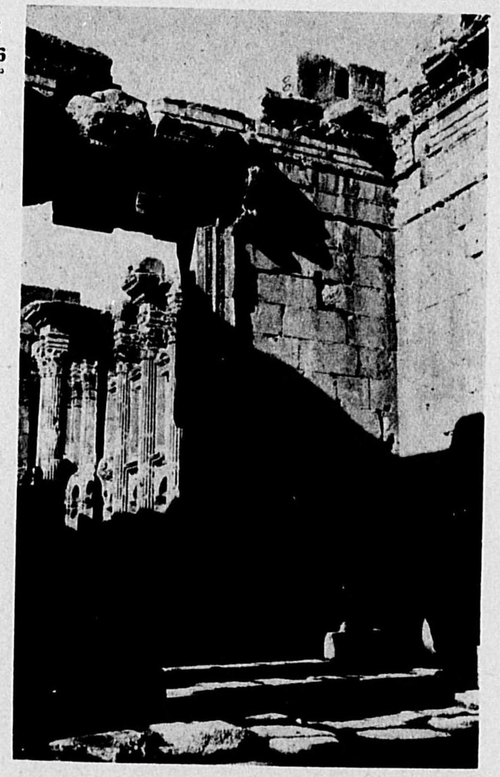
前頁の二圖に垂直な一本の棒に見えてゐたものを西南方から寫したので、大きい感を出すべく試みたのである。正背面に八本づつ、兩側面に十七本づつ、夫に四隅の一本づつを入れて、計五十四本のうち、殘ってゐるのは六本だけ、柱直徑七尺高六十五尺、軒高十三尺。



上、124。バッカス堂　其一　（昭和十年十一月十日）
下、125。同　其二　（昭和十年十一月十日）

前記の大堂に向って左少し前、ざっと東南に、大堂と同樣東面して建つ。フレッチャーはジュピター堂としてゐるが、他の書物は何れも大堂をジュピター堂とし、これはバッカス堂(Bacchus)堂としてあるから、夫等に從っておく。

此堂創立は西紀二七三年(孝靈天皇の御世)で、現今シリア國に於ける最も保存のよさ殿堂ださうである。上下圖でみる如く列柱廊(Perisyle)の柱には溝彫はなく、正面に八、側面に十五本のコリント式柱頭の柱が立ってゐたが、現今は此等二圖の如き狀態である。



上、126。バッカス堂內部　其一　（昭和十年十一月十日）
下、127。同　其二　（昭和十年十一月十日）

前頁の圖に示す如く、側面及び背面の柱は、柱身に何れも溝彫はないが、正面二重の列柱には、殿內の柱・片蓋柱等の樣に溝彫がしてある。內陣との境は上圖に示す如く上部楣の大入口があり、內陣の柱は何れもコリント式柱頭を有せる甚だ精巧なものである事、上下圖の通りである。內部の柱の一に

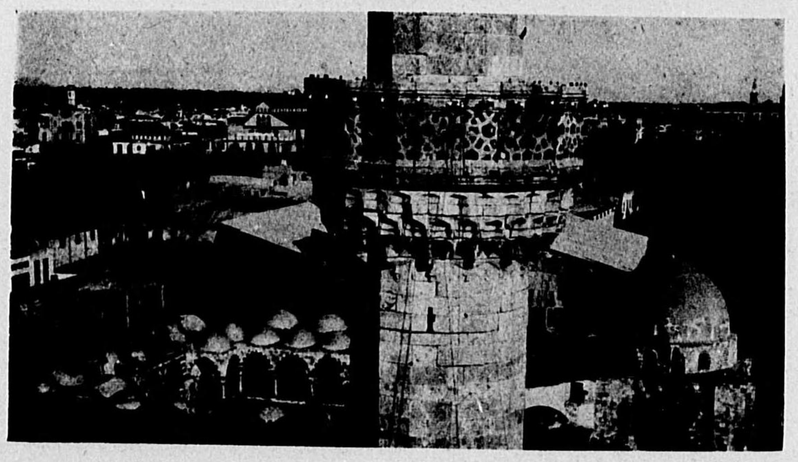
CETTE COLONNE A ETE RECONSTRUITE」　EN 1934

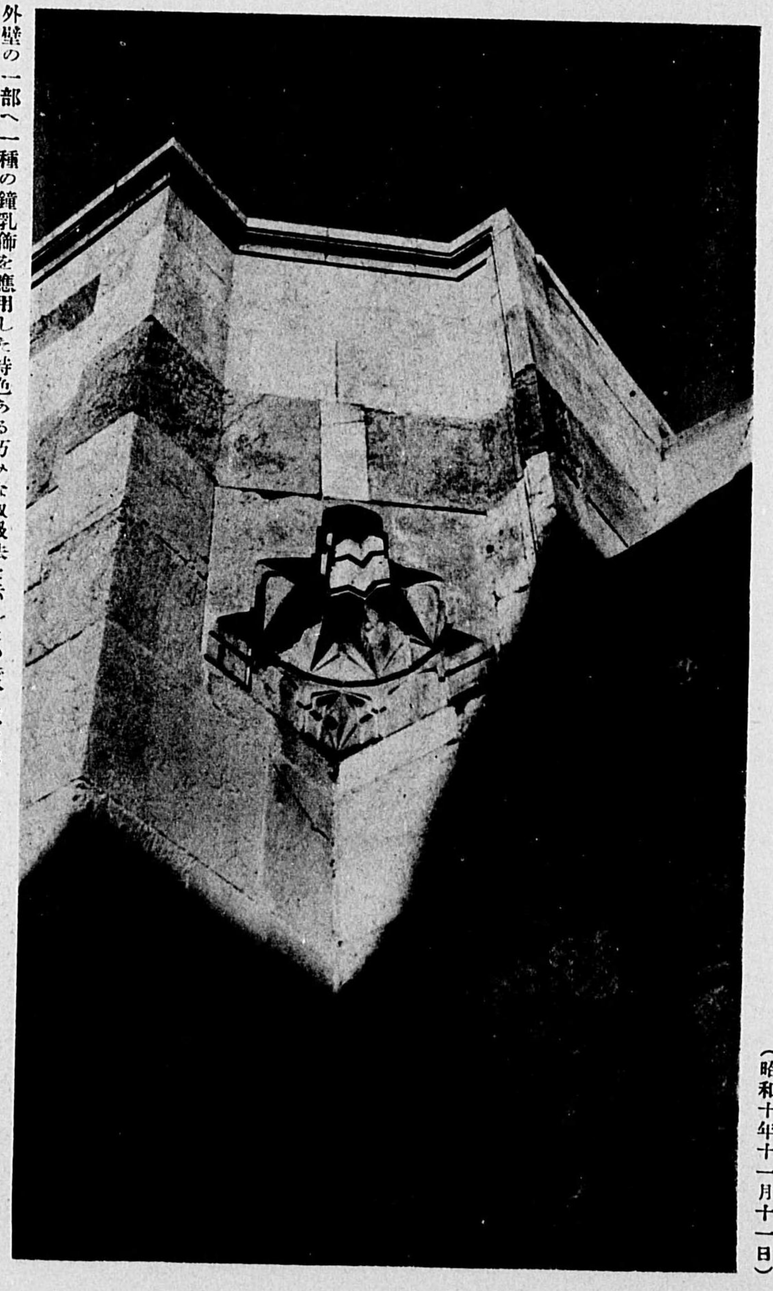
と二行にかいてあった。昭和九年佛人の手によって修理された其略記である。

上、128。ダマス市ソルタン・サリム寺正面（昭和十年十一月十一日）

下、129。同　光塔の露臺（昭和十年十一月十一日）

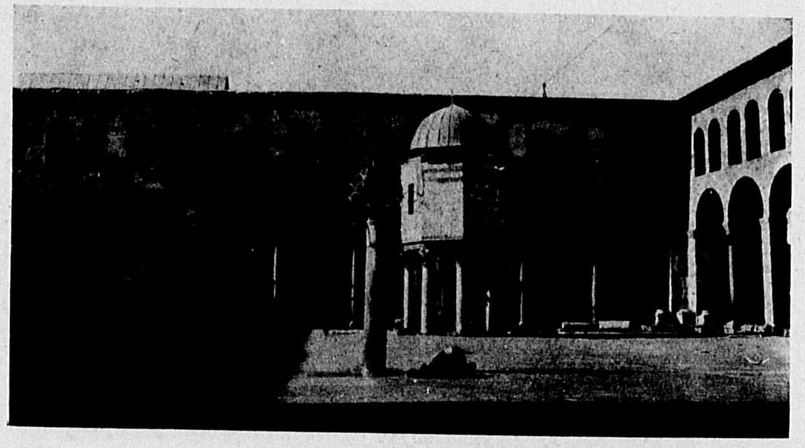
上はソルタン・サリム寺（Sultan Sélim）寺の正面で、東羅馬圓蓋胴と圓蓋と光塔とを有すること、一見イスタンブールの回教寺の如くである。内部は禁制で入れなかったが、光塔へは上れたから、西光塔の露臺上から、東光塔の一部を寫したのが下圖。其勾欄と鐘乳持送とに注意せよ。

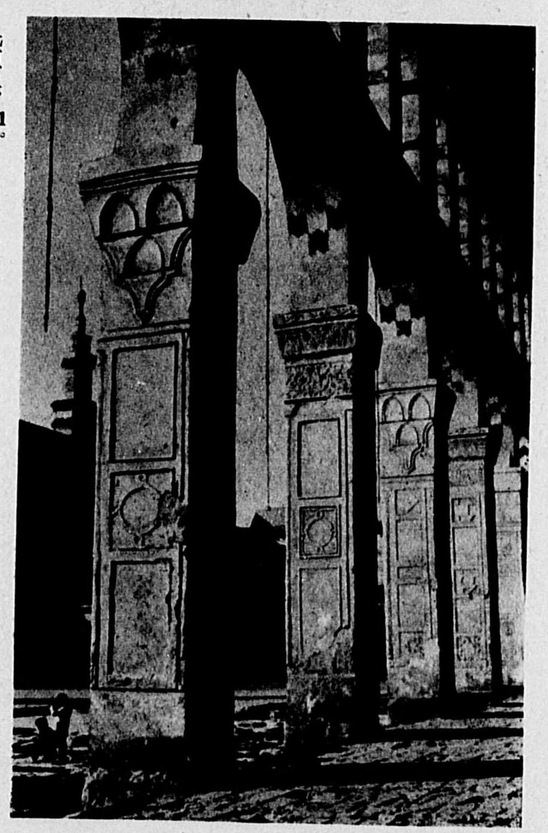




130。ソルタン・サリム寺外壁の鐘乳飾（昭和十年十一月十一日）

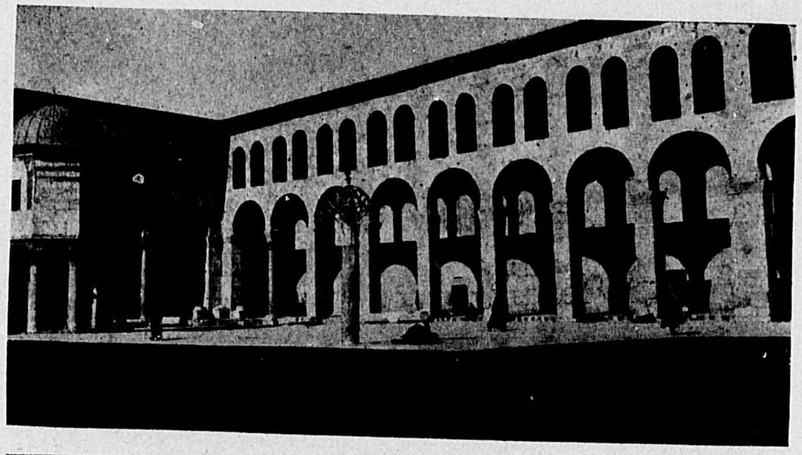
外壁の一部へ一種の鐘乳飾を應用した特色ある巧みな取扱法を示したので、私は非常に面白いやり方だと思ってゐる。





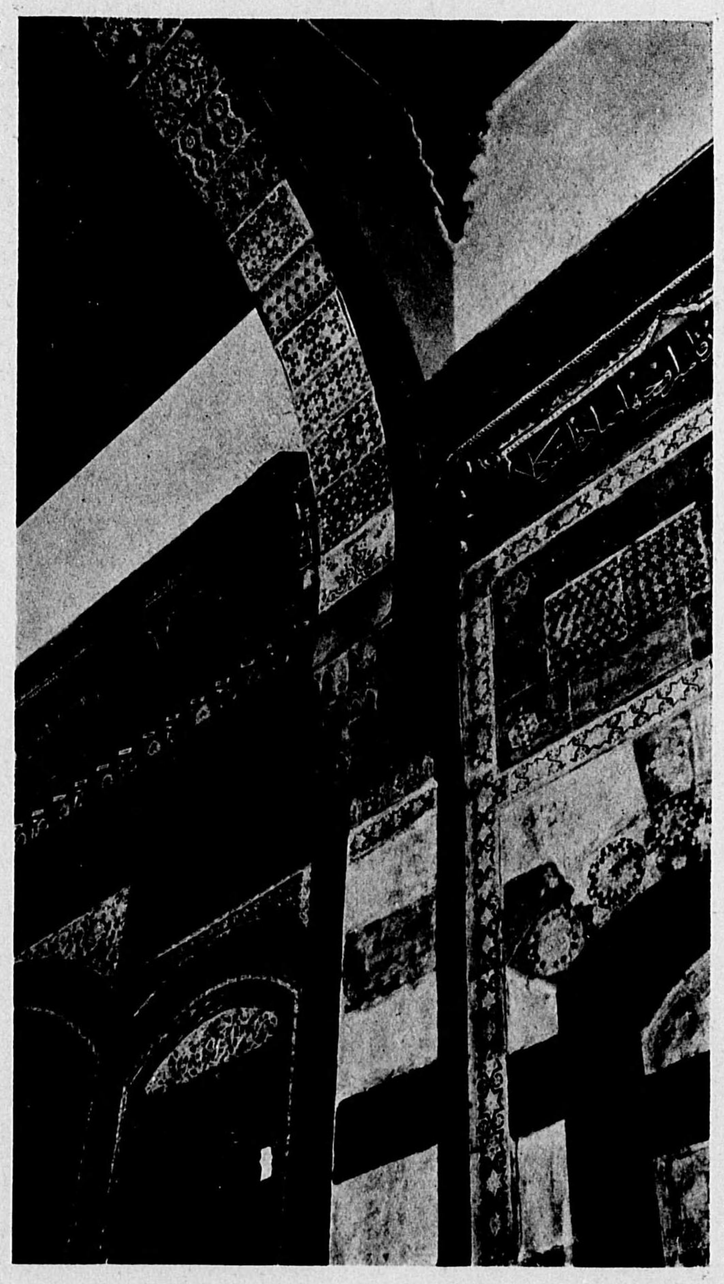
此頁上、131。オマイヤド・モスク　其一　（昭和十年十一月十一日）
此頁下、132。同　其二　（昭和十年十一月十一日）
次頁上、133。同　其三　（昭和十年十一月十一日）
次頁下、134。同　其四　（昭和十年十一月十一日）

オマイヤト・モスク(Onaiyade Mosque—Jami el-Umavi)はエルサレムに於けるドーム・オブ・ザ・ロック(136—139)と共に、此地方に於ける最重要な建築である。セオドシウスが西紀三七九年(仁德天皇の御世)に耶蘇會堂とした舊羅馬の殿堂の(次頁へ)



(前頁より)位置に建てられ、更に西紀七〇五年(慶雲二年)に回教徒が寺に改建したものであるが、遂に西紀一八九三年(明治二十六年)の火災後、原式に復原されたといふが、どうも大して感心ができない。併し前頁下圖の柱には可なり面白いのもある樣である。此頁下圖の光塔は Médinet el-Arus (Bride's Minaret) と稱し、格段な形をしてゐる。

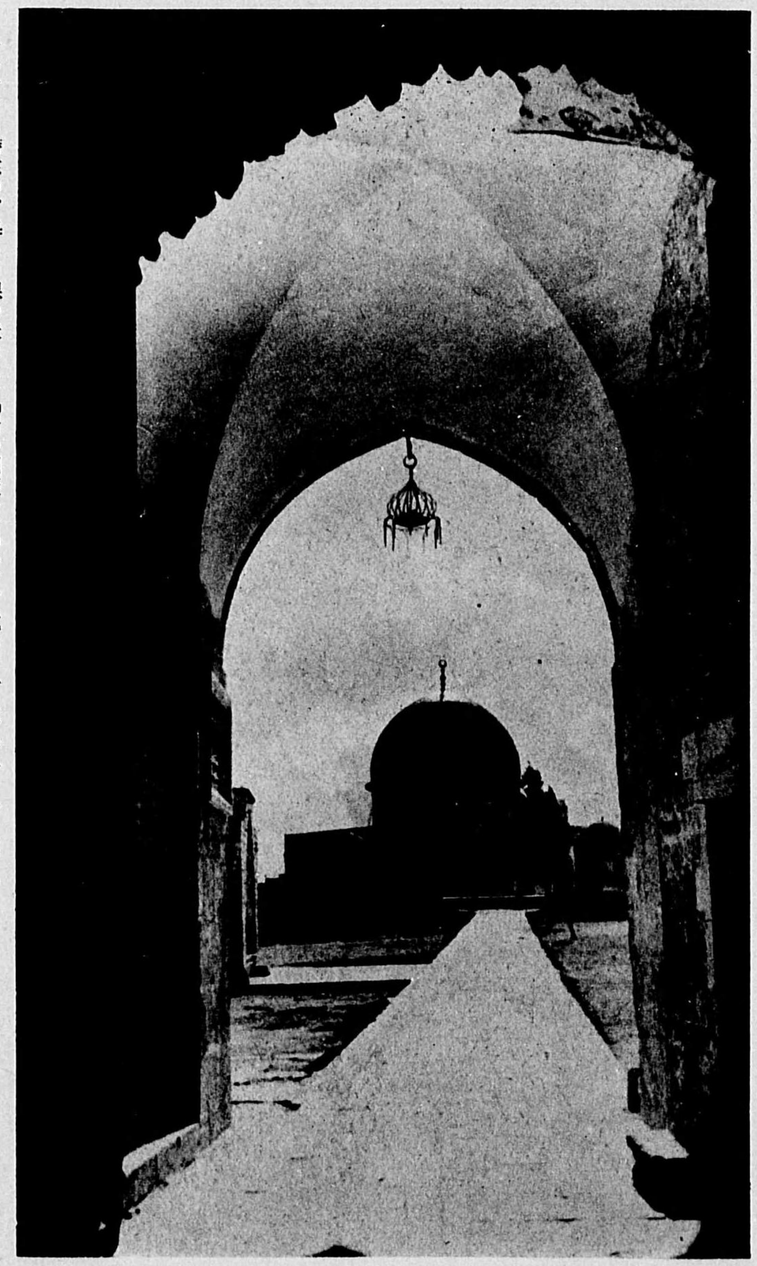
131・133に於いて、一回教徒が中庭に座具を敷き、一一立っては坐り、兩手をついて祈願を込めてゐるところは、我が臨濟宗の僧侶の禮拜の仕方と全く同一である。



135。ダマスク市舊宮殿の婦人室一部

（昭和十年十一月十一日）

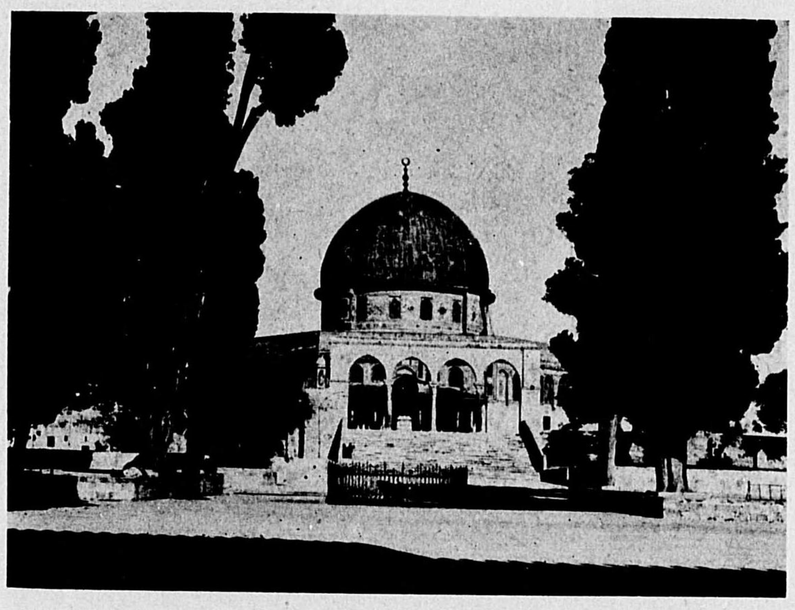
舊宮殿の婦人室ださうだが、隨所に鐘乳飾が應用されてゐる所に注意すべである。27の解説及び其圖參照の事。

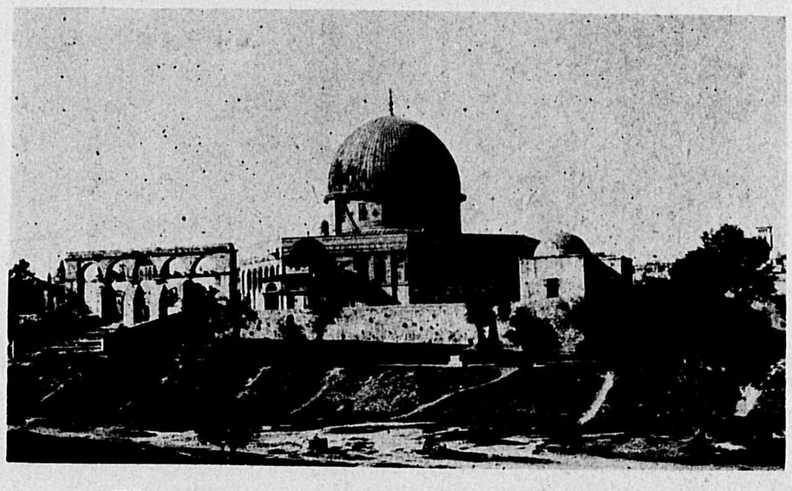


136。エルサレム市ドーム・オブ・ザ・ロック遠望

（昭和十一年十一月十日）

エルサレム滞在中、毎日日課の樣にして「岩の圓蓋」へ出かけ、境内を一人で勝手に歩き巡り、いろいろの方向からこの主要なる建築をみた。この圖はビア・ドロローサに面せる北門、バベル・アテム(Bab el-Atem)から遠望したところで、一般の遊覽者は餘り行かない方面である。

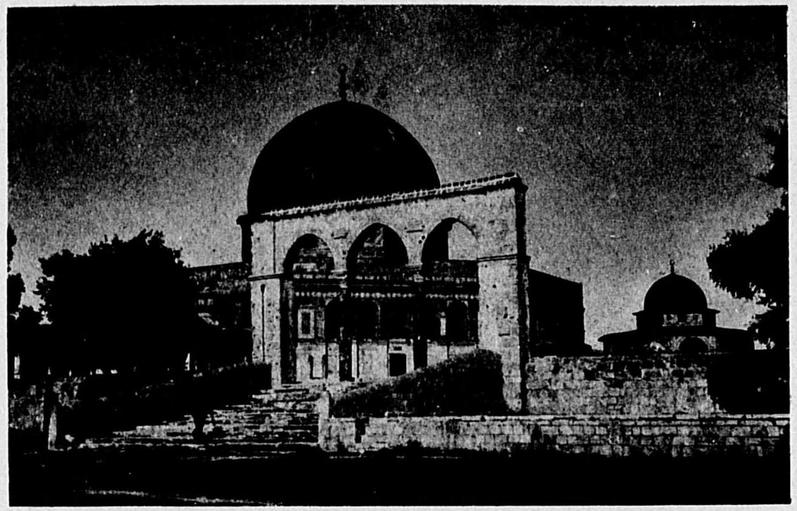


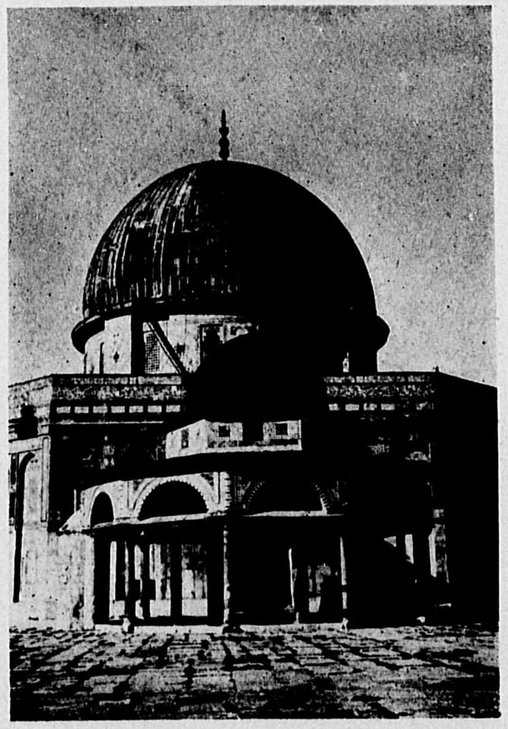


上，**137**。ドーム・オブ・ザ・ロック　其一　（昭和十年十一月十四日）

下，**138**。同　其二　（昭和十年十一月十六日）

上圖は正面卽ち南方から，下圖は東北方から，次頁上圖は東南方からの景。英人はドーム・オブ・ザ　ロック，暴夜人は Kubbet es-Sakhra といふ。直徑約 180 尺の八角形の平面を有し，中央內陣の內には 44尺×58尺 の大岩があり，此岩から（次頁へ）



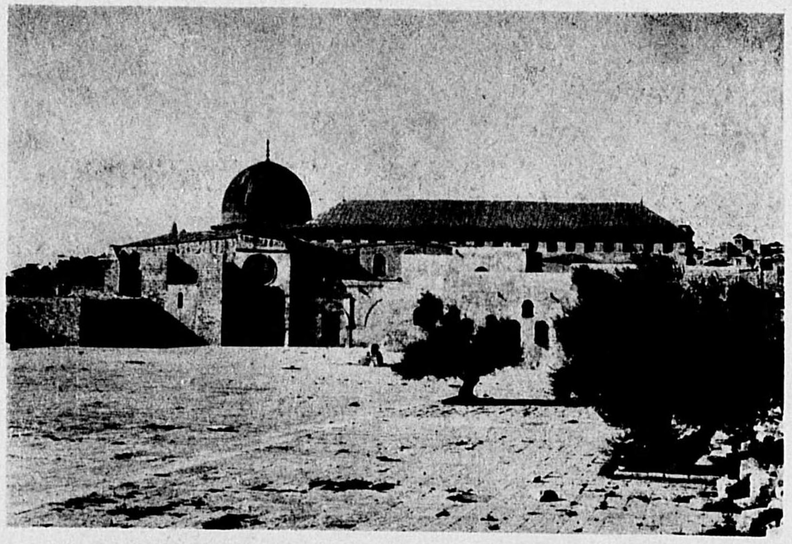


上，**139**。ドーム・オブ・ザ・ロック　其三　（昭和十年十一月十六日）

下，**140**。ドーム・オブ・ザ・チェイン　（昭和十年十一月十六日）

（前頁より）マホメットが昇天したといふ傳說がある。此建築は神聖視されてゐる岩を奉祀するためにつくられたもので，元來回教寺でもなければオーマル（Omar）の建立でもない。西紀一五六一年（元祿四年）スレイマン（ソリマン）が外部を美しい波斯瓦で覆ひ，內部を大理石板を以て化粧をした。だから現在は甚だ美しい（本文一五〇—一五三頁參照）。

此頁下圖は「岩の圓蓋」の東に隣接して建つてゐるドーム・オブ・ザ・チェイン卽ち「鎖の圓蓋」で美しい殆んど相似形の小建築（本文一五三頁參照）。



上，**141**。エル・アクサ寺側面　（昭和十年十一月十六日）

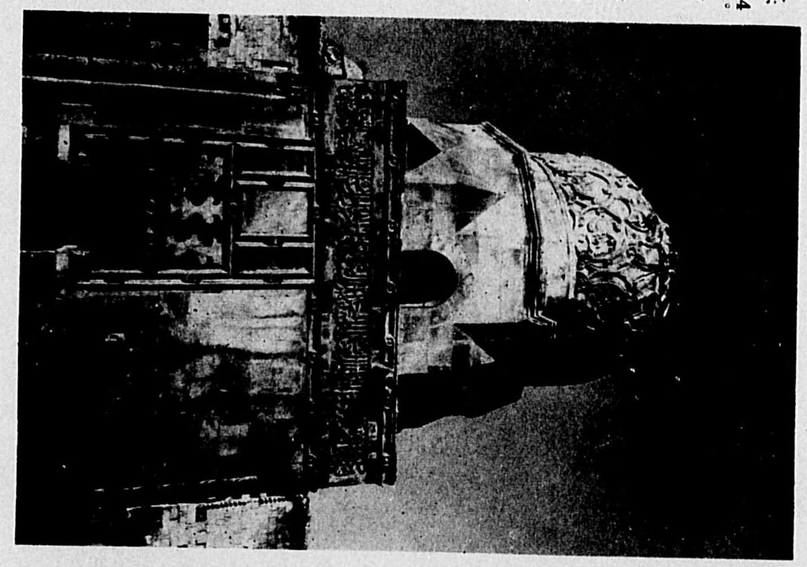
下，**142**。同　　背面　（昭和十年十一月十六日）

アクサ寺(Mesjid el-Aksa)は「岩の圓蓋」と相對し，神聖なる一廊の南端に北面して建ってゐるので，北側から寫眞がうまくとれず，止むを得ずやめにした。現今は回教寺であるが，當初はジャスチニヤン帝(483—565)が建てたバシリカ會堂である。内部に入ってみると，其事が明らかに判る。正面には七つの列拱がある。

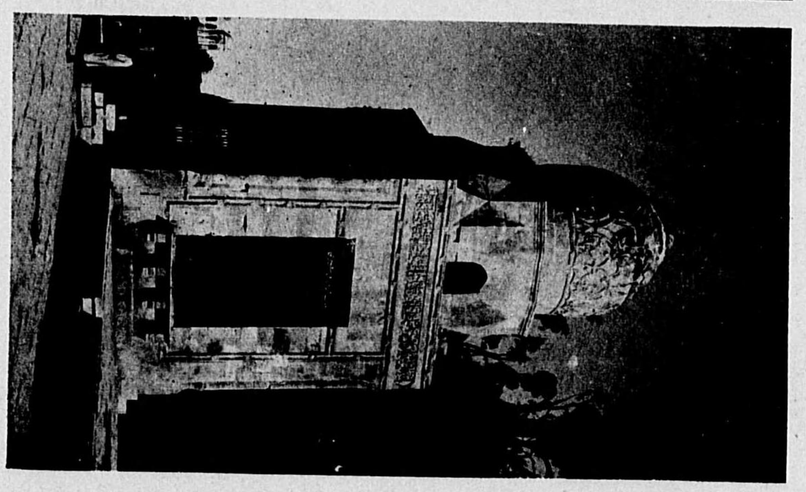
143。カイト・ベイの噴水遠望

（昭和十年十一月十六日）

「岩の圓蓋」のある場所は南が狹く北が廣い梯形をした平場の上で、其四方に昇降の爲の石階があり、そこには三・四・五連拱がある。此は西側の石階上の尖拱の間からカイト・ベイの噴水をみたもので、背景の尖拱は西側廻廊の夫。**32**—**36**と比較せよ。



上、カイト・ベイの噴水全景（昭和十年十一月十四日）



下、同　カイト・ベイの噴水部分（昭和十年十一月十六日）

145 144

カタニン町（Suk el-Kattanin）を北に発き常つた所にカタニン門（Bab el-Kattanin, Bab al-Qattanin）がある。此門を入ると斜右手に此様な美しい小石造祠がある。カイト・ベイ（Meijid el-Asḥ, of Abun-Naser Kait Bey）（1468—1496）（Sebil（Sebil）of Kait Bey）（噴水）といふ。カイト・ベイの噴水は明應二年—明應五年（建立に係る。

昭和十八年七月十五日印刷
昭和十八年七月二十日發行
二五〇〇部

坡西土より坡西土へ
㊙ 定價七圓
特別行爲稅相當額 拾五錢

著作者 天沼俊一
發行者 竹上孝太郎
京都市上京區廣小路通寺町東

印刷者（西京七） 內外出版印刷株式會社
代表者 宮崎勇治
京都市下京區西洞院通七條南

出版協會承認
あ 410號

版權所有

發行所 京都市上京區廣小路寺町東
立命館出版部
電話上㊀四八六二一番
振替〈大阪二六九四四番
東京七五六二番
會員番號一四〇五一六番

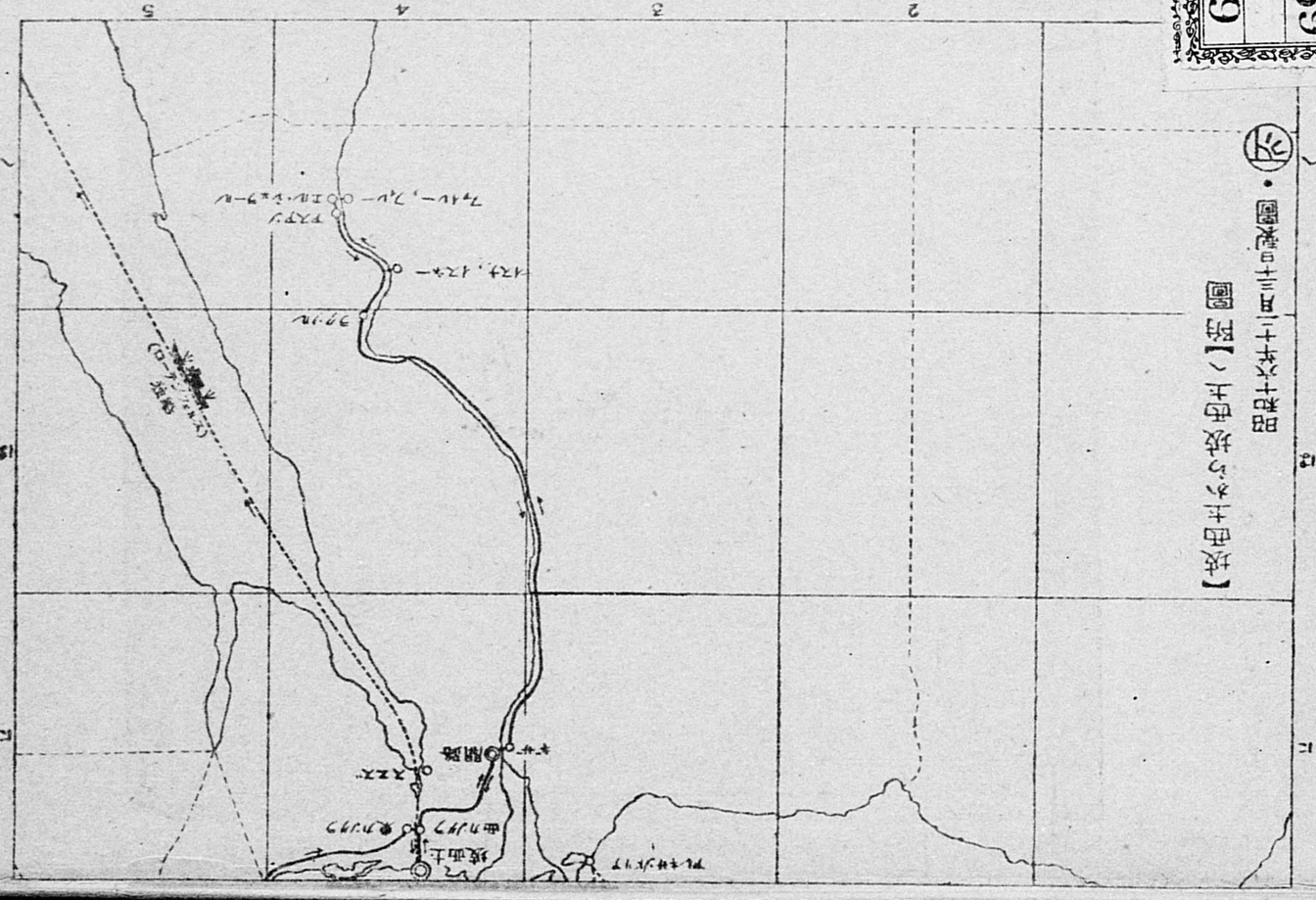
賣價 七圓拾五錢

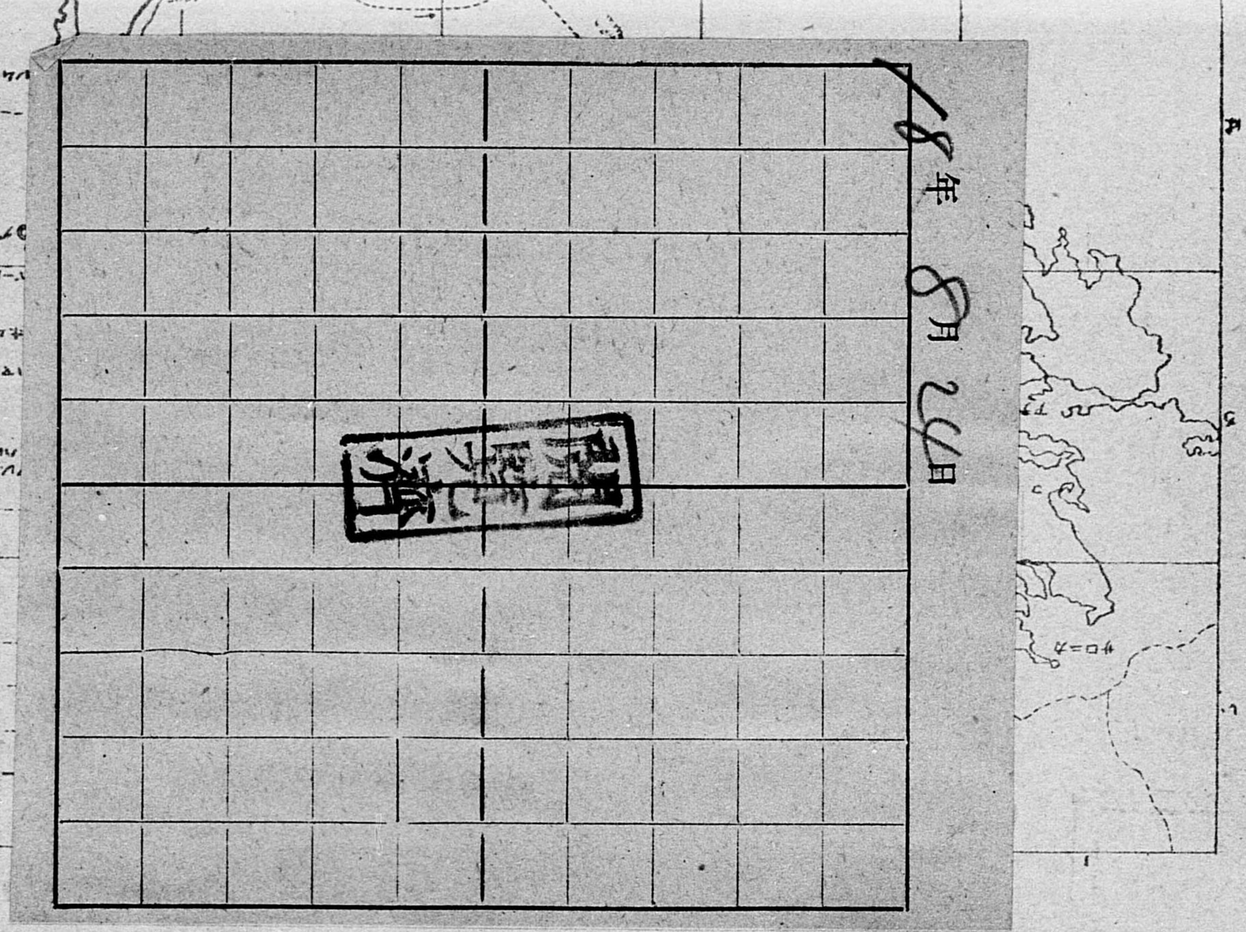
配給元 日本出版配給株式會社 東京市神田區淡路町二丁目九

本文正誤表

口繪及び附圖に誤りがあれば、できるだけ正すべきだが、間に合ひかねたので、取敢へず本文だけの正誤表を付することにした。よく見直したら脱漏もあらうが、その邊は讀者の諒察を乞ふ次第である。

頁	行		
四七	七	59	79
六八	七	峨峨なる	峨峨たる
九二	五	は Turkish bath	Turkish bath は
一〇三	一	(92—103)	(92—105)
一三五	解説一	グマス	ダマス
一四五	一三	返事待	返事を待
一四九	解説一	セパルカアル	セパルカアに





Part plate

8月 26日 18年

浴